【科目名】	国際関係論Ｂ		International Relations B		
【科目種別】	LC4学部基盤科目		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜4限	【オフィス・アワー】	金曜4限
【科目責任者】	飯野　光浩				
【担当教員】	飯野　光浩				
【授業目標】					
●授業目的	国際経済関係論は国際関係における政治と経済の相互作用を研究する学問である。現在の国際経済環境は複雑であり、大きな転換期を迎えている。経済が停滞する先進国と経済成長が著しく台頭する新興国という構図の世界経済で、IMF、WTOなどの国際経済機関、G20などの国際経済組織、為替相場制などの国際通貨体制、貿易自由化交渉などでの新興国の役割が拡大している。しかし、現在の新興国は、第2次大戦後先進国が築いてきた既存の制度や秩序に従おうとせず、それに挑戦するような姿勢を強めている。 　このように複雑な世界経済を理解する上で、必要不可欠な国際経済関係論の基礎を習得することが目的である。				
●到達目標	この複雑化した現在の国際経済関係を解きほぐして、これらに関する課題を自分の力で解決するための礎を築くことである。				
【授業概要】	授業目的に沿って、本講義では最初に基礎編として国経済関係論の代表的な考え方を学習して、その後応用編として、通商政策・制度や国際金融・国際通貨制度、グローバル化と地域統合について、これまでの歴史と基礎編の考え方を踏まえながら学習する。				
【授業方法】	基本的には講義形式だが、適宜小テストを実施する。				
【授業展開】	詳細は講義初回のガイダンスのときに配布する予定表を参照のこと。 第１回：オリエンテーション、「国際経済関係論とは何か？」 第２回：「国際経済関係論の代表的な考え方」 第３回：　　〃 第４回：　　〃 第５回：「貿易自由化の国際経済関係論」 第６回：　　〃 第７回：　　〃 第８回：「国際通貨体制の国際経済関係論」 第９回：　　〃 第１０回：　　〃 第１１回：「グローバル化と地域統合の国際経済関係論」 第１２回：　　〃 第１３回：　　〃 第１４回：「途上国の経済開発の国際経済関係論」 第１５回：まとめ				
【履修条件】	現在の世界経済の動きに関心があること。				
【評価方法】	中間試験や期末試験、小テストを総合的に勘案して、評価する。 評価割合は中間試験35%、期末試験35%、小テスト30%である。				
【テキスト】	毎回、事前にレジメをユニパの授業資料管理に掲示する。				
【参考書】	「国際政治経済」飯田敬輔　東京大学出版会 「世界システムの政治経済学」ロバート・ギルピン　東洋経済新報社 「グローバル資本主義」ロバート・ギルピン　東洋経済新報社				
【備考】					
【社会人聴講生】	聴講可 受入条件：当該科目を履修する正規学生と同等の学力を有すること	【科目等履修生】	履修可 受入条件：当該科目を履修する正規学生と同等の学力を有すること	【交換留学生】	不可

【科目名】	比較言語論Ｂ		Comparative Studies on Languages B		
【科目種別】	専門プログラム（グローバル・コミュニケーション）（令和7年4月以降に入学したものについては、グローバル・コミュニケーションおよび比較文化）		【配当年次】	２～４	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜3限	【オフィス・アワー】	水曜日５限
【科目責任者】	長野明子				
【担当教員】	長野明子				
【授業目標】					
●授業目的	ことばの普遍性と多様性を理解するためには、比較という視点が欠かせない。本科目では、日本語と英語の具体例・実験例を見ながら，言語学の基礎理論と、ことばを科学的に研究する方法について学ぶ。身に付けた仮説検証の考え方を実生活における問題解決に応用することを目指す。				
●到達目標	（１）仮説を立てて検証するという科学の研究プロセスを理解している。 （２）日英語の音と語と文の構造や、運用面について、言語学の基礎理論を理解している。 （３）先行研究をモデルにして自分で課題を設定し、仮説や実験を構想することができる。				
【授業概要】	日英語を比較しながら、言語理論や言語実験について学ぶ。知識定着のための実践演習を含む。				
【授業方法】	教科書を用いて日本語で講義する。学生は基本知識について予習をして授業に臨み、授業ではデータ分析や発表・討議を行う。				
【授業展開】	1 ことばの知識の特徴 2 言語知識の研究方法 3 心と脳の働きとしてのことば 4 音の文法（１）音素と異音 5 音の文法（２）アクセント、連濁 6 語の文法（１）屈折とそのメカニズム 7 語の文法（２）派生とそのメカニズム 8 語の文法（３）動詞の意味分解 9 文の文法（１）使役文の構造と脳内処理 10 文の文法（２）受動文の構造と脳内処理 11 文の文法（３）疑問文の構造と脳内処理 12 意味語用論（１）直示表現 13 意味語用論（２）世界知識 14 手話から迫る言語の普遍性と多様性 15 まとめと今後の課題				
【履修条件】	特になし				
【評価方法】	学期末レポート50%、随時だされる課題30%、授業内演習20%（欠席４回でレポート提出資格を失う）				
【テキスト】	『ことばを科学する―理論と実験で考える、新しい言語学入門』伊藤たかね，朝倉書店，東京. https://www.asakura.co.jp/detail.php?book_code=51074&srsltid=AfmBOoqohOnJYH-SB-vLHwJqSfLKvywSqBdf5ZfaD29vSvTD4V0k2KZe				
【参考書】					
【備考】	担当教員は、東京言語研究所における言語の調査・研究に携わっている。また、翻訳者としての実績をもつ。こうした実務経験も踏まえて講義を行う。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	現代ロシア・東欧論B		Contemporary Russian and East European Studies B		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域研究・フィールドワーク）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜3限	【オフィス・アワー】	設定なし
【科目責任者】	浜　由樹子				
【担当教員】	浜　由樹子				
【授業目標】					
●授業目的	地域研究の役割は、その地域・国の内在的論理を説明することにある。本講義では、ロシアやウクライナをはじめとする旧ソ連構成国、東欧諸国を題材に、これらの地域の視点からは現代国際関係がどう見えているかを理解し、それを自分の言葉で説明できるようになることを目的とする。世界の見え方は一つではないことを体感すれば、自分の立場を相対化することにもつながるであろうし、それは国際的な場で必要な視角の獲得につながるだろう。				
●到達目標	現代国際関係を考えるにあたり、表面的な時事解説やpresentismにとどまらない視点を獲得する。同時に、事象を相対的に捉える姿勢を身につける。長期的かつ複眼的な視野で眺めるトレーニングを経れば、日々のニュースが違った角度から見えるようになる。				
【授業概要】	2022年に始まったロシア・ウクライナ戦争を機に、両国への関心が劇的に高まった。膨大な情報が行き交う一方、短期的時事解説で「分かったつもり」になっていたり、善悪二元論で思考が停止していたりすることも多いだろう。しかし、戦争に至るような対立とは、いくつもの要因が長いタイム・スパンの間に重なって生じるものである。冷戦の「終わり方」とポスト冷戦の国際秩序のあり方、旧東側の体制転換の経験とその影響、ソ連崩壊時に積み残された諸問題、ロシアの自尊心と「西側」への心情的反発、ヨーロッパとの関係と変容、アジア地域への接近、グローバル・サウスの動向…etc.　これらの現象を理解するためには、ロシアの政治指導層や国民の目に世界がどのように映っているのかについて、豊富な知識に基づいて想像をめぐらせる必要がある。本講義では、1991年に新生ロシアとして始まり現在に至るロシア外交の展開を追いつつ、地域の視点からこれを捉え直す。				
【授業方法】	基本的には講義形式であるが、視聴覚教材、講読課題、プロジェクト型のグループ・ワーク等を織り交ぜながら進める。				
【授業展開】	１　オリエンテーション ２～３　ロシアの外交の変遷（1991年～2014年） ４　ロシアの対中東政策 ５　ロシアの対アジア太平洋地域政策、BRICS ６～８　ウクライナ問題（～2021年） ９～10　ロシア・ウクライナ戦争 11～13 「歴史」の政治紛争化 14～15　世論と社会				
【履修条件】	「現代ロシア・東欧論A」の内容とそこで得たであろう知識を前提に講義を進めるため、「A」を履修済みであること。制度的には「B」のみを履修することも可能であるが、内容理解はかなり厳しくなることが予想される。「A」を未履修で「B」のみを履修する場合は、塩川伸明『現代史の起点：ソ連終焉への道』岩波書店、2025年　を読了して授業に臨むこと。				
【評価方法】	学期末試験で評価する（100%）。 ただし、理解度を測る目的で不定期に課すコメントペーパーも参考にする。 主体的な学びの姿勢を重視するため、3回以上の欠席で成績をダウングレードし、5回の欠席で失格とする。				
【テキスト】	塩川伸明編『ロシア・ウクライナ戦争：歴史、民族、政治から考える』東京堂出版、2023年（定価3800円）				
【参考書】	松里公孝『ウクライナ動乱：ソ連解体から露ウ戦争まで』ちくま新書、2023年ほか。 その他の参考文献については授業中に紹介する。				
【備考】	質問や相談は授業の前後に受け付ける。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	不可

【科目名】	現代中国論Ｂ		Contemporary Chinese Studies B		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域研究・フィールドワーク）		【配当年次】	2-4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	木曜4限
【科目責任者】	大野絢也				
【担当教員】	大野絢也				
【授業目標】					
●授業目的	改革開放以後の中国が進めた内政や外交の過程について学ぶ。				
●到達目標	①現代中国の抱える問題について理解するための基礎的な知識を習得すること。 ②現代の国際環境における中国の立場は、いかなる内外の背景のもとで形成されてきたのか、その過程を理解すること。 ③現在の中国における内政や外交に関する個別の論点について、自らの意見や見解を説明できるようになること。				
【授業概要】	本授業では、「現代中国論A」に引き続き、現代中国の政治外交における様々な論点についての理解を深めることをねらいとしている。特に、改革開放以後の中国が進めた内政や外交の過程について着目する。現在の中国外交や内政を理解する上で、鄧小平時代以降に展開された政治外交史の基礎知識は不可欠である。天安門事件や一国二制度の開始、香港返還など個別の事象にも焦点を当てながら、改革開放という政策の大転換によって中国がどのように変容したのか考察する。本授業では「現代中国論A」の内容も踏まえながら、現代世界と中国との関係の変容過程を把握した上で、それが中国政治にどのような影響を与えたのかを見ることで、現代中国の基本問題を理解することを目指す。				
【授業方法】	基本的に対面形式で講義を進める。その他、各学期の導入（初回）と総括（最終回）において、グループワークを実施する。グループワークでは、導入において現在の中国が抱える問題に関するキーワードを抽出し、総括では自らの考えについて意見を表明し、グループ毎で討論を行う。				
【授業展開】	第１回　初回ガイダンス・導入（グループワーク：キーワードの抽出） 第２回　改革開放路線への転換：急速な経済成長の端緒と展開 第３回　戦後中国の政治的総括“建国以来の党の若干の歴史的問題に関する決議” 第４回　中国の国際社会への復帰：西側諸国との外交関係の構築 第５回　友好姉妹都市関係の構築：都市間の民間交流という試み 第６回　中英間の香港問題交渉：イギリスから見た香港返還 第７回　ソ連崩壊の東アジアにおける影響：冷戦の終結と天安門事件 第８回　中間の振り返り（グループ・ディスカッション） 第９回　改革開放路線への回帰：鄧小平の南巡講話と経済建設 第１０回　一国二制度という試み：香港・マカオ・その先に想定された台湾統一 第１１回　「世界の工場」となった中国：WTO加盟とサプライチェーンの構築 第１２回　世界の経済情勢と「一帯一路」：大規模インフラ整備の実態 第１３回　技術開発とイノベーション：中国の最先端技術と抱える課題 第１４回　中華民族の復興：「中国夢」の掲げる未来 第１５回　総括（グループワーク：討論）				
【履修条件】	現代の東アジアや中国に関心があり、積極的に授業に参加する意欲があること。				
【評価方法】	期末試験（40%）、グループワーク（40%）、出席状況（20%。欠席3回で原則不可）、などに基づき、総合的に評価する。詳細な説明は初回ガイダンスで行う。				
【テキスト】	特に指定しない。資料を随時配布する予定。				
【参考書】	次の参考文献は、授業内容に関連する主要なものとして刊行年順に挙げる。1.唐亮『現代中国の政治：「開発独裁」とそのゆくえ（岩波新書）』岩波書店、2012年。2.益尾知佐子、青山瑠妙、三船恵美、趙宏偉編『中国外交史』東京大学出版会、2017年。3.堀和生、萩原充編『「世界の工場」への道：20世紀東アジアの経済発展』京都大学学術出版会、2019年。4.毛里和子『現代中国：内政と外交』名古屋大学出版会、2021年。5.川島真、小嶋華津子編『習近平の中国』東京大学出版会、2022年。その他、初回ガイダンス時に参考文献リストを配布する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	現代ヨーロッパ論B		Contemporary European Studies B		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域研究・フィールドワーク）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜2限	【オフィス・アワー】	月曜3限
【科目責任者】	小窪千早				
【担当教員】	小窪千早				
【授業目標】					
●授業目的	現代のヨーロッパ政治に対する理解を深める。				
●到達目標	欧州の外交・安全保障政策や、欧州における様々な国際機構について理解を深めるとともに、EUおよび欧州各国が取り組んでいる政策など、現代欧州の諸相について理解を深める。				
【授業概要】	現在の欧州連合（EU）は、経済統合以外にも様々な分野に統合の領域を広げており、外交や安全保障の分野でも共通の政策を推し進めている。また欧州にはEU以外にもNATOやOSCEなど様々な国際機構があり、それらの機構が重層的に並存し、ある種の補完関係を形成している。本講義では、現代欧州の様々な情勢の中でも特に外交・安全保障分野に焦点を当て、EU共通の外交・安全保障政策であるCFSP（欧州外交安全保障政策）およびCSDP（共通安全保障防衛政策）について説明するとともに、EU以外の欧州における様々な機構（NATO、OSCE、欧州評議会など）についても概観する。また、欧州の主要な国々の政治についても焦点を当て、現在の欧州諸国の政治の様々な課題について多角的な観点から考察する。さらに日本とEUおよびNATOとの関係についても概説する。				
【授業方法】	講義形式で進める。				
【授業展開】	後期　欧州の外交・安全保障と欧州諸国の政治 1. イントロダクション 2. EUの共通外交政策（CFSP） 3. EUの共通安全保障政策（ESDP/CSDP）：その起源と仕組み 4. EUの共通安全保障政策（ESDP/CSDP）：作戦の展開とその特徴 5. 国際安全保障におけるEU - NATO関係 6. NATO（北大西洋条約機構）：冷戦後の変容 7. NATOの現在と国際安全保障 8. 欧州における様々な国際機構（OSCE、欧州評議会など） 9. 欧州統合と主要国の政治：総論 10. 欧州統合と主要国の政治：フランスの例 11. 欧州統合と主要国の政治：ドイツの例 12. 欧州統合と主要国の政治：イギリスの例 13. 欧州統合と主要国の政治：補遺（その他の例） 14. 日欧関係の歴史と展望 15. まとめ （※各回のテーマは講義の過程で若干変わる可能性がある。）				
【履修条件】	「現代ヨーロッパ論A・B」を連続して履修することが望ましい。どちらか一方だけを履修することは妨げないが、特に「現代ヨーロッパ論B」は「同A」で話した内容を前提に講義を進めるので、「現代ヨーロッパ論B」を履修する学生には、前期に「現代ヨーロッパ論A」を履修しておくことを強く勧める。				
【評価方法】	期末試験の結果を中心に評価する。				
【テキスト】	教科書は特に指定しない。 各回にレジュメ等資料を配布する。				
【参考書】	授業の過程で随時紹介する。				
【備考】	原則対面授業のみの形式で行う。 静岡大学との単位互換対象科目である。				
【社会人聴講生】	社会人聴講生履修可。 本学国際関係学部生を優先し、座席に余裕があれば認める。	【科目等履修生】	科目等履修生履修可。 本学国際関係学部生を優先し、座席に余裕があれば認める。	【交換留学生】	交換留学生履修可。

【科目名】	現代東南アジア論Ｂ		Contemporary Southeast Asian Studies B		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域研究・フィールドワーク）		【配当年次】	2～4年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜5限	【オフィス・アワー】	火曜２限
【科目責任者】	吉田航太				
【担当教員】	吉田航太				
【授業目標】					
●授業目的	東南アジアの社会と文化を、文化人類学的な観点から理解する。				
●到達目標	東南アジア各国が抱える現代的な課題を文化や社会の観点を踏まえて多面的に捉える視点を養い、学術的に思考できるようになる。				
【授業概要】	本講義では、東南アジアの現代的な課題をテーマとして扱い、日本や欧米と比較した東南アジアの社会や文化の特徴を学んでいく。 前期では講義形式の授業を行ったが、今年度の後期では実験的に、昨年出版されたばかりの『東南アジアで学ぶ文化人類学』を用いて、ディスカッションを中心とした授業を行う。 東南アジア地域の様々なトピックについて日本の専門家が書いた書籍をテキストとして使いながら、東南アジアの具体的な社会・文化のあり方を知るだけでなく、グループディスカッションを通じて自らの日常生活で築き上げられてきた暗黙の考え方を相対化し、同じ世界に暮らす一員として異文化を捉える方法を受講者と共に考えていきたい。				
【授業方法】	この授業では「反転授業」と呼ばれる、事前学習をしっかり行った上で授業ではディスカッションを通じて内容の理解を深めていく形式で行う。 受講者はあらかじめ指定した教科書の各章を読んでおき、章末にある「課題」についての回答をユニパで提出する。授業では講師による解説を行った上で、準備していた回答をもとにグループディスカッションを行って受講者の間で理解を掘り下げる。授業後にはディスカッションを通じて考えたことを記入したミニレポートをユニパで提出する。				
【授業展開】	１．授業ガイダンス ２．親族と家族――家族にとって血のつながりは欠かせないものか ３．ジェンダーとセクシュアリティ――人間の性はどのように多様で複雑か ４．民族とエスニシティ――「民族」の境界はどう決まるのか ５．歴史と記憶――他者の多様な過去にどう関わるのか ６．国家――国家にどう向き合う？ ７．経済とモラル――「豊かさ」は数値で測るだけで十分なのか ８．法と慣習――法は私たちを縛り、罰するためのものか ９．呪術と宗教――「信じること」は宗教に不可欠なのか １０．医療――人は心身の問題にいかに向き合っているのか １１．難民――難民が創るつながりとは何か １２．移民――移民は特別な人たちか １３．観光――文化が観光によって創られる？ １４．開発と貧困――人類学は貧困削減に貢献できるのか				
【履修条件】	履修条件は特にないが、東南アジアに関心を持って自ら積極的に授業に参加するのが望ましい。				
【評価方法】	各回で授業前・授業後に提出する課題および授業中のディスカッションの貢献を踏まえて評価する。期末レポート・期末試験は設けない。				
【テキスト】	曲在弘・二文字屋脩・吉田ゆか子編（2024）『東南アジアで学ぶ文化人類学』昭和堂（定価2,860円（税込））（第2回の授業までに各自で用意してください）				
【参考書】	講義中に適宜紹介する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可 （要、事前相談）	【科目等履修生】	科目等履修生履修可	【交換留学生】	留学生の受講を歓迎する。

【科目名】	フランス語Ⅲ B		French ⅢB		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域言語）		【配当年次】	2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜2限	【オフィス・アワー】	domyyata@gmail.com 件名に、必ず授業名と名前を書いてください
【科目責任者】	剣持 久木				
【担当教員】	矢田ドミニク				
【授業目標】					
●授業目的	＊聞く・話す・書くといったコミュニケーションの鍵となる能力を獲得します。 ＊自分の言いたいことを簡潔にまとめる力、つまり情報に優先順位をつけ、話を整理する力や、自然な会話や作文に必要な表現を学習します。 ＊上記の能力を会話に適用します。 　文化の違いや特色を考慮に入れながら、フランス語話者との会話方法を学びます。 ＊1年間の授業が終わるころには、あらゆるテーマについてフランス語で流暢に会話できるようになることを目標とします。また、同様に文章作成の能力も身につけることを期待します。				
●到達目標	＊フランス語の会話を練習しながら、A2レベルのフランス語の文章を理解できるようになります。 ＊日常生活で使うフランス語を、読む・書く・聞く・話すことができるように練習します。				
【授業概要】	フランス語の会話を練習しながら、A2レベルのフランス語の文章を理解できるようになります。 日常生活で使うフランス語を、読む・書く・聞く・話すことができるように練習します。 フランス語の会話を練習しながら、A2レベルのフランス語の文章を理解できるようになります。 日常生活で使うフランス語を、読む・書く・聞く・話すことができるように練習します。 話す、書く、読む力を伸ばすための授業です。フランス語の文章構造を理解し、作文ができることを目指します。1年次に学んだフランス語を実践的に使い、より高度なフランス語を身につけます。日常のさまざまな場面に対応できるように練習します。				
【授業方法】	1年次に習ったフランス語を復習し、作文につなげていきます。形（パターン）を理解した後、基礎練習と応用練習を行います。会話練習をしたり、メールやストーリー、発表の文章を書いてみたりします。会話練習はグループで行います。受講者には積極的な発言と文章作成が求められます。 ※授業計画はあくまで予定です。受講者の理解度に応じて進度を随時調整します。				
【授業展開】	1．　自分の国の祝祭について発表することができる。 2．　観光地のアクティビティについて話すことができる。 3．　短いおとぎ話を書くことができる。 4．　日常生活について過去形と未来形で話すことができる。 5．　商品の広告を作ることができる。 6．　CMのストーリーを説明できる。 7．　中間テスト 8．　自分の意見をフランス語で説明し、伝えることができる。 9．　住んでいる場所について話すことができる。 10．くだけたフランス語を理解することができる。 11．丁寧な文でメールを書くことができる。 12．会話を面白くすることができる。 13．さまざまな話題で雑談することができる。 14．復習 15．　期末試験				
【履修条件】	フランス語I A,BとII A,Bを履修していること。				
【評価方法】	出席状況、授業での取組（25%）、到達度を測るためのテスト・小テスト（25%） 期末試験（50%）				
【テキスト】	教科書名　『Moi, je... コミュニケーションA2』 発行所　　アルマ出版 著者　　Simon Serverin, 他 ISBN: 978-4-905343-44-8 (nouvelle édition, parue en 2025)				
【参考書】	仏和と和仏辞書を使います。				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	国際関係史Ｂ		History of International Relations B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	1	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	水曜4限 一般教育棟2404
【科目責任者】	森山優				
【担当教員】	森山優				
【授業目標】					
●授業目的	国際関係学部の学生として、自国の歴史について必要かつ最低限度の基礎知識を獲得する				
●到達目標	上記目的を達成し、現代の国際関係について考える姿勢を身につける。				
【授業概要】	戦後（1945年以降）の日本外交を通史的に概観する。概要は授業計画を参照。				
【授業方法】	講義（対面） 受講者は毎時間、リアクションペーパー（A5サイズ程度）の提出を求められる。学生からの講義へのフィードバックを重視する				
【授業展開】	後期 1. ガイダンス 2. 「かの戦争」をめぐる議論 3. 敗戦と占領 4. 占領改革 5. 独立の回復と講和条約①　主権回復と講和条約 6. 独立の回復と講和条約②　安全保障問題 7. 日米関係と日本の外交 8. 戦後日ソ関係 9. 戦後日中関係①　二つの中国 10. 戦後日中関係②　日中国交回復 11. 戦後日韓関係①　植民地支配と南北分断 12. 戦後日韓関係②　国交回復への長い道のり 13. 敗戦処理と東南アジアとの関係①　インドネシアとの関係 14. 敗戦処理と東南アジアとの関係②　フィリピンとの関係 15. まとめ				
【履修条件】	高校日本史・世界史の常識的な知識を前提とする。 テキストの該当部分は事前に目を通して受講すること（図書館備え付け。購入の要否は個人の判断に任せます）。				
【評価方法】	学期末に実施される試験（対面） 毎時間ごとに提出されたリアクションペーパーの多寡が成績評価に若干の影響を与える可能性がある				
【テキスト】	細谷千博『日本外交の軌跡』（NHKブックス）				
【参考書】	井上寿一『日本外交史講義』（岩波書店） 五百旗頭真『日米戦争と戦後日本』（講談社学術文庫） 高崎宗司『検証・日韓会談』（岩波書店） 浅野豊美編著『戦後日本の賠償問題と東アジア地域再編』（慈学社出版）				
【備考】	開講形態 対面のみの形式				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可。 ５人を限度とする。	【科目等履修生】	科目等履修生履修可。 ５人を限度とする。	【交換留学生】	

【科目名】	民法Ｂ		Civil Law B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜1限	【オフィス・アワー】	非常勤のため研究室はないが、学生さんや社会人聴講生の質問には授業直後に教室の外でできるだけ丁寧に応じたい。
【科目責任者】	志村　武				
【担当教員】	志村　武				
【授業目標】					
●授業目的	民法はわれわれの生活の中で最も基本的な法律であり、民法が分かると他の法律も理解できるようになります。まず六法の中の民法の具体的な条文を読んで民法を理解し、具体的な事実に適用し、その結果、どのような効果が生じるかを分かるようにしましょう。そうすれば、テレビやネットで報道され世間の注目を集めている最新のニュースについても法律的に何が問題で、裁判の結果どのような結論になるかを分かるようになります。このようにわれわれが生活する上で避けて通ることができない民法や他の法律を理解して日常生活に役立つ知恵をしっかりと身につけることを第一の目的とします。 また民法は公務員試験や司法試験を初めとする宅地建物取引士や行政書士、社労士、司法書士などの資格試験の必須試験科目でもあるので、複数のロースクールや学部で長い教育経験を有する講師がその経験を活かして、受講者が合格に役立つ勉強の仕方を身につけることができるようにすることを第二の目的とします。				
●到達目標	日常生活において最も基本的なルールである民法について理解し、基礎的知識を習得し、法適用による法的紛争処理の能力を養う。日々、テレビや新聞で報道される身近に起きている事件や事故について、民法上どのような問題であり、どのような解決が可能であるかについて自分なりに批判的に考えることができるようになる法的思考力（リーガルマインド）を養成する。				
【授業概要】	民法はわれわれ私人間の紛争を解決する最も基本的な法律であり、われわれの日常生活に最も密接に関係している法律です。なかでも、契約法と不法行為法は民法の最も中心的な法分野です。この現代社会では、我々は契約を締結しなければ一日も生きてゆけない、といっても過言ではないのです。「朝起きて蛇口をひねって水を出して顔を洗い、草薙駅前からバスに乗って大学に来て、昼には購買で買ったサンドイッチを食べ、授業後、バイトのカテキョウをして、家（賃貸アパート）に戻り、テレビを見て、彼（女）から電話で結婚を申し込まれ、嬉しかったので寝付かれず小説を読み、消灯して寝た（と日記には書いておこう！？）」。このうちいくつ契約を締結していると思いますか？意識すると否とに関わらず、数多くの契約を締結しなければ、このようなごくありふれた日常生活を営むことすらできないのです。蛇口をひねっても水が出なかったら？草薙駅前でバスを待っていたら酔っぱらい運転の乗用車がバス待ちの行列に突っ込んできて全治3ヶ月の大けがをしてしまったら？バスが急ブレーキをかけたので足をねんざしてしまったら？大好きなハムサンドを買ったものだと思って袋を開けたらアレルギーで食べれない卵サンドが入っていたら？カテキョウで明日から来なくていいと言われてしまったら？大家さんが家賃の値上げに応じなければ出て行けと言ってきたら？買ったばかりのテレビがよく映らなかったら？彼（女）が結婚の話はなかったことにしてくれと言ったら？……どうしよう！他人事ではありません！ 任せなさい！ローマ以来の名も知れぬ庶民の汗と涙と愛と憎しみとが、それぞれの時代の最高の知性ともいうべき法的思考力（リーガルマインド）のもとで、それこそ気も遠くなるような長い長い時間をかけて発酵し熟成し析出された結晶とも言うべき民法典に、答えは書いてあるのです。まさに我々の日常生活が紙一重のところで背中合わせになっているトラブルを未然に防ぎ、解決するための最も基本的なルールである民法、なかでも日常生活に密接不可欠な契約法の基本的な考え方や基本的な法制度・法的問題について、理解し、基礎的知識を習得し、法適用による法的紛争処理の能力を養う必要性がここにあるのです。この必要性に応えようとする授業が、この授業なのです。				
【授業方法】	世間で注目されている、民法の基本的な考え方や制度と関係ある事件や事故に関する授業日当日の朝刊記事を資料として配付し、当該事件や事故についての法的な解説を通して民法の基本事項についての知識を得て、法的な物の考え方について理解を深めていきたい。				
【授業展開】	1. この授業で学ぶこと 2.～5. 物権と債権　①物権法定主義と十種類の物権　②用益物権　③担保物権 ④非典型担保 6.～9. 代理制度　①代理と似て非なる諸制度との区別　②法定代理と任意代理　③本人-代理人間の法律関係　④代理人-相手方間の法律関係　⑤本人-相手方間の法律関係　　⑥無権代理と表見代理 10.～12.　契約の効力　1 契約締結上の過失 2同時履行の抗弁権 3危険負担 4 第三者のためにする契約 13.～15. 時効制度　1 時効制度の存在理由 2 取得時効 3 消滅時効と除斥期間 4 時効の援用、放棄、完成猶予、完成猶予及び更新				
【履修条件】	特に履修条件は設けず、社会人も法的な物の考え方を身につけたいという気持ちや民法を学ぶ意欲があれば歓迎する。				
【評価方法】	後期の授業の出席を50点満点、後期の授業で話した大きなテーマのうちあらかじめ示された２つのテーマから自分が選んだテーマ１つについて述べる期末ペーパーテストを50点満点で評価し、60点以上を合格とする。				
【テキスト】	民法Ａ、民法Ｂ共通の教科書として、 ・田山輝明 著『（民法要義1）民法総則（第4版追補版 別冊資料付き）』（成文堂） ・田山輝明 著『（民法要義6）事務管理・不当利得・不法行為（第3版）』（成文堂）				
【参考書】	なし。				
【備考】	受講者とともに具体的な事例を考えることを通じて、日々の生活や人生を送る上で何らかの役に立つ知恵としての法的な物の考え方を身につけることができるような授業としたい。 また民法が試験科目となる資格の取得を考えている学生の積極的な履修を望みたい。				

【社会人聴講生】	社会人聴講生の聴講を歓迎します。日常生活に最も密接に関係している民法を学びたいという意欲があれば大歓迎です。	【科目等履修生】	科目等履修生の聴講を歓迎します。日常生活に最も密接に関係している民法を学びたいという意欲があれば大歓迎です。	【交換留学生】	交換留学生を歓迎します。日常生活に最も密接に関係している民法を学びたいという意欲があれば大歓迎です。

【科目名】	商法Ｂ		Commercial Law B		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜1限	【オフィス・アワー】	授業終了後に教室にて対応いたします
【科目責任者】	小林道生				
【担当教員】	小林道生				
【授業目標】					
●授業目的	会社法の基本的な知識・理解を得ることを授業目標とする。				
●到達目標	1. 本講義で習得した知識に基づいて、会社法の全体像、主要な規整の内容を理解できるようになる。 2. 会社法に関する主要な判例・裁判例について、事実関係、争点、判旨の内容を理解できるようになる。 3. 新聞の経済面を読むときなどに、会社法で学んだ知識を活かそうとする意欲がもてるようになる。				
【授業概要】	会社法のうち、株式会社を対象にして、総論的内容、機関、資金調達等に関する規整を概説し、株式会社の組織と運営、また、出資者である株主や多様な会社債権者の位置づけのあり方などについて考えることにする。受講者の理解のために、企業不祥事などの時事問題についても折にふれ扱うことにする。				
【授業方法】	テキストに沿って講義し、法規定の趣旨などについて説明し、質疑等を行う。また、補足的に適宜、プリントなどを配布する。				
【授業展開】	1. 会社と会社法 2. 株式会社法の基礎 3. 機関総説（各種機関の概観と機関設計の選択肢） 4. 取締役会設置会社、委員会型会社（指名委員会等設置会社、監査等委員会設置会社） 5. 株主総会（権限、招集手続、議事運営） 6. 株主総会（議決権とその行使、株主総会決議の瑕疵を争う訴え） 7. 取締役会設置会社（取締役、取締役会の監督機能、取締役会の権限と運営） 8. 取締役会設置会社（代表取締役） 9. 取締役会設置会社（監査役、監査役会） 10. 取締役会設置会社（会計監査人、会計参与） 11. 役員等の義務と責任（役員等の義務、会社と取締役・執行役の利益衝突） 12. 役員等の義務と責任（役員等の会社に対する責任） 13. 役員等の義務と責任（役員等の責任の追及、役員等の第三者に対する責任） 14. 資金調達（総説、募集株式の発行） 15. 資金調達（新株予約権）、会社債権者保護のための規律				
【履修条件】	民法A・Bが履修済みか履修中であること。				
【評価方法】	毎回の質疑応答や議論への取り組み状況（50%）と期末の筆記試験（50%）による。前者の質疑応答は、教員からの質疑（学生が応答する）と学生からの質疑（教員が応答する）の双方を含む。				
【テキスト】	・伊藤靖史・大杉謙一・田中亘・松井秀征『会社法 第5版』（有斐閣　2021）　※商法A、商法Bで共通。 ・『ポケット六法　令和８年版』（有斐閣　2025）　※六法は最新版である令和８年版を購入してください。				
【参考書】					
【備考】	この講義は、原則として、対面授業のみの形式で行います。				
【社会人聴講生】	条件付きで受入れ 条件：民法の知識のあることを前提に講義を行います	【科目等履修生】	条件付きで受入れ 条件：民法の知識のあることを前提に講義を行います	【交換留学生】	条件付きで受入れ 条件：民法の知識のあることを前提に講義を行います

【科目名】	多国籍企業論Ｂ		Multinational Corporations B		
【科目種別】	専門プログラム（国際開発）		【配当年次】	2-4年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜4限	【オフィス・アワー】	金２
【科目責任者】	宮崎晋生				
【担当教員】	宮崎晋生				
【授業目標】					
●授業目的	多国籍企業の戦略的行動に関する理解を深め、国際社会の課題解決/解消や多層的で複雑化する国際関係をビジネスの視点から考えるようになることが目的。				
●到達目標	国境を超えて活動する多国籍企業の行動論理を踏まえ、国際社会の課題解決・解消や国際関係の複雑化に対して分析できる視点を持つこと。 国際社会の課題解決・解消や国際関係の複雑化に対して分析できる視点を持つことで、以下の能力が身につけられる。 １）民間営利企業の社会的貢献や経営戦略の国際社会に対する責任について考察する能力が身につけられる ２）地政学的リスクと国際ビジネスの関係について、業界分析を通して読み解く能力が身につけられる。 ３）実践的な国際的業界分析を通して、各国のビジネス事情や企業経営の動向について考える能力が身につけられる				
【授業概要】	講義全体を通し、国際的に展開する企業の行動に注目し、各業界での課題とその解決に向けた企業戦略やビジネスモデルの分析を行なっていく。 １）学生による調査発表およびディスカッション ２）リサーチ力とチームワーク力の鍛錬 ３）リアルタイムで変動する国際的事業展開についての情報収集能力 が身につくことが理想。				
【授業方法】	前半フレームワークについては講義形式で行う。 後半は学生が3〜4人で１チームを結成し、業界分析の調査・発表をしてもらう。 調査・発表に対するディスカッション形式で進めていく。 チームワークをおろそかにしないこと、質問力や適切なコメント・建設的提案ができる能力が求められる（講義時間外での打ち合わせ・共同作業など求められる）。				
【授業展開】	1 イントロダクション・受講にあたっての注意・チーム分け 2 第４次産業革命：監視社会化、失業増大、グローバル＆クリエイティブ人材…Orz. 3 欧州イノベーション&サステナビリティ動向：シリコンバレーとは違うモデル構築に萌えるEU 4 業界１　石油・エネルギー：「持続可能性」とどう向き合うか？ 5 業界２　ファストファッション：「スウェットショップ」は終わるのか？ 6 業界３　自動車：世界的業界再編と電動化・自動化 7 閑話休題：多国籍企業と国際社会課題に関するディスカッション 8 業界４　学生が選ぶ世界の業界分析１ 9 業界５　学生が選ぶ世界の業界分析2 10 業界６　学生が選ぶ世界の業界分析3 11 講義：途上国と財閥〜経済成長にはなぜ「財閥」が出現するか？ 12 国地域１　中華圏・華僑の財閥 13 国地域２　中東・アラブ諸国の王族グループ企業群 14 国地域３　アフリカ諸国の新興財閥 まとめ				
【履修条件】	可能なら「組織マネジメント入門」A/Bの受講がすでに済んでいるか同時に受講していることが望ましい。経営学の基本的知識が必要。				
【評価方法】	講義での貢献（調査・発表）５０％、期末レポート５０％で評価する。 講義には来ないが期末レポートだけで評価してほしい、という学生には単位を出せない。				
【テキスト】					
【参考書】	ジェフリー・ジョーンズ（安室・梅野訳）『国際経営講義―多国籍企業とグローバル資本主義』有斐閣 浅川和宏『グローバル経営入門』日本経済新聞出版				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	Welcome!

【科目名】	国際経済法ＩＢ		International Economic Law ＩB		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策） 専門プログラム（国際開発）		【配当年次】	2・3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜5限	【オフィス・アワー】	火曜2限
【科目責任者】	石川 義道（Yoshimichi Ishikawa）				
【担当教員】	石川 義道（Yoshimichi Ishikawa）				
【授業目標】					
●授業目的	本授業では、中川淳司・清水章雄・平覚・間宮勇著『国際経済法 第3版』をテキストとして用い、国際経済法の全体像を体系的に学ぶことを目的とする。国際経済法は、WTO協定を基盤とする国際貿易法のみならず、国際投資法、国際競争法、国際通貨・金融制度、国際租税法など多岐にわたる分野を含む。本授業では、それぞれの法分野の基本的な枠組みを学びつつ、近年の国際経済の変動や各国の政策が国際法制度にどのような影響を与えているかを考察する。特に、国際通商と投資のルールの変遷や、国家主権と経済的相互依存のバランスの問題について理解を深める。				
●到達目標	・国際経済法の主要な分野（WTO法、国際投資法、国際競争法、国際金融・租税法）を理解し、その体系を説明できる。 ・WTO協定の基本原則（無差別原則、市場アクセスの改善、例外規定など）を理解し、国際通商ルールの意義を論じることができる。 ・国際投資法における投資保護・自由化の原則を整理し、投資紛争解決メカニズムの仕組みを説明できる。 ・国際競争法や金融・租税法の分野における国際規制の必要性を理解し、国家間のルール形成の現状と課題を考察できる。 ・国際経済法の発展に関わる近年の争点（保護主義の台頭、WTO紛争解決手続の停滞、FTAの増加、デジタル貿易の規制など）について、実例を挙げて議論できる。				
【授業概要】	本授業では、国際経済法の主要な枠組みを学び、国際通商・投資・競争・金融・租税の各分野における法制度の意義を理解する。前半では、WTOを中心とする国際貿易法の基本原則と紛争解決手続を学び、貿易自由化と保護主義のバランスに関する課題を考察する。中盤では、国際投資法における投資保護や紛争解決メカニズムの仕組みを整理し、国家と投資家の利益の調整について議論する。後半では、国際競争法や金融・租税法の分野を取り上げ、国家主権とグローバル経済規制の相克について検討する。授業では、テキストの講読を基に、学生の報告とディスカッションを中心に進め、重要なポイントについては教員が補足解説を行う。				
【授業方法】	本授業は、学生の主体的な学びを重視し、報告とディスカッションを中心に進める。各回、指定された範囲について学生が報告を行い、それに基づいてディスカッションを展開し、教員がコメントや補足説明を加える。学生が単に座って聞いているだけの授業にはせず、積極的な議論を通じて理解を深めることを目指す。特に、WTO法や国際投資法などの実際の事例を取り上げ、それらが現在の国際経済環境にどのように適用されているかを分析する機会を設ける。また、必要に応じて教員による講義や解説を加え、理論的背景や重要な概念を整理することで、国際経済法の体系的な理解を促す。				
【授業展開】	１　イントロダクション：国際経済法とは何か（第1章） ２　ブレトンウッズ・ガット体制の成立と展開（第2章） ３　WTOの組織と紛争解決手続（第3章） ４　WTO協定の国内的実施（第4章） ５　WTO体制の基本的規律（無差別原則・市場アクセス）（第5章） ６　WTOと通商救済制度（アンチダンピング・セーフガード等）（第6章） ７　農業貿易・TBT/SPS規制とWTO（第7章） ８　サービス貿易・知的財産権とWTO（第8章） ９　WTO体制における政府調達と地域主義（第9章・第10章） １０　途上国とWTO体制（第11章） １１　貿易と非貿易的価値（環境・労働・人権）（第12章） １２　国際投資法の基本原則と投資紛争解決（第13章） １３　国際競争法・通貨・金融制度の国際規律（第14章・第15章） １４　国際租税法と経済刑法（第16章・第17章） １５　講義のまとめ				
【履修条件】	特になし。				
【評価方法】	本授業では、期末レポートは課さず、平常点をベースに評価を行う。具体的には、授業内での報告やディスカッションへの参加姿勢を重視し、発言の質や貢献度を評価の主軸とする。				
【テキスト】	中川淳司・清水章雄・平覚・間宮勇著『国際経済法 第3版』（有斐閣、2019年）				
【参考書】	参考書については適宜関連部分を配布する。				
【備考】	特になし。				
【社会人聴講生】	聴講可。	【科目等履修生】	聴講可。	【交換留学生】	聴講可。

【科目名】	日本思想概論Ｂ		Introduction to Japanese Thought B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	１年・２年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜3限	【オフィス・アワー】	水曜日５限
【科目責任者】	木澤　景				
【担当教員】	木澤　景				
【授業目標】					
●授業目的	今後、日本文化を専門的に学んでいく学生にとっては、日本思想研究の方法論と基礎的知識が習得されることを目指す。他の専門を学ぶ学生にとっては、それぞれの専門分野に対する比較対象として、また研究主体である自分の思考のクセの来処として、かつての日本人の思想とその今日への影響を考える視線を習得することを目指す。				
●到達目標	・日本思想を研究するとはどういうことかについて理解する。 ・日本思想の基礎的事項について知り、その中からみずからの問題感心に関連のあるものを想起できるようになる。 ・現在“日本”という空間において学ぶ自分が、日本思想の影響をどのように受けているかについて自覚的に認識できるようになる。 ・古文、漢文書き下し文などの古典テキストに親しむ。				
【授業概要】	日本思想の道具立て　神道・仏教・儒教 　思想はゼロからなされるものではありません。人々は、その生きた時代に支配的であった世界観に即して思想を紡ぎます。その世界観は、いわば“思想の道具立て”です。優れた思想研究のためには、研究対象のテキストが用いる道具立てに精通していることが求められます。本講座では、神観念、仏教、儒教がいかなる思想の道具立てであるか、それを利用してどのような思索がなされるのか、日本思想研究の基本にして、最重要のことがらを扱います。仏教や儒教を説明するときには、インドや古代中国で起こった思想を解説することになりますが、理解のための材料は日本人の思想家のものを用い、日本的理解に即して検討していくことにします。高度な日本思想研究をしていく方にとってはもちろんのこと、そうでない方にとっても普段の生活の中にある神道的要素、仏教的要素、儒教的要素を知る機会として価値のある講座を目指してまいります。				
【授業方法】	対面講義形式を基本とします。動画教材の視聴等を自主学習課題として出す場合がありますので、ストリーミング視聴ができるようなネット環境は整えておいてください（大学のPCでも視聴可。）毎回のリアクションペーパーや自由討議の場での積極的な参加や発言を求めます。				
【授業展開】	※参加者の興味関心に基づいて講義展開をそのつど決定していく。以下は一例。 第一回　ガイダンス（受講する上での連絡事項等の告知）／現代日本の人間観／なぜ「人間」なのか？ 第二回　日本思想の重層性　―　日本思想史における時代区分 第三回　神祇信仰（神道）とは？（１）　ヒトとカミと／神とは何か 第四回　神祇信仰（神道）とは？（２）　祀りと共同体 第五回　神祇信仰（神道）とは？（３）『古事記』『日本書紀』 第六回　仏教とはいかなる思想か？（１）「仏」ゴーダマ=ブッダ 第七回　仏教とはいかなる思想か？（２）「法」真理と方便 第八回　仏教とはいかなる思想か？（３）「僧」人間と儀礼 第九回　仏教とはいかなる思想か？（４）　四法印　仏教のスローガン 第十回　仏教とはいかなる思想か？（５）　まとめ 第十一回　儒教とはいかなる思想か？（１）　聖人と孔子・孟子 第十二回　儒教とはいかなる思想か？（２）　性善としての人間 第十三回　儒教とはいかなる思想か？（３）　体系的学問としての朱子学 第十四回　儒教とはいかなる思想か？（４）　まとめ 第十五回　その他の道具立て　武士・国学・近代など				
【履修条件】	講義は日本語で行います。日本思想の知識などをあらかじめ知っておく必要はありません。ただし、参加者の感想や疑問が講義の方向を決めていくので、積極的な参加を求めます。そのためにも講義の予習復習に時間をかけて積極的に取り組む意欲のある方を歓迎します（毎週３時間程度）。なお、各回の講座が連動して進みますので、休むと話がわからなくなる可能性があります。やむをえない場合を除いて出席するようにしてください。				
【評価方法】	期末レポート　６０％＋参加態度（各回の所感・疑問アンケート）　４０％。欠席回数が１／３以上の場合、期末レポートを受理しません。レポートの評価基準についてはプリントを配布して詳説します。				
【テキスト】	講義内でプリントで配付します。				
【参考書】	講義内でご紹介いたします。				
【備考】					
【社会人聴講生】	応相談。事前に面接を課すので、開講前に木澤（kizawa@u-shizuoka-ken.ac.jp)までメールしてください。学生の履修者が多い場合は無条件にお断りする場合もあります。	【科目等履修生】	履修可。	【交換留学生】	履修可。

【科目名】	東南アジア文化論B		Culture and Society of Southeast Asia B		
【科目種別】	専門プログラム（国際開発） 専門プログラム（アジア研究）		【配当年次】	2～	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜2限	【オフィス・アワー】	月曜４限 Mondays 4th Period
【科目責任者】	米野みちよ Michiyo Yoneno-Reyes				
【担当教員】	米野みちよ Michiyo Yoneno-Reyes				
【授業目標】					
●授業目的	1. 東南アジアの社会と文化の多様性を、その背景とともに理解する。 2. 学際的な視点から、東南アジアの文化に関する知識を得る。 3. 論理的思考力と批判的考察力を養う。 4. 論理的に構築され、かつ伝わりやすいライティングや口頭発表のスキルを身につける。 1. to understand the social and cultural diversity of Southeast Asia along with its background 2. to gain knowledge of Southeast Asian cultures from an interdisciplinary perspective 3. to develop the ability to think logically and critically 4. to develop skills in writing and oral presentation that are logically constructed and communicative				
●到達目標	1. 東南アジアの文化に関して、歴史学、社会学、人類学、宗教学、言語学、芸術学、音楽学等の知見に基づいた基本的な知識を身につける。 2. 東南アジアの文化に関する学問的な書籍を読み、それを、論理的に論じる文章が書けるようになる。 3. 上記２に関して、伝わりやすい口頭発表を行うことができる。 1. to acquire basic knowledge of Southeast Asian cultures based on knowledge of history, sociology, anthropology, religion, linguistics, art, musicology, etc. 2. to be able to read scholarly books on Southeast Asian cultures and to be able to write an academic paper that discusses them logically. 3. to be able to give a logically-constructed oral presentation on 2. above.				
【授業概要】	「東南アジア」は比較的新しい、地政学的なカテゴリーである。東南アジア、という地域について、東南アジア成立から今日までの社会と文化に関する概観を、講義、文献、映画等から学ぶ。また、学んだことを、ブックレポート、およびその口頭発表、という形で、自分の言葉で表現して、知識の定着を図り、且つ、論理的思考力と批判的考察力(critical thinking)を養う。 "Southeast Asia" is a relatively new geopolitical category. Students will learn about Southeast Asia from lectures, literature, and films. Students will also express what they have learned in their own words through a term paper and oral presentations to consolidate their knowledge and cultivate their ability to think logically and critically.				
【授業方法】	講義、学生による口頭発表、ディスカッション、映画鑑賞、ライティングワークショップ Lectures, oral presentations by students, discussions, film viewing, writing workshops				
【授業展開】	1. オリエンテーション 2. ①「東南アジアのポピュラー・カルチャーーアイデンティティ・国家・グローバル化」（福岡まどか） 3. ①「東南アジアのポピュラー・カルチャーーアイデンティティ・国家・グローバル化」（福岡まどか） 4. ② 「スンダ音楽の『モダンのはじまりーラジオと伝統音楽』（福岡正太） 5. ② 「スンダ音楽の『モダンのはじまりーラジオと伝統音楽』（福岡正太） 6. 映画鑑賞① 7. 映画鑑賞② リアクションペーパー ふりかえりとディスカッション 8. ③ 「インドネシア映画に描かれた宗教と結婚をめぐる葛藤 」（小池誠） 9. ③ 「インドネシア映画に描かれた宗教と結婚をめぐる葛藤 」（小池誠） 10. ミニ研究研究計画書ワークショップ 11. ④「国民映画から遠く離れてー越僑監督ヴィクター・ヴーのフォルムにおける、ベトナム映画の脱却と継承」（坂川直也） 12. ⑤ 「シンガポールにおける政府対映画政策制作者間の『現実主義的相互依存・対立関係』」（盛田茂） 13. ライティングワークショップ 14. 自由研究口頭発表 15. 自由研究口頭発表				
【履修条件】	東南アジアに興味・関心があること。 オンラインの授業の時は、原則として、顔を出してください。 Must have an interest in Southeast Asia. As a general rule, show up for online classes.				
【評価方法】	出席・授業態度（特に積極的な発言とディスカッションへの参加を歓迎します）、小テスト/小課題、口頭発表、学期末小論文 Attendance and class attitude (active participation in speaking and discussion is especially welcome), quizzes/assignments, oral presentations, end-of-term essay 授業日数の3分の２を超えて欠席すると、評価の対象となりません。（成績をつけることができません。） Any absences in excess of two-thirds of the class days will not be graded. (Grades cannot be assigned.)				
【テキスト】	福岡まどか・福岡正太『東南アジアのポピュラーカルチャーーーアイデンティティ・国家・グローバル化』				
【参考書】	授業中に適宜紹介する To be introduced in class as needed.				

【備考】	授業時間内に、調べ物をしたり、図表やグラフの作成をすることがあるので、授業には、パソコンなどを持参することが望ましい。 It is advisable to bring a computer or similar device to each class, as students may be required to do research and prepare charts and graphs during class time.				
【社会人聴講生】	応相談	【科目等履修生】	応相談	【交換留学生】	Exchange students are welcome. I can offer bilingual classes when necessary for English reading materials.

【科目名】	東南アジア現代史B		Modern History of Southeast Asia B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	1	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜5限	【オフィス・アワー】	月曜日5限 Monday V
【科目責任者】	米野みちよ Michiyo Yoneno-Reyes				
【担当教員】	米野みちよ Michiyo Yoneno-Reyes				
【授業目標】					
●授業目的	- 東南アジアの現代史（主に19世紀後半から20世紀）を通じて、東南アジアの社会を理解する。特に、植民地支配の歴史と独立への悲願とそのための抗争、独立後の国家建設の混乱、および、日本と東南アジアの関係の理解を深める。 - 資料を読み込んだり、作成したりする力を養う。 - 批判的な考察力を養う。 - 学術的な口頭発表のスキルを身につける。 - 学術的な小論文の書き方を身につける。 - To understand Southeast Asian societies through the contemporary history of Southeast Asia (mainly from the late 19th to 20th centuries). In particular, students will deepen their understanding of the history of colonial rule, the struggle for independence, the turmoil of nation-building after independence, and the relationship between Japan and Southeast Asia. - To develop the ability to understand and create graphs, tables, maps, and illustrations. - To develop the ability to think critically. - To develop skills in academic oral presentation. - To acquire skills in writing academic essays.				
●到達目標	1. 東南アジアにおける植民地支配―独立闘争―独立、の歴史を理解する。 2. 東南アジア各国における近代国家の建設、国民統合、国民文化の形成、の歴史を理解する。 3. 20世紀における日本の南進を理解する。 4. 20世紀以降の東南アジアにおける経済の変遷、ASEAN統合の歴史を理解する。 5. 学んだことや、自分で調べたことを、５分程度にまとめて、口頭発表ができる。 1. to understand the history of colonial rule, struggle for independence, and independence in Southeast Asia 2. to understand the history of modern state building, national integration, and the formation of national culture in Southeast Asian countries. 3. to understand Japan's southward expansion in the 20th century. 3. to understand the southward expansion of Japan in the 20th century. 4. to understand the economic transformation of Southeast Asia since the 20th century. 4. to understand the history of economic transition and ASEAN integration in Southeast Asia since the 20th century 5. to be able to give a 5-minute oral presentation on what they have learned and what they have researched by themselves.				
【授業概要】	教科書に沿って、講義および学生による口頭発表、ディスカッション、映画を通して、東南アジアの過去約150年の歴史を学ぶ。概ね時系列に沿って、欧米列強による植民地支配―独立闘争―独立、また、近代国家建設―国民統合、国民文化の諸相を学ぶ。資料を読み込んだり、作成したりする練習も行う。短時間の口頭発表の練習も行う。				
【授業方法】	講義、学生による口頭発表、ディスカッション Lectures, oral presentations and discussions				
【授業展開】	1. オリエンテーション Orientation 2-4週　二十世紀半ばの危機 Mid-twentieth-century crisis, 1930-1954 5-6週　軍と王とマルクスと The military, monarchym and Marx: The authoritarian turn, 1950-1998 7週　映画鑑賞 Film screening 8-9週　商業への回帰 The commercial turnaround, 1965- 10-11週　ネーションをつくる、マイノリティをつくる Making nations, making minorities, 1945- 12週　ライティングワークショップ１ Writing workshop 1 13週　ライティングワークショップ２ Writing workshop 2 14週　口頭発表１ Oral presentations 1 15週　口頭発表２ Oral presentations 2				
【履修条件】	東南アジアに興味・関心があること。 Must have an interest in Southeast Asia.				
【評価方法】	出席・授業態度（特にディスカッション）、課題レポート、口頭発表、学期末小論文 Attendance and class attitude (including discussion), homeworks, oral presentations, term paper 授業日数の3分の２を超えて欠席すると、評価の対象となりません。（成績をつけることができません。） Any absences in excess of two-thirds of the class days will not be graded. (Grades cannot be assigned.)				
【テキスト】	アンソニー・リード『世界史のなかの東南アジア　下』 Anthony Reid, A History of Southeast Asia: Critical Crossroads				
【参考書】	川中豪・川村晃一　『教養の東南アジア現代史』（ミネルヴァ書房　2020） ＊丹野勲 『日本企業の東南アジア進出のルーツと戦略―戦前期何曜での国際経営と日本人移民の歴史』（同文館出版　2017）				

【備考】	授業時間内に、調べ物をしたり、図表やグラフの作成をすることがあるので、授業には、毎回、パソコンなどを持参することが望ましい。 It is advisable to bring a computer or similar device to each class, as students may be required to do research and prepare charts and graphs during class time.				
【社会人聴講生】	応相談	【科目等履修生】	応相談	【交換留学生】	歓迎します。Exchange students are welcomed. I can offer bilingual classes with English reading materials.

【科目名】	教育言語学概論Ｂ		Linguistics and Education B		
【科目種別】	専門プログラム（グローバル・コミュニケーション）		【配当年次】	２～４	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜2限	【オフィス・アワー】	水曜日５限
【科目責任者】	長野明子				
【担当教員】	長野明子				
【授業目標】					
●授業目的	ことばの指導者には、対象言語の構造と歴史についてある程度の専門知識を有し、実際の言語データを分析する能力を有することが求められる。本科目は教育現場での活用を目指した言語学・英語学の講義を行う。				
●到達目標	（１）英語の歴史的変遷の概略を内面史と外面史に分けて説明することができる。 （２）英単語の発音・語構造・綴りについて初歩的な分析ができるとともに、説明することができる。				
【授業概要】	今年度は英語史と英語語彙論（English lexicology）について講義する。知識定着のための演習を含む。演習では辞書や電子コーパスを活用する。				
【授業方法】	教科書と配布資料を用いて日本語で講義する。学生は基本知識について予習をして授業に臨み、授業では辞書を使いながらデータ分析を行う。学修内容に応じてオンデマンド型講義にしたり、遠隔会議システム（zoom）を一部利用したりする可能性がある。				
【授業展開】	1 英語史の研究、インド・ヨーロッパ語としての英語 2 辞書と電子コーパス 3 英語の外面史と借用語 4 語彙の歴史, 語源，WALS 5 文字・綴り字と発音 6 英単語の構造，派生と複合と屈折，suppletion 7 現代英語の綴りのルール（１） 8 現代英語の綴りのルール（２） 9 名詞や人称代名詞の発達、指示代名詞と関係代名詞 10 語形変化の衰退がもたらしたもの 11 主節と従属節 12 動詞の発達、非人称動詞と過去現在動詞 13 beとhaveおよび分詞 14 否定構文と助動詞doの発達 15 まとめと今後の課題				
【履修条件】	毎回英和辞書を持参すること。 語の品詞、活用、意味、発音（発音記号で）に加えて語源と例文が書かれているものが好ましい。				
【評価方法】	学期末レポート50%、課題20%、授業内演習30%（欠席４回で試験の受験資格を失う）				
【テキスト】	『ベーシック英語史』家入葉子著，ひつじ書房，東京 (2007年) https://www.hituzi.co.jp/books/349.html				
【参考書】	『英語の発音と綴り』大名力著（中公新書，東京，2023年） 『英語の「なぜ？」に答える　はじめての英語史』堀田隆一著（研究社，東京，2016年）				
【備考】	担当教員は、東京言語研究所における言語の調査・研究に携わっている。また、翻訳者としての実績をもつ。こうした実務経験も踏まえて講義を行う。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	多文化共生論B		Multicultural Society B		
【科目種別】	専門プログラム（共生社会） 専門プログラム（比較文化）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	木曜1限
【科目責任者】	*高畑　幸				
【担当教員】	*高畑　幸				
【授業目標】					
●授業目的	日本社会の多文化化とそれに伴う課題を明らかにし、その解決に向けて各自ができることを考える。				
●到達目標	日本で暮らす外国人はどのような課題を抱えているのか、それに対する支援はどのように行われているかを理解する。				
【授業概要】	日本では1990年代から外国人人口が急増し、2010年代後半からさらに増加を続けている。私たちは移民とともに暮らし、働く時代を生きている。彼（女）らのおかれた状況を理解し、彼らとともに地域社会をつくる「多文化共生の人材」となるための基礎教育を行う。				
【授業方法】	講義を主体とする。県内の外国人集住地で行われる催し等のフィールドワークへ参加し（最低1回)、学期の後半の授業でその報告をプレゼンテーション形式で行う。なお、フィールドワーク先は自分で探しても良いし、担当教員が紹介する催し等へ行ってもよい。				
【授業展開】	1. 導入　多文化社会の諸相 2. 労働（1）製造業で働く定住外国人と技能実習生 3. 労働（2）高齢化社会を支える介護労働者 4. ことばと教育（1）多言語情報サービスの現状と課題 5. ことばと教育（2）学校と地域における教育の取り組み 6. ことばと教育（3）第二世代の若者たち～進学とキャリア支援を中心に 7. 地域（1）外国人集住地区の課題 8. 地域（2）地域社会における多文化共生への社会的条件 9. 地域（3）大規模災害と外国人 10. 外国人支援（1）フィールドワーク 11. 外国人支援（2）フィールドワーク 12. 受講生によるフィールドワーク報告 13. 受講生によるフィールドワーク報告 14. 「多文化共生を仕事にする」 ゲスト講義 15. まとめ				
【履修条件】	フィールドワークへの参加を前提として受講してください。（複数のフィールドワーク先を紹介します。自分で選んで参加して下さい。）				
【評価方法】	授業への参加状況（発言、議論、感想文等）50%、レポート50%				
【テキスト】	特になし。各講義で資料を配布する。				
【参考書】	伊藤泰郎ほか（2021）『日本で働く―外国人労働者の視点から』松籟社。 永吉希久子（2020）『移民と日本社会―データで読み解く実態と将来像』中公新書。 石川義孝編（2019）『地図でみる日本の外国人・改訂版』ナカニシヤ出版。 移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会（2018）『移民政策のフロンティア――日本の歩みと課題を問い直す』明石書店。				
【備考】	・受講者数の制限を行う可能性があります。 ・1990年代前半から行政の外国人相談や法廷での通訳者として実務経験を持つ教員が、在日外国人の生活上の課題を多面的に知ることで得た知識やネットワークを生かして授業を行い、フィールドワーク先を紹介し、受講生が多文化共生を机上論ではなく「生きた課題」として考えられるようにします。				
【社会人聴講生】	受講可能	【科目等履修生】	受講可能	【交換留学生】	受講不可

【科目名】	教育原理Ｂ		The Essentials of Education B		
【科目種別】	教職課程の必修科目		【配当年次】	1年次から。	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	水曜日/３時間目
【科目責任者】	橋本勝				
【担当教員】	橋本勝				
【授業目標】					
●授業目的	「教育原理A」と同じように「教育原理B」においても、教育とは何か、学校とは何か、学校教育とは何か、という基本的かつ原理的な問いを考察していく。 具体的には、「公教育制度の成立・展開・課題」を検討することにより、学校や教育をめぐるさまざまな課題や問題を理解でき、それらを解決する視点を身につける。そうすることによって、教育とは何か、学校とは何か、学校教育とは何か、という基本的かつ原理的な問いを、今日の社会との関連で考察する。				
●到達目標	本授業では、「公教育制度の成立・展開・課題」という歴史的問いをテーマとし、公教育制度についての基本的な考え方を把握でき、ヨーロッパと日本における制度の歴史的成立・展開・課題などを理解でき、公教育制度の主要な担い手である教師に必要とされる学校制度についての基礎的知識を身につけることができる、ということを目的とする。				
【授業概要】	公教育制度の成立の過程をヨーロッパ諸国の事例をもとに概観したうえで、それらをモデルとした日本の近代的公教育制度の移植・修正・定着の過程を中心として、現代までの変遷と課題についての基礎的理解を深める。また、戦後の主要な課題として、平等と競争、学歴主義、教育改革などを取り上げて、現代社会における教育課題についての理解を促す。				
【授業方法】	原則として対面形式で授業を実施する。 講義により進めることを基本とするが、意見交換の機会を多く設ける。 法定伝染病や感染拡大等の事情により、対面授業が困難な場合は、リモート授業を行う。 授業実施については、合理的な配慮に努める。 欠席が５回以上となった場合、評価対象としない。				
【授業展開】	授業計画 第１回：公教育制度の類型と特質 第２回：義務教育の成立（1）－プロシア－ 第３回：義務教育の成立（2）－フランス－ 第４回：義務教育の成立（3）－イギリス－ 第５回：「学制」以前の諸学校－藩校・寺子屋・私塾－ 第６回：「学制」と近代的公教育制度の出発 第７回：「学制」の失敗と日本的モデルの模索 第８回：森有礼と日本的公教育制度の定着 第９回：戦後の教育改革－教育の民主化－ 第１０回： 経済成長と教育拡大 第１１回：教育における平等と競争のジレンマ 第１２回：「学歴主義」の諸問題 第１３回：「ゆとり教育」と「学力」 第１４回：新自由主義と教育改革 第１５回：新たな公教育の模索 定期試験				
【履修条件】	特に設定しない。				
【評価方法】	学期末試験（70％）と、ミニ･レポートなどの課題（30％）により成績評価する。 ミニレポートの提出をもって出席にかえることはしない。				
【テキスト】	必要に応じて資料を配布するに				
【参考書】	堀尾輝久他『教育の原理Ⅰ』、稲垣忠彦他『教育の原理Ⅱ』、今津孝次郎他『新しい教育の原理』 佐々木正治他『新中等教育原理』				
【備考】	特記事項なし。				
【社会人聴講生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。	【科目等履修生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。	【交換留学生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。

【科目名】	教職実践演習（高）		Practical Seminar for Teaching Profession(High School)		
【科目種別】	教職課程の必修科目		【配当年次】	4年次以上（卒業延期者も含む）	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜4限	【オフィス・アワー】	水曜3限・木曜2限
【科目責任者】	橋本　勝、園田　明人				
【担当教員】	橋本　勝、園田　明人				
【授業目標】					
●授業目的	これまでに身につけた資質能力が、教員として最小限必要なものとして形成されているかを最終的に確認する。将来、教員になる上での課題を自覚し、不足している知識や技能等を補い、その定着を図る。				
●到達目標	1. 教育実習体験や講義をもとに教育現場の現状を適切に把握し、問題点を抽出する力、それらを理解し解決する力を養い、教育･支援の最前線に立つ担当者としての実践的能力と意欲の確立を図る。 2. 信頼される人間関係、相互協力の関係を構築するためのコミュニケーション能力と専門的知識･技能を養う。 3. 教員として求められる基礎的な能力や知識の確認とそれらを総合的に活用する方法を実践させ確認する。				
【授業概要】	教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情、社会性や対人関係能力、生徒理解や学級経営、教育内容等の指導力などに関する事項について、グループ討論、事例研究、模擬授業やロールプレーイングなどの方法を取り入れながら研究し授業を行う。				
【授業方法】	教職に関する科目担当教員、教科に関する科目担当教員、及び、教職経験者が連携･協力して行う。 感染状況によっては、オンライン（同時双方向）で行う。授業内の活動、教育効果、その他の事情を考慮して形式を決める。				
【授業展開】	第1回　演習の目的と進め方の概要説明。これまでの教職履修の反省と課題についてのグループ討論（「教職履修の反省と課題」についてのレポートの作成）（橋本） 第2回 「教職履修の反省と課題」レポートに基づき、教職の意義や教員の社会的役割・責務についての講義とグループ討論 （橋本） 第3回 「教職履修の反省と課題」レポートに基づき、学校組織のメンバーとしての役割、保護者や地域社会との関係構築等についての講義とグループ討議 （橋本） 第4回　教職経験者による学校現場の諸課題についての講演とグループ討論 第5回　学校現場を取り巻く諸問題についての事例研究とグループ討論 （橋本） 第6回　学校現場における諸問題解決に向けての取り組みについての事例研究とグループ討論 （橋本） 第7回　教材研究とグループ討論 （須田・細川） 第8回　学生による模擬授業1 （須田・細川） 第9回　学生による模擬授業2 （須田・細川） 第10回　生徒理解についての現職教員による講演とグループ討論 第11回　教員としての社会性や対人関係能力(1):日常的に発生する学級内の問題（ｼﾅﾘｵ･ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ） （園田） 第12回　教員としての社会性や対人関係能力(2):学級内の問題に対する教師の行動（ｼﾅﾘｵ･ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ） （園田） 第13回　児童･生徒理解(1):教育相談場面における教師の話し方や態度（ﾛｰﾙﾌﾟﾚｰｲﾝｸﾞと討論） （園田） 第14回　児童･生徒理解(2):児童･生徒が所属感や自信を持つためには（ﾛｰﾙﾌﾟﾚｰｲﾝｸﾞと討論） （園田） 第15回　全体を通じての討論（目指す教師像と意思決定） （橋本・園田）				
【履修条件】	「教育実習Ⅰ・Ⅱ」を履修が済んでおり、かつ、履修カルテを提出していること。				
【評価方法】	レポート、発表内容、出席状況に、受講生による自己評価・相互評価等を加味して総合的に評価する。 欠席が、５回以上となった場合、成績評価対象から外れる。				
【テキスト】	担当教員が授業時に適宜資料等を配布する。				
【参考書】	教育実習ノート、文部科学白書				
【備考】	連続性をもって行う授業であり、グループ活動も伴うため、欠席すると活動に参加できないことがあります。 すべての回に出席すること。				
【社会人聴講生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。	【科目等履修生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。	【交換留学生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。

【科目名】	開発経済学Ｂ		Development Economics B		
【科目種別】	専門プログラム（国際開発）		【配当年次】	2〜4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜3限	【オフィス・アワー】	金曜4限
【科目責任者】	飯野　光浩				
【担当教員】	飯野　光浩				
【授業目標】					
●授業目的	本講義では、途上国経済の開発を経済的側面から分析する際の出発点として、開発経済学の基礎を習得することを目的とする。				
●到達目標	現在の途上国が直面する諸問題を開発経済学の基礎的枠組みを用いて、自分の力で考察できるようになることである。				
【授業概要】	開発経済学とは何だろうか？もし発展途上国も先進国も同じメカニズムで経済が成長するなら、経済成長論のみを学習すれば十分である。それにもかかわらず、開発経済学という学問は、一つの分野として、確立されている。 　それでは、経済成長論との違いは何だろうか？つまり経済成長論とは別に開発経済学がある理由とは何なのであろうか？それは、途上国は先進国と異なる経済構造、制度などの経済環境に直面しているからである。先進国にはない途上国特有の要因が経済発展や開発に及ぼす影響を学習する。				
【授業方法】	基本的にはPowerPointを使用した講義である。 しかし、一方通行にならないように、理解しているかの確認のために、区切りの良い節目で受講生と議論する回を設ける。				
【授業展開】	詳細は講義初回のガイダンスに配布する予定表を参照のこと。以下は概要である。 第１回：ガイダンス「経済成長と工業化―グローバル化した世界」 第２回：　　〃 第３回：経済成長と工業化に関する学生との議論 第４回：「技術移転―学びの道も一歩から」 第５回：　　〃 第６回：技術移転に関する学生との議論 第７回：「開発金融―おらが村とグローバル金融システムのつながり」 第８回：　　〃 第９回：　　〃 第１０回：開発金融に関する学生との議論 第１１回：「開発援助―がんばれニッポン」 第１２回：　　〃 第１３回：　　〃 第１４回：開発援助に関する学生との議論 第１５回：開発経済学のまとめー途上国の希望				
【履修条件】	途上国の経済に関心があること。 開発経済学は応用科目であるので、ミクロ経済学とマクロ経済学の基礎を学習したことがあることが望ましい。つまり、単位取得は条件ではない。				
【評価方法】	期末試験、講義中の発言、受講生との議論での発言を総合的に評価する。 評価割合は期末試験80%、講義中の発言10%、受講生との議論での発言10%である。				
【テキスト】	初回のガイダンスのときに指示する。 毎回、事前にPowerPointの資料をユニパの授業資料管理に掲示する予定である。				
【参考書】	「トダロとスミスの開発経済学」トダロ・スミス著　ピアソン 「開発経済学入門第3版」渡辺利夫著　東洋経済新報社 「開発経済学［増補改訂版］」黒崎・山形著　日本評論社 「ストーリーで学ぶ開発経済学」黒崎・栗田著　有斐閣				
【備考】					
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可 受入条件：面談 （事前に担当教員と連絡を取ること） 面談を行う理由：本科目は経済学の応用科目であるため、基礎科目であるミクロ経済学・マクロ経済学を学習しているかを確認するためである。 連絡先：iino@u-shizuoka-ken.ac.jp	【科目等履修生】	科目等履修生履修可 受入条件：面談（事前に担当教員と連絡を取ること） 面談を行う理由：本科目は経済学の応用科目であるため、基礎科目であるミクロ経済学・マクロ経済学を学習しているかを確認するためである。 連絡先：iino@u-shizuoka-ken.ac.jp	【交換留学生】	不可

【科目名】	政治学		Politics (Basic Theory)		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	1・2年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜5限	【オフィス・アワー】	水曜3限
【科目責任者】	前山亮吉				
【担当教員】	前山亮吉				
【授業目標】					
●授業目的	いわゆる「1年生の政治学」として、政治学の基礎を教える。				
●到達目標	1.国際関係を分析する必要不可欠なTOOL政治学の基礎理論を学ぶ。 2.簡単な政治学の論文を自力で理解できるような知識が、一つの目標である				
【授業概要】	「政治学」は難しいなあといわれる事が多いですね。「何で政治のことを小難しく考えるのか」という批評もよく耳にします。確かに政治は常識のレベルでも理解可能かもしれません。しかし政治の世界には、権力関係・イデオロギーのように目に見えない大きな力が働き、巨大な政治体制・国家が我々の生活をいつの間にやら左右している事が多いです（例：増税・年金・福祉・雇用)。いつのまにか我々の生活を左右する力のカラクリを知りたくないですか。 目に見えない大きな力、例えば権力はやはり日常の常識では把握できないので、政治学という「科学」が生み出した基礎的な理論を学ぶ事が必要になります。理論といっても難しくはないですよ。一歩ずつ根気強く理解していけば、必ずわかるようになります。ただ根気のない人にはつらいかもしれません。下の履修条件をよく読んでください。 国際関係という巨大なそして無限なフロンティアに踏み出す前に、道に迷わないように、「政治学」という灯りをしっかりと持っていって欲しいと思うこと大です。				
【授業方法】	講義形式。				
【授業展開】	1～2.オリエンテーション 政治学・政治とは何か 3～9.　政治権力と政治意識 権力の二面性 権力と服従・支持 リーダーシツプの諸問題 政治システムとの関係 9～15. 政治的イデオロギー 民主主義 自由主義 自由＋民主主義 社会＋民主主義 詳細は最初の講義でガイダンスする。履修希望者は必ず第１回の講義に出席すること。 講義は、現実の政治変動に応じ柔軟な組み替えもあります				
【履修条件】	理解するための努力を惜しまない学生・新聞の国際面を毎日読む学生。				
【評価方法】	期末筆記試験・講義内小テスト・出席点を総合的に評価する。				
【テキスト】	※3回目から使用します。 加茂・大西・石田・伊藤『現代政治学（第4版)』2012年、有斐閣アルマ）				
【参考書】	高畠通敏『政治学への道案内』(2012年、講談社学術文庫） 東京大学法学部「現代と政治」委員会編『東大政治学』(2024年、東京大学出版会）				
【備考】					
【社会人聴講生】	聴講可	【科目等履修生】	履修可	【交換留学生】	履修可

【科目名】	経済学入門B		Introduction to Economics B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜5限	【オフィス・アワー】	月曜4限（事前にメールでご連絡ください）
【科目責任者】	＊小塚英治				
【担当教員】	＊小塚英治				
【授業目標】					
●授業目的	経済学の初学者を対象に、マクロ経済学の基礎を講義します。マクロ経済学は、GDP、物価上昇率、失業率など経済全体の現象を研究する学問です。この授業では、マクロ経済学の基礎的な理論を理解し、日本や世界の様々な課題や政策をマクロ経済学の視点から理解することを目的とします。				
●到達目標	受講生がマクロ経済学の基礎的な理論を理解し、GDPとはなにか、物価の上昇は社会や人々にどのような影響があるのか、景気を刺激するためにどのような政策が必要かなどマクロ経済学の基本的な用語・考え方・政策を説明できるようになることを目標にします。				
【授業概要】	15回の授業の前半では、国民総生産（GDP)、経済成長などマクロ経済学の基本的な概念・理論を説明します。後半では、雇用と失業、金融、マクロ経済政策など現実の経済と関係の深いテーマについて説明をします。				
【授業方法】	講義方式で授業を行います。				
【授業展開】	予定している講義内容は以下のとおりですが、受講生の理解に合わせて変更する場合があります。 1.　イントロダクション：講義概要と講義の進め方 2.　マクロ経済学のキーワード 3. 国民の富（１） 4. 国民の富（２） 5. 経済成長（１） 6. 経済成長（２） 7. 雇用と失業（１） 8. 雇用と失業（２） 9. 金融（１） 10. 金融（２） 11. 景気変動とマクロ経済政策（１） 12. 景気変動とマクロ経済政策（２） 13. 景気変動とマクロ経済政策（３） 14. まとめ 15.　期末テスト				
【履修条件】	1. 現実の経済に強い関心を持っていること 2. 自習をしっかり行うこと				
【評価方法】	期末テスト 80％、授業の議論への参加20%				
【テキスト】	以下の参考書の中から受講生の知識・関心を踏まえて選定する予定。				
【参考書】	ダロン・アセモグル／デヴィッド・レイブソン／ジョン・リスト（2020)『入門経済学』岩本康志監訳／岩本千晴訳，東洋経済新報社 島田剛（近刊)『学際系学部の学生のためのマクロ経済学入門（仮タイトル)』日本評論社 戸堂 康之（2023)『経済学って何だろう: 現実の社会問題から学ぶ経済学入門』新世社				
【備考】	開発援助機関で実務経験のある教員が、開発プロジェクトに関わった経験を踏まえて授業を行います。				
【社会人聴講生】	可（面談あり）	【科目等履修生】	可（面談あり）	【交換留学生】	聴講可（面談あり）

【科目名】	比較政治論Ｂ		Comparative Politics B		
【科目種別】	専門プログラム科目（国際公共政策） 専門プログラム科目（日本研究）		【配当年次】	2~4年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜5限	【オフィス・アワー】	水曜3限
【科目責任者】	前山亮吉				
【担当教員】	前山亮吉				
【授業目標】					
●授業目的	比較という誰でもできる手法をもとに、日本・西欧の政治を深く理解する。				
●到達目標	本講義は①西欧の政治制度②過去の日本政治という2つの比較の尺度を用い、現在の日本政治の分析を行ない、現状を打開する方策を探ることが目標である。				
【授業概要】	日本政治を基軸とした比較政治の分野は、およそ次の3つに分けられます。 ①現在の日本政治と現在の西欧（特にヨーロッパ）政治との比較 ②現在の日本政治と近代・戦後日本政治との比較 ③近代・戦後日本政治と近代・戦後西欧政治との比較 ①の分野を取り扱う比較政治論Aの講義の残りと②③の分野を比較政治論Bでは取り扱います。 特に②③では、現在の政治に対する「歴史の教訓（Lesson of Past)」を導き出す視点を重視したい。				
【授業方法】	講義形式。				
【授業展開】	詳細は最初の講義でガイダンスする。柔軟な組み替え・テーマ変更があり得ることもAと同様。 一応の予定は次の通り。 1．オリエンテーション(比較政治論Aの復習＋8・9月の政治) 2～8．Aの続き（政官関係論） ・政治家と官僚 ・行政学入門 ・議院内閣制再考 ・官僚制の病理と改革の方向性 ９～１５．「昭和」の政党政治（現在との比較） ・脆い二大政党 ・ファシズムの伸張と限界 ・第二次世界大戦敗戦と戦後政治				
【履修条件】	比較政治論Aを受講した学生が望ましい（Aの続きなので）				
【評価方法】	期末筆記試験・講義内小テスト・出席点を総合的に評価する。				
【テキスト】	比較政治論Aで使った２冊を引き続き使う。最初の講義から持参する事。				
【参考書】	前山亮吉『近代日本の行政改革と裁判所』(1996年、信山社) 前山亮吉『近代日本政党研究』(2025年、現代図書) をはじめ、講義内で多数紹介する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	聴講可	【科目等履修生】	履修可	【交換留学生】	履修可

【科目名】	行政法Ｂ		Administrative Law B		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策）		【配当年次】	2・3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	－
【科目責任者】	*小泉祐一郎				
【担当教員】	*小泉祐一郎				
【授業目標】					
●授業目的	道路交通法、建築基準法、食品衛生法など、様々な行政法規や地方自治制度、公務員制度が社会経済活動において果たしている役割を理論と実務の両面から認識し、多様な行政法規が講学上の理論をベースとした法制度によって統一的な制御が図られている仕組みと実務上の実態、地方自治制度、公務員制度の法的な仕組みと実際の運用を理解することで、公務員はもとより広く社会人として様々な活動を行う際に役立つ能力を身に着けることを目的とする。				
●到達目標	行政救済制度、地方自治制度の基礎知識を習得すること。				
【授業概要】	この授業では、行政活動に対する国民の権利利益の救済制度や地方自治制度について、具体的な事例を交えながら学んでいく。				
【授業方法】	講義で資料を配布し、法的な制度や実態について解説する。 毎回、講義用のノート用紙を配布し、講義終了時に回収し、次回の講義で評価したものを返却する。				
【授業展開】	＊授業を進めるなかで変更する可能性がある。 1. 国民の権利利益の救済制度とは 2.行政上の不服申立て 3.処分性、原告適格、訴えの利益など 4.取消訴訟と無効確認訴訟 5. 国家賠償法と民法 6. 国家賠償の仕組み 7. 国家賠償 8.損失補償 9. 地方自治の基本原理と歴史 10.地方公共団体の機関 11.住民自治の仕組み 12.条例、規則 13.国、都道府県、市町村の関係 14.地方分権改革 15. 総括				
【履修条件】	前期に開講される行政法Aを履修済みであることが望ましいが、行政法Aを受講していなくとも理解可能な講義とする。				
【評価方法】	中間試験(２回)、期末試験(１回)、講義ノートを総合評価する。				
【テキスト】	授業の際に教材となる資料を配布する。				
【参考書】	授業の際に適宜紹介する。				
【備考】	本講義では、国、県、市町村において行政職員として行政法規の立案・執行、行政不服審査、行政訴訟、地方自治制度に携わった教員が、行政法学の理論と行政実務の両面から、実際の事例を解説しながら講義を行う。				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可	【科目等履修生】	科目等履修生履修可	【交換留学生】	

【科目名】	日本文学研究ⅡB		Studies in Modern Japanese Literature ⅡB		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜3限	【オフィス・アワー】	金曜１限
【科目責任者】	鈴木さやか				
【担当教員】	鈴木さやか				
【授業目標】					
●授業目的	日本文学を代表する古典である『源氏物語』の精読を通じ、本文に込められた作者の意図を１つでも多く理解する。また、当時の貴族社会における言語表現や習俗、自然観についての理解を深める。				
●到達目標	①『源氏物語』に見られる様々な言語表現（和歌、引歌、草子地、敬語、述語を中心とした叙述の流れ等）を学ぶことで、古典を一人で読むときに必要な基礎的知識を身につける。②数多く存在する同作品の現代語訳を比較検討し、先行研究を参照することで、文を正確に解釈するために必要な姿勢を身につける。③実際に和歌を詠み、他者の和歌を鑑賞することで、和歌に込められた古人の思いを体感する。				
【授業概要】	『源氏物語』は、日本のみならず広く世界にその名を知られ、誕生から1000年経った現在でも日々新たな読者を獲得し続けている、不思議な力を持った作品です。 　本授業では、『源氏物語』のうち「真木柱」巻（『源氏物語』五十四巻のうち三十一番目の巻）をテキストとして取り上げ、主に「作品中に描かれた自然」と「和歌の贈答」、典拠等に注目しながら、原文と現代語訳を併せ読んでいきます。 　日本文学の最高傑作とも称される本作品には、数多くの解説書や現代語訳、漫画版などが存在します。しかし、『源氏物語』とはどういう物語なのか、何を描いた作品なのかということを考えるためには、やはり原典にあたり、動詞や助詞の一語一語に込められた作者の意図を丹念に読み解いていく他はありません。普段耳慣れない古語と向き合う作業は大変ですが、ともに授業に参加している仲間との討論を通じて、皆さんが『源氏物語』について一つでも多くの気づきを得てくれることを願っています。				
【授業方法】	基本的に講義形式でですが、読解の折に指名して発言を求めます。また、グループ討論も適宜行います。				
【授業展開】	おおよその流れを書いておきますが、受講生の反応によって随時修正します。 1　ガイダンス　授業の進め方の説明･「真木柱」巻までのあらすじ紹介 2　玉鬘の結婚・源氏と内大臣の感想・世間と主上と・大将と宮と兵衛の督 3　玉鬘の思い、源氏の思い・源氏、玉鬘を訪う・髭黒邸の修理・髭黒の北の方 4　式部卿の宮の態度・髭黒、北の方と語る 5　髭黒、外出の用意・北の方、髭黒に火取りの灰をかける 6　翌朝、髭黒、玉鬘に消息・髭黒、玉鬘方に籠る・髭黒の子供たち 7　式部卿の宮、髭黒の北の方を迎える・姫君、和歌を柱に残す・女房たち別れを悲しむ 8　宮の大北の方の恨み言・髭黒、宮を訪う 9　髭黒の処置、紫の上の迷惑・玉鬘参内・男踏歌と玉鬘 10　髭黒、退出を催促・兵部卿の宮の消息・主上の渡御 11　玉鬘の退出・髭黒、玉鬘を自邸に入れる 12　二月、源氏の消息・玉鬘の返事 13　主上の消息・三月、源氏の消息・髭黒、代わって返事 14　髭黒の家族と玉鬘・十一月、玉鬘、男児を生む・近江の君、夕霧に言い寄る 15　歌褒めの会―和歌の力を体感する				
【履修条件】	日本古典文学に興味があること。				
【評価方法】	筆記試験及び授業への貢献度によって評価します。貢献度には、出席状況も含まれます。なお、授業を５回以上休むと試験を受ける資格を失いますので注意してください。				
【テキスト】	角川ソフィア文庫『源氏物語』第五巻　蛍～藤裏葉（玉上琢彌訳注）				
【参考書】	授業中に適宜紹介します。				
【備考】	詳しいことは第一回にお話しします。できるだけ「自分で気づきを得る授業」としたいので、授業中での発言やグループ討論に重きをおいた授業にしたいと思っています。正解を求めることは決してなく、自分の考えを順序立てて話せればどんな意見でも歓迎しますので、あまり身構えず、仲間と意見を交換することを楽しむくらいの気持ちで臨んでください。				
【社会人聴講生】	歓迎します（宿題があります）	【科目等履修生】	歓迎します（宿題があります）	【交換留学生】	

【科目名】	オーストラリア文化論Ｂ		Area Studies : Australia		
【科目種別】	専門プログラム（比較文化） 専門プログラム（アジア研究） 専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	２・３	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜1限	【オフィス・アワー】	月曜日５時間目
【科目責任者】	澤田敬人				
【担当教員】	澤田敬人				
【授業目標】					
●授業目的	オーストラリア論の語り部のスペシャリストを目指す。				
●到達目標	この地域の歴史、言語、社会文化を知るだけでなく、基礎的な知識を踏まえて語り、詳しく調べようとする姿勢を培う。				
【授業概要】	ヨーロッパ的・アングロセルティックなイメージと、先住民的なイメージとが交錯した形で、この地域について学ぶ基礎を習得する。ここに言う基礎とは、演習レベルと対比してのものである。諸学問の学術論文として発表されたレベルの内容を含むこともあるし、人間の物語であることもある。総体として理解することが求められよう。				
【授業方法】	まず、十分な理解のために避けて通れない定式的な事項を逐一確認する。これを通じて履修者には、一定の見識・見方が生じるので、それらを利用して、さらには、自分の感性を最大に活かして、オーストラリアのアーカイブズを使った視覚メディアを読み解く試みを行う。自主的発表があるので、それに備える。				
【授業展開】	第1回目ガイダンスに出席して、講義の進め方を知る。自主研究発表の準備は万全にしたいので、必ず出席しておきたい。 1.中華系移民 2. 白豪主義 3.連邦化の構想 4. 連邦化の実施 5.第1次世界大戦とアンザック 6. アンザック神話の継承 7.社会史と女性 8. フェミニズム 9.都市と郊外 10. オーストラリア的生活様式 11.第2次世界大戦 12.戦後の大量移民 13.同化主義、多文化主義 14. 日豪関係 15. アジア関係・国際移民 履修者は、自主研究成果を発表する。最終回に教場で最終試験を受ける。				
【履修条件】	特になし。				
【評価方法】	参加状況（25%）・発表形式の課題（40%）・最終教場試験（35%）				
【テキスト】	藤川隆男『オーストラリアの歴史―多文化社会の歴史の可能性を探る』有斐閣アルマ				
【参考書】	随時紹介。				
【備考】					
【社会人聴講生】	受け入れ可。	【科目等履修生】	受け入れ可。	【交換留学生】	受け入れ可。

【科目名】	教師論		Studies on the Teacher		
【科目種別】	教職課程の必修科目		【配当年次】	1年次以上	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜5限	【オフィス・アワー】	水曜日/3時間目
【科目責任者】	橋本勝				
【担当教員】	橋本勝				
【授業目標】					
●授業目的	本科目では、学校教育における教師の仕事を、教育内容政策や、教師や学校に関わる制度、教育の歴史との関連で理解し、教職課程全体の導入的な学習をする。				
●到達目標	本科目の到達点としては以下のように考えている。すなわち、今日の学校教育の現状と課題を把握でき、今日、そして今後求められる教員の役割や在り方、また教員の資質や能力について理解できる。これらに加え、一つの職業、あるいは進路としての教職への、自らの適性について判断できる。				
【授業概要】	本科目では、まず、教職の意義や、教師として求められる役割や資質について熟考し、また、学校における教師の職務内容や、研修・服務及び身分保障などの教育法規上の規定を十分に理解したいと考えている。 そして、これに加え、教師の歴史や教師のおかれた現状や、さらに教師の専門職的成長の実際などを扱うことにより、教職の責務を理解するとともに、教職への進路ガイダンスに資する機会としたいと考えている。				
【授業方法】	本科目は、原則ととして対面式の授業で実施する。 基本的には講義形式で行うが、参加学生諸氏の意見交流の機会を設けるなど、それぞれが独自の教育観を構築できるような環境整備を心がけたい。 法定伝染病や感染症拡大等の事情により、対面授業が困難な場合は、リモート授業を行う。 授業実施については、合理的な配慮に努める。 欠席回数が５回以上となった場合、成績評価対象とはしない。				
【授業展開】	授業計画 第１回：教師の定義を考察し、その職業的特徴を理解でき、教師を自らの進路として捉える。 第２回：公教育の担い手としての教師に対する社会からの期待など、教師の役割を理解する。 第３回：学校教育の教育課程における教科や領域とは何かを知り、その指導者として求められる教師の資質･能力について理解する。 第４回： 学習指導要領の改訂や社会の変化から、教師の資質･能力を考える。 第５回：教科外の教師の仕事を知り、それに対応できる資質・能力を理解する。 第６回：学級やホームルームの経営、担任の仕事という側面から教師の資質･能力を考える。 第７回：ティームティーチングや校務分掌など、組織の一員としての教師の仕事を理解する。 第８回：SCやSSW、医師等学校内外の専門職とのチームの一員としての教師を理解する。 第９回：戦前と戦後の教師の役割や教職観を比較し、今日の教師の役割を検討する。 第１０回：教師の類型と、近年の新しい職位や組織転換から、教師の資質･能力を考える。 第１１回：教師の身分保障と処分、教師の服務を教育関係法令等から理解する。 第１２回：教師の社会的地位の変遷、変化への対応と、学び続けることの必要性を理解する。 第１３回：教師の養成を、諸外国と比較し、教師の職能成長を自らの問題として考える。 第１４回：教師が成長する場としての学校を捉え、教師の学びあいについて考える。 第１５回：教師の働き方とメンタルヘルスについて、政策動向や対応事例をもとに検討する。 定期試験				
【履修条件】	特に設定しない。				
【評価方法】	期末テストを主（70%）に、ミニレポートなどの課題（30%）を加味して評価する。 ミニレポートの提出をもって出席にかえることはしない。 欠席回数が５回以上となった場合、成績評価対象とはしない。				
【テキスト】	必要に応じて資料を配布するに				
【参考書】	高等学校学習指導要領案「特別活動編」（平成20年12月）、中学校学習指導要領解説「特別活動編」（平成20年7月）、央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（2015年12月21日） 林竹二『教師たちとの出会い』、谷田貝公昭他『教師論』、日本教師教育学会編『教師とは』その他必要に応じて紹介する。				
【備考】	特記事項なし。				
【社会人聴講生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。	【科目等履修生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。	【交換留学生】	国際関係学部の教職課程委員会の判断に従う。

【科目名】	国際経済法 II		International Economic Law II		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策）		【配当年次】	2・3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜4限	【オフィス・アワー】	火曜2限
【科目責任者】	石川 義道				
【担当教員】	石川 義道				
【授業目標】					
●授業目的	国際通商という観点を軸とした「世界観」を獲得する。				
●到達目標	日本語資料を参考にしながら，WTO紛争解決手続における事例の事実関係及び法的議論について，それぞれ英文から理解できるようにする。				
【授業概要】	世界貿易機関（World Trade Organization:WTO）は原則として，貿易の自由化（貿易障壁の撤廃）を通じた資源の最適配分を目的とした国際経済協定であるが，他方で農産物の輸入を通じて疫病・害虫が国内に流入する危険性が認められる場合，それを防止するために輸入制限措置の実施が求められる（例：鳥インフルエンザの国内流入を防止するための，家禽製品の輸入禁止など）。そこで「SPS協定（衛生植物検疫措置の適用に関する協定）」では，このような場合に，一方で疫病・害虫の国内流入を防ぎつつ，他方でそのための輸入制限措置が科学的な根拠を欠いたり過度な制限措置とならないように，WTO加盟国が輸入制限措置を実施することのできる条件を詳細に定めている。 　昨年5月に我が国は，韓国による放射線の影響を理由とする日本産水産物に対する輸入制限措置が「SPS協定（衛生植物検疫措置の適用に関する協定）」に違反するとしてWTO紛争解決手続に提訴を行った。それ以外にも，近年になってSPS協定を巡る先例（インドによる鳥インフルエンザを理由とした輸入制限措置など）が増加している。そこで2016年度は，WTO協定の中でもSPS協定に関する事例を採りあげることとする。 　この授業では，国際経済法IA及びIBで学習してきたWTO協定の基本的規律に関する知識を前提にして，WTO紛争解決手続で実際に問題とされた事例の分析を通じて，より具体的な文脈からWTO協定の規律を理解することを目標とする。				
【授業方法】	受講生による報告・ディスカッションと教員による講義・解説を併用する。対面形式で授業を行う。				
【授業展開】	1 イントロダクション 2 SPS協定とは 3 SPS協定の適用範囲 4 SPS協定の基本的規律 5 ハーモニゼーション 6 危険性評価（Risk Assessment）① 7 危険性評価（Risk Assessment）② 8 危険性管理（Risk Management）① 9 危険性管理（Risk Management）② 10 予防原則① 11 予防原則② 12 SPS協定の事例分析① 13 SPS協定の事例分析② 14 SPS協定の事例分析③ 15 まとめ				
【履修条件】	国際経済法IA及びIBを履修していることが望ましい。また一定程度の英文読解能力が求められる。				
【評価方法】	授業での報告及び発言によって評価を行う（よって期末試験・レポートは行わない）。				
【テキスト】	・Peter Van den Bossche and Werner Zdouch, The Law and Policy of the World Trade Organization, 3rd ed. (Cambridge University Press, 2013).				
【参考書】	・Lukasz Gruszczynski, Regulating Health and Environmental Risks under WTO (Oxford University Press, 2010). ・松下満雄，米谷三以『国際経済法』（東京大学出版会，2015年）。 ・その他関連する日本語資料を配布する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可。	【科目等履修生】	科目等履修生履修可。	【交換留学生】	

【科目名】	日本外交論B		History of Modern Japanese Diplomacy B		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策） 専門プログラム（日本研究） 専門プログラム（アジア研究）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜4限	【オフィス・アワー】	水曜4限 一般教育棟2404
【科目責任者】	森山優				
【担当教員】	森山優				
【授業目標】					
●授業目的	近代の日本史に関する知識の獲得と同時に専門研究のさまざまなノウハウを学ぶ。				
●到達目標	近代国家（国民国家）としての日本の意味を理解すると共に、一国史的な見方を超えた視野を育成する。				
【授業概要】	近代日本（幕末から第二次世界大戦まで）の外交史をA・B続けて通史的に概観する。概要は授業展開を参照。				
【授業方法】	講義（対面） 受講者は毎時間、リアクションペーパー（A5サイズ程度）の提出を求められる。学生からの講義へのフィードバックを重視する				
【授業展開】	1. 日露戦争①　満韓交換論と満韓不可分論 2. 日露戦争②　開戦の政治過程 3. 大陸国家としての日本 4. 日韓併合と植民地化 5. 第一次世界大戦 6. ワシントン体制の成立 7. ワシントン体制に関する議論① 8. ワシントン体制に関する議論② 9. 満州事変 10. 満州国の独立と塘沽停戦協定 11. 華北分離工作 12. 日中戦争の全面化 13. 「南方進出」 14. 「大東亜戦争」と「大東亜共栄圏」 15.　まとめ				
【履修条件】	高校の教科書程度は通読しておくこと。Aの履修者を優先する。				
【評価方法】	学期末に実施される試験（対面） 毎時間ごとに提出されたリアクションペーパーの多寡が成績評価に若干の影響を与える可能性がある				
【テキスト】	井上寿一『日本外交史講義』（岩波書店） 購入は不要 児玉幸多『標準日本史地図』（吉川弘文館）				
【参考書】	B・アンダーソン『想像の共同体』（リブロポート） サイード『オリエンタリズム』（平凡社） 細谷千博『日本外交の軌跡』（NHKブックス） 奈良岡聰智他編『ハンドブック　近代日本外交史』（ミネルヴァ書房、2016） 山内昌之他編『日本近現代史講義』（中公新書、2019）				
【備考】	対面のみの形式				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可。 5人を限度とする	【科目等履修生】	科目等履修生履修可。 5人を限度とする	【交換留学生】	

【科目名】	PBL English Ⅱ B		PBL English Ⅱ B		
【科目種別】	LC2英語コミュニケーション（課題探求型英語Ⅱ）		【配当年次】	2・3年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜1限	【オフィス・アワー】	火曜　2限 (Or by appointment)
【科目責任者】	deHaan, Jonathan				
【担当教員】	deHaan, Jonathan				
【授業目標】					
●授業目的	The purpose of this class is for students to, through participation in an organization (Project Azalea), to: (1) develop language and literacy skills, (2) develop academic and professional skills and (3) implement a service project that contributes to the meeting of the Sustainable Development Goals (e.g., end poverty, improve education, reduce inequalities).				
●到達目標	By the end of the course, students will be able to: 1. Search for, evaluate, synthesize and critique information in various areas of international relations 2. Plan, implement, publicize and evaluate a regional, national or global SDG-related service project 3. Use technology (e.g., websites, email, multimedia) to share information inside and outside an organization 4. Communicate and collaborate effectively with others in order to exchange ideas and achieve shared goals 5. Take initiative, lead and follow others, manage projects and oneself				
【授業概要】	Students in this class work as part of an organization dedicated to conducting activities to meet Sustainable Development Goals (SDGs). Students take on roles such as Activist, Manager, Designer, and Community Liaison. Students work together to plan, implement (i.e., actually conduct the project in society), publicize and evaluate a SDG-related project.				
【授業方法】	Lectures and demonstrations, individual research, group discussions, group work, field work, blogging, and class presentations.				
【授業展開】	1. Introduction 2. Connect / icebreak 3. Practice good communication (English reading, English discussions) 4. Set up learning diaries, critique some projects. 5. Try a short project. 6. Brainstorm some projects, make groups, 7. Write a project proposal 8. Do PR (press releases), do your project 9. Do your project, keep a blog(diary) 10. Do your project, keep a blog(diary) 11. Do your project, keep a blog(diary) 12. Report your project (draft) 13. Report your project (post to the website) 14. Reflect on your learning 15. Exit memo for next year’s class				
【履修条件】	Basic English speaking, listening, reading, and writing skills; interest in using multimedia and digital technologies; and a desire to use English as much as possible in class.				
【評価方法】	Classwork (e.g., discussions, short assignments): 10% Homework (e.g., research, project preparation): 10% Project proposal task: 10% Mid-term presentation: 5% Project field work and blogging: 30% Project evaluation task: 10% Webpage creation task: 5% Final presentation and reflection: 10% Collaboration and communication: 10%				
【テキスト】	None.				
【参考書】	Materials will be distributed in class. Internet and library research will also be required.				
【備考】	This class will be taught primarily in English. Except in cases of absolute emergency, students should plan to attend every lesson.				
【社会人聴講生】	Auditing students are welcome.	【科目等履修生】	Non-degree students are welcome.	【交換留学生】	Exchange students are welcome.

【科目名】	PBL English Ⅱ B		PBL English Ⅱ B		
【科目種別】	LC2英語コミュニケーション（課題探求型英語Ⅱ）		【配当年次】	2・3年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	火曜　2限 (Or by appointment)
【科目責任者】	deHaan, Jonathan				
【担当教員】	deHaan, Jonathan				
【授業目標】					
●授業目的	The purpose of this class is for students to, through participation in an organization (Project Azalea), to: (1) develop language and literacy skills, (2) develop academic and professional skills and (3) implement a service project that contributes to the meeting of the Sustainable Development Goals (e.g., end poverty, improve education, reduce inequalities).				
●到達目標	By the end of the course, students will be able to: 1. Search for, evaluate, synthesize and critique information in various areas of international relations 2. Plan, implement, publicize and evaluate a regional, national or global SDG-related service project 3. Use technology (e.g., websites, email, multimedia) to share information inside and outside an organization 4. Communicate and collaborate effectively with others in order to exchange ideas and achieve shared goals 5. Take initiative, lead and follow others, manage projects and oneself				
【授業概要】	Students in this class work as part of an organization dedicated to conducting activities to meet Sustainable Development Goals (SDGs). Students take on roles such as Activist, Manager, Designer, and Community Liaison. Students work together to plan, implement (i.e., actually conduct the project in society), publicize and evaluate a SDG-related project.				
【授業方法】	Lectures and demonstrations, individual research, group discussions, group work, field work, blogging, and class presentations.				
【授業展開】	1. Introduction 2. Connect / icebreak 3. Practice good communication (English reading, English discussions) 4. Set up learning diaries, critique some projects. 5. Try a short project. 6. Brainstorm some projects, make groups, 7. Write a project proposal 8. Do PR (press releases), do your project 9. Do your project, keep a blog(diary) 10. Do your project, keep a blog(diary) 11. Do your project, keep a blog(diary) 12. Report your project (draft) 13. Report your project (post to the website) 14. Reflect on your learning 15. Exit memo for next year’s class				
【履修条件】	Basic English speaking, listening, reading, and writing skills; interest in using multimedia and digital technologies; and a desire to use English as much as possible in class.				
【評価方法】	Classwork (e.g., discussions, short assignments): 10% Homework (e.g., research, project preparation): 10% Project proposal task: 10% Mid-term presentation: 5% Project field work and blogging: 30% Project evaluation task: 10% Webpage creation task: 5% Final presentation and reflection: 10% Collaboration and communication: 10%				
【テキスト】	None.				
【参考書】	Materials will be distributed in class. Internet and library research will also be required.				
【備考】	This class will be taught primarily in English. Except in cases of absolute emergency, students should plan to attend every lesson.				
【社会人聴講生】	Auditing students are welcome.	【科目等履修生】	Non-degree students are welcome.	【交換留学生】	Exchange students are welcome.

【科目名】	PBL English Ⅱ B		PBL English Ⅱ B		
【科目種別】	LC2英語コミュニケーション（課題探求型英語Ⅱ）		【配当年次】	2・3年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	火曜　2限 (Or by appointment)
【科目責任者】	deHaan, Jonathan				
【担当教員】	deHaan, Jonathan				
【授業目標】					
●授業目的	The purpose of this class is for students to, through participation in an organization (Project Azalea), to: (1) develop language and literacy skills, (2) develop academic and professional skills and (3) implement a service project that contributes to the meeting of the Sustainable Development Goals (e.g., end poverty, improve education, reduce inequalities).				
●到達目標	By the end of the course, students will be able to: 1. Search for, evaluate, synthesize and critique information in various areas of international relations 2. Plan, implement, publicize and evaluate a regional, national or global SDG-related service project 3. Use technology (e.g., websites, email, multimedia) to share information inside and outside an organization 4. Communicate and collaborate effectively with others in order to exchange ideas and achieve shared goals 5. Take initiative, lead and follow others, manage projects and oneself				
【授業概要】	Students in this class work as part of an organization dedicated to conducting activities to meet Sustainable Development Goals (SDGs). Students take on roles such as Activist, Manager, Designer, and Community Liaison. Students work together to plan, implement (i.e., actually conduct the project in society), publicize and evaluate a SDG-related project.				
【授業方法】	Lectures and demonstrations, individual research, group discussions, group work, field work, blogging, and class presentations.				
【授業展開】	1. Introduction 2. Connect / icebreak 3. Practice good communication (English reading, English discussions) 4. Set up learning diaries, critique some projects. 5. Try a short project. 6. Brainstorm some projects, make groups, 7. Write a project proposal 8. Do PR (press releases), do your project 9. Do your project, keep a blog(diary) 10. Do your project, keep a blog(diary) 11. Do your project, keep a blog(diary) 12. Report your project (draft) 13. Report your project (post to the website) 14. Reflect on your learning 15. Exit memo for next year’s class				
【履修条件】	Basic English speaking, listening, reading, and writing skills; interest in using multimedia and digital technologies; and a desire to use English as much as possible in class.				
【評価方法】	Classwork (e.g., discussions, short assignments): 10% Homework (e.g., research, project preparation): 10% Project proposal task: 10% Mid-term presentation: 5% Project field work and blogging: 30% Project evaluation task: 10% Webpage creation task: 5% Final presentation and reflection: 10% Collaboration and communication: 10%				
【テキスト】	None.				
【参考書】	Materials will be distributed in class. Internet and library research will also be required.				
【備考】	This class will be taught primarily in English. Except in cases of absolute emergency, students should plan to attend every lesson.				
【社会人聴講生】	Auditing students are welcome.	【科目等履修生】	Non-degree students are welcome.	【交換留学生】	Exchange students are welcome.

【科目名】	国際組織法B		Law of International Organizations B		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策）		【配当年次】	2〜4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜4限	【オフィス・アワー】	月曜5限
【科目責任者】	北野嘉章				
【担当教員】	北野嘉章				
【授業目標】					
●授業目的	世界的に著名な研究者が国際組織法（国際機構法とも呼ばれる）について英語で解説した専門書の講読等を通じて、組織化の進む国際社会を俯瞰するための知識や分析力を獲得し、また留学先での学修や卒業後の仕事にも耐え得る高度な英文読解力を身に付ける。				
●到達目標	・世界の様々な国際組織の法的枠組に共通する部分、また国際連合（以下「国連」）や欧州連合（以下「EU」）といった主要な国際組織の法的枠組に特有の部分を、法と政治（力）の相互関係の観点や歴史的観点から説明することができる。 ・複雑な構文や抽象的な内容を有する英文を正確且つ迅速に読み解くことができる。				
【授業概要】	産業革命以降の国際社会の組織化の歴史のなかで、国連やEUを始めとする多数の国際組織（international organizations―「国際機関」「国際機構」とも訳す）が誕生し、それらは国際協力の核として国際社会の発展に重要な役割を果たしてきた。国際組織法は、多様な国際組織の枠組と活動のうち共通部分の多い前者に関する法体系であり、国際法（国際公法）の一分野でもあるが、組織化の進む国際社会の俯瞰図を提供するという独自の重要性を有する。本科目では、海外の多くの大学の国際組織法や国際法の授業でも用いられているテキストを、以下の各章につき1回〜3回の授業を使って講読する。 Chapter 1 Introduction / Chapter 2 The Rise of International Organisations Chapter 3 The Legal Position of International Organisations / Chapter 4 International Organisations and the Law of Treaties Chapter 5 Issues of Membership / Chapter 6 Financing Chapter 7 Privileges and Immunities / Chapter 8 Legal Instruments Chapter 9 Dissolution and Succession / Chapter 10 Institutional Structures Chapter 11 The Bureaucracy / Chapter 12 Treaty-Making by International Organisations Chapter 13 Organisational Liaisons / Chapter 14 Issues of Responsibility Chapter 15 Concluding Remarks また、授業中には、国連等の国際組織に関する最近のニュースの紹介・解説も適宜行う。 なお、各々の国際組織の活動については、国際組織法の理解に必要な範囲で授業中に適時解説するが、他科目の履修等によって知識を補完することが望ましい。				
【授業方法】	予習を前提として、テキストに関する受講生との質疑応答や担当教員の補足説明を中心に進める（なお、全訳は行わない）。				
【授業展開】	〔第1回〕国際組織の法的文書①（テキスト第8章前半） 〔第2回〕国際組織の法的文書②（テキスト第8章後半） 〔第3回〕国際組織の解体と承継（テキスト第9章） 〔第4回〕国際組織の構造①（テキスト第10章前半） 〔第5回〕国際組織の構造②（テキスト第10章後半） 〔第6回〕国際組織の職員①（テキスト第11章前半） 〔第7回〕国際組織の職員②（テキスト第11章後半） 〔第8回〕国際組織による条約締結①（テキスト第12章前半） 〔第9回〕国際組織による条約締結②（テキスト第12章後半） 〔第10回〕複数の国際組織間の相互関係①（テキスト第13章前半） 〔第11回〕複数の国際組織間の相互関係②（テキスト第13章後半） 〔第12回〕国際組織の責任の諸問題①（テキスト第14章最初部分） 〔第13回〕国際組織の責任の諸問題②（テキスト第14章中間部分） 〔第14回〕国際組織の責任の諸問題③（テキスト第14章最後部分） 〔第15回〕まとめ（テキスト第15章） 本科目は「国際組織法A」の続きであり、従って、別段のオリエンテーションは行わない。各回の予習範囲の詳細は「国際組織法A」の最終回の授業で提示する。2024年度以前に「国際組織法A」を履修し今年度に「国際組織法B」を履修する者は、初回の授業までに担当教員にメール等で連絡をとること。				
【履修条件】	事前履修又は並行履修が必須の科目：「国際組織法A」 事前履修又は並行履修が望ましい科目：「現代ヨーロッパ論A」「現代ヨーロッパ論B」「英語で読む国際関係入門A（北野担当）」「国際法Ⅰ」「国際法Ⅱ」「国際法Ⅲ」「国際法Ⅳ」「国際経済法ⅠA」「国際経済法ⅠB」				
【評価方法】	予習範囲に関する毎回の小テストや授業中の質疑応答による（従って、授業はできる限り欠席しないこと）。				
【テキスト】	Jan Klabbers, An Introduction to International Organizations Law, fourth edition (Cambridge University Press, 2022, xxx+391pp.)				
【参考書】	・植木俊哉・中谷和弘編集代表『国際条約集』（有斐閣）（購入時の最新版を必携）。 ・薬師寺公夫ほか編集代表『判例国際法 第3 版』（東信堂、2019 年）（購入は任意。主要な判例の要旨や論点が学べる）。 ・玉田大・水島朋則・山田卓平『国際法 第2版』（有斐閣、2022年）（購入は任意。国際法の基礎知識が日本語で学べる）。 ・原田大樹『現代実定法入門 第3版』（弘文堂、2023年）（購入は任意。法学全般の基礎知識や思考法が学べる）。				
【備考】	・テキストは本学の書店では販売されない予定であり、通販サイト等を通じて各自で入手すること（最新版であれば中古品でも電子書籍でもよい）。				
【社会人聴講生】	受入可（十分な英文読解力を有すること）。	【科目等履修生】	受入可（十分な英文読解力を有すること）。	【交換留学生】	受入可（十分な英文読解力を有すること）。

【科目名】	現代アジア交流論B		Contemporary Inter-Asian Exchange B		
【科目種別】	専門プログラム（アジア研究）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜4限	【オフィス・アワー】	水曜日3限
【科目責任者】	*塩崎悠輝				
【担当教員】	*塩崎悠輝				
【授業目標】					
●授業目的	・なぜ人は遠い国へと動くのか？その理由を考える。 ・移動してきた人々がどのように社会を変えるのかを考える。 ・日本（静岡を含む）が、移動してきた人々によってどのように変わってきたのかを考える。 ・アジア諸国へ移動した日本人が、現地の社会をどのように変えたのかを考える。				
●到達目標	・アジアにおける人の移動の歴史について理解する。 ・人の移動について知る資料にどのようなものがあるかを理解する。 ・人の移動が、将来どのような変化を社会にもたらすのか考えられるようになる。				
【授業概要】	人間の社会は、人々の移動によって変化してきた。アジアは世界中の人々が移動する空間であり、日本もその例外ではない。 この授業では、まず日本を起点として、なぜ人は移動するのか？人の移動がどのように社会を変えるのかを見ていく？ そして、規模の拡大が続くアジアでの人々の移動が、日本、アジア、世界全体をどのように変えていくのかを考察していく。				
【授業方法】	講義が中心であるが、毎回配布資料を用い、映像を視聴する機会を数多く設ける。課題提出を通して、授業内容への理解度を確認し、必要があれば適宜サポートする。 授業は基本的には対面で行うが、教員が特に必要と認める事情があった場合には、オンラインでの授業参加も可能とする。				
【授業展開】	第1回　イントロダクション　人の移動でつくられてきたアジア社会 第2回　海を渡る日本人　明治から現在まで 第3回　多民族・多宗教社会としての日本 第4回　グローバル化の中のアジア①　日本企業の海外移転 第5回　グローバル化の中のアジア②　中国企業のアジア展開 第6回　グローバル化の中のアジア③　越境するポップ・カルチャー 第7回　人はなぜ留学するのか？　アジア人の留学傾向 第8回　アジアに来たディアスポラたち 第9回　北アメリカのアジア人社会 第10回　南アメリカのアジア人社会 第11回　ドキュメンタリー映画の回 第12回　アフリカのアジア人社会 第13回　アジアのイスラーム 第14回　ゲスト講義回 第15回　疫病とアジアの人の移動				
【履修条件】	アジアをはじめとして、世界で起きている様々なことについて考えていきたいと思っていること。				
【評価方法】	この授業の内容にかかわる問題について、考えて、根拠を挙げながら自分の主張を示す機会を4回設けます。 主張を示す方法は、口頭か、文章か、討論か、状況にあわせて決めます。 その際に扱う問題は、移民、外国人労働者、日本企業の海外展開などの問題解決にかかわるものです。 各4回について評価を行い、それぞれ成績の10%、20%、30%、40%となります。				
【テキスト】	必要に応じて、適宜配布する。				
【参考書】	澤田 晃宏（2020）『ルポ 技能実習生』筑摩書房 白石隆（2000）『海の帝国　アジアをどう考えるか』中央公論社 早瀬晋三（2012）『マンダラ国家から国民国家へ　東南アジア史の中の第一次世界大戦』人文書院				
【備考】	担当教員は、東南アジアのイスラームについての研究を専門としており、外務省在マレーシア日本国大使館やマレーシア国際イスラーム大学での勤務経験を持つ。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	グローバル化と地域社会		Globalization and Community		
【科目種別】	LC1アカデミック・リテラシー（国際関係学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜2限	【オフィス・アワー】	木曜1限
【科目責任者】	*高畑　幸				
【担当教員】	*高畑　幸				
【授業目標】					
●授業目的	都市社会学および地域社会学の基礎を学び、グローバル化に伴う日本の地域社会の変容について理解する。				
●到達目標	都市社会学および地域社会学の基礎的概念を理解し、それをもとに地域社会の変容について説明することができる。				
【授業概要】	日本では1990年代から外国人人口が急増し、2010年代後半からさらに増加を続けている。「生活者としての外国人」が増えるに従い、日本の地域社会も徐々に変わりつつある。その変化を理解するためには、日本の地域および都市社会の構造を知ることが重要である。この授業では、都市社会学および地域社会学を基盤に日本社会のグローバル化を考察する。				
【授業方法】	講義と受講生による報告を組み合わせて行う。				
【授業展開】	1. 導入：地域社会の歴史と現在 2. さまざまな都市の在り方 3. 都市の社会理論：同心円地帯理論、都市社会構造論 4. 都市の変容：郊外化、ジェントリフィケーション、都市下層社会 5. 地域社会：町内会の歴史と発展 6. 地域社会：地方都市の理論とその在り方 7. 地域社会：住民主体のまちづくり（1） 8. 地域社会：住民主体のまちづくり（2） 9. 地域と外国人：まちづくりへの参画 10. 地域と外国人：地域活性化の担い手として 11. 地域と外国人：行政の諸課題 12. 受講生による報告（1） 13. 受講生による報告（2） 14. 受講生による報告（3） 15. まとめ				
【履修条件】	特になし。この授業を面白いと思ったら、次年度に多文化共生論も受講することをお勧めします。				
【評価方法】	授業への参加（発言、報告、グループ討議）50%、レポート50%。				
【テキスト】	特になし。授業で資料を配布します。				
【参考書】	〇中筋直哉・五十嵐泰正（2013）『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。 〇森岡清志・北川由紀彦（2018）『都市と地域の社会学』放送大学教育振興会。 〇徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子（2019）『地方発　外国人住民との地域づくり』晃洋書房。				
【備考】	1990年代前半から行政の外国人相談や法廷での通訳者として実務経験を持つ教員が、在日外国人の生活上の課題を多面的に知ることで得た知識やネットワークを生かして授業を行い、受講生が地域社会の多文化共生を机上論ではなく「生きた課題」として考えられるようにします。				
【社会人聴講生】	受入れ可能	【科目等履修生】	受入れ可能	【交換留学生】	受入れ不可

【科目名】	英語で読む国際関係入門Ｂ		Introductory Readings in International Relations B		
【科目種別】	LC2英語コミュニケーション（課題探求型英語Ⅱ）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜2限	【オフィス・アワー】	金曜4限
【科目責任者】	飯野　光浩				
【担当教員】	飯野　光浩				
【授業目標】					
●授業目的	逐語訳ではなく、書かれている内容を一貫性のあるものとして理解できるように、高校までの英語の読解力をブラッシュアップすることが、本講義の目的である。				
●到達目標	受講生が、高校までの英語のリーディングを卒業して、一つの内容のある固まりとして、筆者の主張やメッセージを理解できるようになることである。理想を言えば、受講生が辞書を使用することなく、英語記事や論文の内容を把握して、理解できるようになることである。				
【授業概要】	本講義のタイトルに「英語で読む」とあるが、誰が読むのであろうか。担当教員ではなく、もちろん本講義を受講する学生諸君たちである。受講生が世界で認められている英文新聞・雑誌の記事・論文を読んで、その内容を理解して、自分の意見や感想を述べて、担当教員と対話や議論をする。それが本講義の概要である。つまり、高校までの教員がリードする授業と異なり、本講義では受講生が積極的に発言することを前提としていることに注意すること。なお、受講生が読む英文は、国際関係や開発などを含む幅広い意味での経済に関するものである。				
【授業方法】	本講義では、高校までの英語のリーディングとは異なり、文章を一文ずつ和訳することはしない。講義の最初にクイズを実施して、受講生がテキストを読んできているかを確認する。次に、受講生に問いかける形で、テキストの内容把握や要約を行う。その上で、その内容に関して、受講者と対話や議論をする予定である。つまり、本講義は毎回予習をすることを前提としていることに留意すること。				
【授業展開】	テキストの内容や講義の進行の程度は、受講生の理解具合を見ながら、適宜調整していく。詳細は、講義初日のガイダンスのときにアナウンスする。 参考として、以下に昨年度使用したテキストを示す。 “Crises are eating into development funding”, Financial Times, 1 April, 2024 “China’s stimulus is hefty but insufficient”, Financial Times, 25 September, 2024 “The world renewable energy potential is gridlocked”, Financial Times, 09 October, 2024 “China needs its own version of three ‘arrows’”, Financial Times, 02 October, 2024 “Democracy is still better than autocracy’”, Financial Times, 03 April, 2024 “We are moving from democracy to ‘emocracy”, Financial Times, 11 October, 2024 “Nepo baby leaders are stifling south-east Asia”, Financial Times, 24 August, 2024 “We risk a lost decade for the world’s poor”, Financial Times, 01 May, 2024 “Global inequality is narrowing—and that is cause for celebration”, Financial Times, 13 August, 2024 “Root Causes”, Daron Acemoglu, Finance & Development, June 2003 “Trump’s economic policy is full of contradictions”, Financial Times, 14 December 2024				
【履修条件】	基本条件 １）大量の英文を前にして挫折しない強い学習意欲と予習・復習を続けられるだけの根気があること ２）講義で積極的に発言し、講義の進行に貢献できること 以上の基本条件を満たした上で 幅広い意味での経済に関心があること。 世界で起きている経済に関する時事について、英語で理解したいと強く思っていること。 高校までの英語のリーディング能力を維持していること。				
【評価方法】	毎回実施するクイズ、講義中の発言、中間試験・期末試を総合的に評価する。 評価割合は中間試験35%、期末試験35%、講義中の発言15%、クイズ15%である。				
【テキスト】	Financial Times、The Economistなどの英語新聞・雑誌から受講生の希望を考慮した上で、事前にユニパの授業資料管理に掲示する。				
【参考書】					
【備考】	本講義では、第1回目の講義でもクイズ（辞書・資料持ち込み可・相談不可）を実施するので注意すること。				
【社会人聴講生】	聴講可 条件 当該講義を受講する正規学生と同等の学力を有すること。	【科目等履修生】	履修可 条件 当該講義を受講する正規学生と同等の学力を有すること。	【交換留学生】	不可

【科目名】	英語で読む国際関係入門Ｂ		Introductory Readings in International Relations B		
【科目種別】	LC2英語コミュニケーション（課題探求型英語Ⅱ）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜2限	【オフィス・アワー】	木曜3限
【科目責任者】	青山知靖				
【担当教員】	青山知靖				
【授業目標】					
●授業目的	英語論文の講読を通じて、国際関係学の専門的研究に触れる。				
●到達目標	英語論文の講読になじむこと、および、国際関係学の専門的研究について一緒に考え、議論することを目標とする。				
【授業概要】	我々の暮らす現代社会をメディア・コミュニケーション研究の視点から検討する。現代社会の特徴や課題をより多面的に理解することを目指し、情報・コンピューター・コミュニケーションについての技術的・社会的な基礎知識を学ぶ。授業時には関連する時事問題にも触れる。				
【授業方法】	英文テキストを講読する。国際関係学研究、メディア・コミュニケーション研究の時事問題を紹介・解説する。				
【授業展開】	1. ガイダンス　メディア・コミュニケーション研究と国際関係学研究とのかかわり 2. Preface and Introduction 3. Hardware - What Is a Computer? 4. Hardware - Bits, Bytes, and Representation of Information 5. Software - Algorithms 6. Software - Learning to Program 7. 映像資料で学ぶメディア・コミュニケーション（1） 8. Communications - Networks 9. Communications - The Internet 10. Communications - The World Wide Web 11. Data - Privacy and Security 12. 映像資料で学ぶメディア・コミュニケーション（2） 13. What Comes Next? 14. 映像資料で学ぶメディア・コミュニケーション（3） 15.　まとめ　メディア・コミュニケーション研究と国際関係学研究とのかかわり				
【履修条件】	国際関係学に関連する諸学問を広く学ぶ意欲をもった学生を対象とする。 第1回授業（ガイダンス）に必ず出席すること。やむをえず出席できない場合、第2回授業の前日までに、青山研究室（国際関係学部棟2階3213）にテキストを受け取りに来ること。受け取りに来ない者は履修を認めない。				
【評価方法】	出席状況、課題提出状況、授業への貢献度を総合的に評価する。				
【テキスト】	第1回授業時にプリントを配布する。 Kernighan, B.W. 2021. Understanding the Digital World: What You Need to Know about Computers, the Internet, Privacy, and Security, Second Edition. Princeton University Press.				
【参考書】	毎回の授業時に指定する。				
【備考】	1　本授業は対面授業のみの形式で開講する 2 「国関基礎力」を養うための基礎的な科目であるため、早い年次での履修が望ましい。				
【社会人聴講生】	聴講可。 条件は特になし。ただし、毎回の授業時にレポート提出あり。	【科目等履修生】	履修可。 条件は特になし。ただし、毎回の授業時にレポート提出あり。	【交換留学生】	履修可。 条件は特になし。ただし、毎回の授業時にレポート提出あり。

【科目名】	フィールド・スタディ B		Field Study B		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域研究・フィールドワーク）		【配当年次】	1〜3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜1限	【オフィス・アワー】	水曜２限
【科目責任者】	孫　暁剛				
【担当教員】	孫　暁剛				
【授業目標】					
●授業目的	本授業の目的は、フィールドワークという調査・研究手法の体験学習を通して受講生の地域実践力を高めることです。地域実践力とは地域のために行動する力です。その第一歩は地域をよく知ることから始まります。地域をよく知るためには、自ら現地に行き、自分の目で確かめ、聞き取りし、情報を収集することは不可欠です。さらに、多様な情報を正しく判断し行動するには、フィールドでの参与観察にもとづく「経験知」が役に立ちます。この授業では、フィールドワークにおける「体感・実感・共感のプロセス」を解説するとともに、身近なフィールドワークを通して地域で活躍できる実践力を身につけることが目標です。				
●到達目標	受講生がこの授業を通して、人類学・地理学・生態学のフィールドワークの基本を知り、フィールドに出て学ぶことの意義を理解し、フィールドからの発見をもとに持続可能な環境・社会・発展のあり方（SDGs）について考える能力を身につけることを目標とします。				
【授業概要】	フィールド・スタディBの授業では、主として社会と文化に注目した文化人類学のフィールドワークについて解説します。まず、人と人の関係や社会のあり方や社会問題などを理解するためにどのようなフィールドワークが行われているのかを、アジア・アフリカにおける海外調査や海外学生実習の実例を通して説明します。次に、このような調査を実施するための手順や具体的な情報・データの収集・分析方法を説明し、受講生がこれらの方法を使って、ミニ・フィールドワークを行います。そして、ミニ・フィールドワークの成果を個人もしくはグループで発表し、その講評を通してフィールドワークの方法と意義を深めていきます。				
【授業方法】	担当教員によるプレゼンテーション方式の授業と、履修学生によるミニ・フィールドワークと発表を行います。				
【授業展開】	第１回：授業ガイダンス 第２回：フィールド・ワークの成り立ちと発展 第３回：フィールド・ワークの意義 第４回：文化人類学の調査方法と成果（1） 第５回：文化人類学の調査方法と成果（2） 第６回：文化人類学の調査方法と成果（3） 第７回：身近なフィールドワークからSDGsを考える（1） 第８回：ミニ・フィールドワーク（1） 第９回：ミニ・フィールドワーク（1）の成果発表と講評 第10回：身近なフィールドワークからSDGsを考える（2） 第11回：ミニ・フィールドワーク（2） 第12回：ミニ・フィールドワーク（2）の成果発表と講評 第13回：海外フィールドワーク入門 第14回：アジア・アフリカの海外実習から学ぶ 第15回：総括				
【履修条件】	フィールドワーク・発表を効果的に行うために、履修者を50名に限定します。履修登録はシステム上、先着順で自動的に締め切りますので、登録後すぐにキャンセルすることはおやめ下さい。				
【評価方法】	授業への取り組み（出席＋質疑応答＋課題提出）60% ミニ・フィールドワーク（2回）20% ミニ・フィールドワークの成果発表（2回）20%				
【テキスト】	授業後、授業内容の電子ファイルをユニパ（Universal Passport）から配布する。				
【参考書】	椎野若菜・白石壮一郎（編）『フィールドに入る』[100万人のフィールドワーカーシリーズ（1)]　古今書院　2014 武田丈・亀井伸孝（編）『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社 2008 米山俊直・谷泰（編）『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社2005				
【備考】					
【社会人聴講生】	要相談	【科目等履修生】	要相談	【交換留学生】	可（授業は基本的に日本語で行いますが、英語・中国語による個別サポートが可能）

【科目名】	フィールドワークⅠ		Fieldwork I		
【科目種別】	LC3地域実践力（地域研究・フィールドワーク）		【配当年次】	1~3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜2限	【オフィス・アワー】	月曜4限
【科目責任者】	湖中真哉				
【担当教員】	湖中真哉				
【授業目標】					
●授業目的	この授業では、人類学や地域研究の主要な研究方法であるフィールドワーク（現地調査、野外調査）の初歩について学び、その手法になじむことを目的とします。大学での学修に求められるような研究上のフィールドワークは、たんなる野外活動でのことではなく、他者やデータから謙虚に学ぶ姿勢の修得が不可欠です。近年では企業もフィールドワークの手法を取り入れています。教室で学ぶだけではなく、実際の日常生活の現場から学び、学んだことをもとに新発想を生みだすことは、調査研究のみならず実社会でも求められている大切なスキルです。 この授業では、観察、インタビュー、ノートテイキング、発表、質疑応答などを実際に受講生が初歩的に体験することによって、調査研究や実社会で活用できるコミュニケーション能力を高めること、ものごとを批判的に検討する力を伸ばすことも目的とします。				
●到達目標	フィールドワークの手法になじむこと、ミニ・フィールドワークを受講生が体験することによって、調査研究や実社会で活用できる実践力を高めることを目標とします。とくに、実体験の側からものごとを批判的に検討する力を伸ばすことを目標とします。				
【授業概要】	まず、最初に担当教員自身のアフリカでの調査経験に基づいてフィールドワークの基礎について講義します。そして、受講生が自分の生活環境の周囲を観察して気づいたことを報告したり、学生が質問を考えて教室でインタビューしたりすることで、受講生がミニ・フィールドワークを体験します。キャンパス内で気づいたことを観察したり、受講生相互でインタビューしたり、スマートフォンを使った映像撮影を行う予定です。これまで県立大の学生が取り組んできた海外・県内フィールドワークのプロジェクトについても紹介します。 学期末には、受講生がいくつかのチームに分かれて、チーム別にミニ・フィールドワークを行い、調査成果を報告し、それをめぐって議論を行います。				
【授業方法】	対面授業で行います。講義形式、グループ討論、ミニ・フィールドワークの実習形式を組み合わせて行います。毎回、授業受講記録（BRD）の提出が必要です。学期末には、受講生がいくつかのチームに分かれて、チーム別にミニ・フィールドワークを行い、調査成果を報告し、それをめぐって議論を行います。				
【授業展開】	1. 授業ガイダンス: 授業の概要と進め方 2. 海外現地調査（フィールドワーク）入門（1）どうやって調査の準備をするか 3. 海外現地調査（フィールドワーク）入門（2）どのようにして調査を行うか 4. 海外現地調査（フィールドワーク）入門（3）どのようにして調査成果をまとめるか 5. ミニ・フィールドワーク（1）観察の練習: フィールドノーツとスマホをもって屋外に出よう 6. ミニ・フィールドワーク（2）民族誌的インタビューの練習 7. 受講生によるグループ別調査報告と議論 (1)ノートテイキング練習 8. 受講生によるグループ別調査報告と議論 (2)期末課題の説明 9. 受講生によるグループ別調査報告と議論 (3)半構造化インタビュー模擬練習 10. 映像から考えるフィールドワーク: スマートフォンを使って民族誌的フィルムに挑戦しよう 11. 映像から考えるフィールドワーク: 地域社会の内側からみる 12. 学生によるフィールドワークへの挑戦例 13. 受講生によるチーム別調査報告と議論・調査結果最終報告（1） 14. 受講生によるチーム別調査報告と議論・調査結果最終報告（2） 15. 受講生によるチーム別調査報告と議論・調査結果最終報告（3）				
【履修条件】	とくにありません。				
【評価方法】	BRD（各回小レポート）を資料とする各回授業への取り組み（40%）、学期末研究発表と議論（60%）等を総合的に判断して評価します。意欲的に授業に取り組んだ学生を評価します。				
【テキスト】	なし。資料は電子媒体で教員が配付します。				
【参考書】	大村敬一・湖中真哉（編）『「人新世」時代の文化人類学』（放送大学教育振興会、2020年）。湖中真哉 「やるせない紛争調査―なぜアフリカの紛争と国内避難民をフィールドワークするのか―」床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか―フィールドワークへの誘い』、東京外国語大学出版会、2015年（34-52頁）。				
【備考】	授業形態 対面授業				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可 面談あり	【科目等履修生】	科目等履修生履修可 面談あり	【交換留学生】	交換留学生受入不可

【科目名】	人類と文化B		Humanity and Culture B		
【科目種別】	LC4学部基礎科目		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜5限	【オフィス・アワー】	水曜3限
【科目責任者】	富沢壽勇				
【担当教員】	富沢壽勇				
【授業目標】					
●授業目的	現代はインターネット、人工知能やライフサイエンスの発達などで、人間とは何かがあらためて大きく問われる時代になっている。この授業の目的は、文化人類学の視点から、ヒトはどのような点で他の生物やモノと異なるのか、またヒトをヒトたらしめている文化とは何かをまず理解し、さまざまな文化研究のアプローチを学び、グローバル化社会や国際問題を分析・考察する能力と方法論を身につけてもらうことである。				
●到達目標	現代はインターネット、人工知能やライフサイエンスの発達などで、人間とは何かがあらためて大きく問われる時代になっている。この授業の目的は、文化人類学の視点から、ヒトはどのような点で他の生物やモノと異なるのか、またヒトをヒトたらしめている文化とは何かをまず理解し、さまざまな文化研究のアプローチを学び、グローバル化社会や国際問題を分析・考察する能力と方法論を身につけてもらうことである。				
【授業概要】	世界における日本社会・文化の位置づけを人類学的にまず概観した後、文化人類学の各研究領域を学習しながら、日本は世界とどのように関わっていったらよいかを各自考えてもらう授業としたい。ただし、社会・文化問題、政治問題、経済問題、宗教問題などのいずれも、それぞれ個別に細分化してとらえるのではなく、文化の総体的なとらえ方からアプローチすることの重要性を理解してもらう。応用問題としてはイスラーム世界を中心に起きているハラール商品やイスラーム観光をめぐる宗教＝経済現象なども取り上げ、グローバル化のなかの文化や宗教、経済などの事例を実践的に学ぶ。総じて、地球上でどのような文化・社会現象に出くわしても臨機応変に即応できる視座と分析力、行動力を養う場としたい。				
【授業方法】	基本的に講義形式で授業を進める。パワーポイント資料を中心に視聴覚素材を適宜使用する。 なお、感染症の拡大等による不測の事態が生じた場合は、必要に応じてZoomを用いたオンライン授業の形式で行う可能性もある。				
【授業展開】	1. 文化・社会の側面から見た日本の位置づけ（1）～文化領域論の視点から～ 2. 文化・社会の側面から見た日本の位置づけ（2）～アジア諸社会との比較の視点から 1 ～ 3. 文化・社会の側面から見た日本の位置づけ（3）～アジア諸社会との比較 の視点から 2 ～ 4. 権力と政治組織 （1）～社会人類学からのさまざまなアプローチ 1 ～ 5. 権力と政治組織 （2）～社会人類学からのさまざまなアプローチ 2 ～ 6. 贈り物と経済（1）～贈与論と互酬性概念～ 7. 贈り物と経済（2）～威信経済～ 8. 贈り物と経済（3）～農民社会論～ 9. 宗教と世界観（1） ～宗教とは？～ 10. 宗教と世界観（2）～日本人の宗教観とイスラーム世界～ 11. グローバル化のなかの宗教と食文化 ～異なる価値との共生～ 12. 民族とエスニシティ 13. 現代国家と文化 14. グローバル化論と文化 15. まとめと討議				
【履修条件】	原則として同一年度にA，Bを連続してとることが望ましい。				
【評価方法】	学期末試験を主体にしつつ、授業への積極的な参加の度合い、講義の展開に応じて適宜課するリポート等によって、総合的に評価する。 ただし、感染症の拡大等による不測の事態が生じた場合は、学期末試験に差し替えて最終リポートを課すこともあり得る。				
【テキスト】	テキストは特に指定しないが、参考書にある綾部恒雄・桑山敬己（編）『よくわかる文化人類学（第3版）』を授業の内容に応じて適宜参照することを推奨する。 授業資料を原則として本学ユニバーサル・パスポートを通じて毎回受信期限を設けて電子配信する予定である。授業後の再送はしないので注意すること。				
【参考書】	綾部恒雄・桑山敬己（編）『よくわかる文化人類学（第3版）』（ミネルヴァ書房、2025年） 日本文化人類学会（監修）『フィールドワーカーズ・ハンドブック』（世界思想社、2011年）				
【備考】					
【社会人聴講生】	聴講可	【科目等履修生】	履修可能	【交換留学生】	日本語による授業（教授言語、使用資料はいずれも日本語）だが、一般履修生と同じ条件で毎回出席可能であれば、履修または聴講を認める。

【科目名】	ことばと心理Ｂ		Language and Psychology B			
【科目種別】	LC4学部基盤科目		【配当年次】	1・2		
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜3限		【オフィス・アワー】	-
【科目責任者】	寺尾康					
【担当教員】	寺尾康					
【授業目標】						
●授業目的	人間の言語とこころについての理解を深めるため、その重要な課題（言語理解、言語産出）の研究方法とその理論的意味合いについて学ぶ（この目的は国際言語文化学科のディプロマ・ポリシーの３と４に対応する）。					
●到達目標	言葉の研究を通して人間の心の仕組みや働きを探る学際的な研究領域について言語使用と言語産出研究を中心に理解を深める。同時にそこで学んだ観点や分析方法をもとに、言葉を言葉としてみる「気づき」のための高い意識を獲得する。					
【授業概要】	本講義では、以下のような立場から心理現語学をながめることで特徴を出したい。 (1)語彙的知識の獲得を中心に言語獲得の諸問題と方法論を理解する。 (2)発話の研究からみた言語現象の分析を中心にすえる。 (3)身の回りにある言語単位を分析することでことばへの気づき感覚を養う。					
【授業方法】	教科書と毎回配布されるプリントにそって講義形式で授業を進める。この中には自ら言語現象や実験計画を分析し、その結果が持つ面白さを伝える活動も含まれる。活動は、授業中に出される問いについての独力での小レポート作成→仲間との議論→自主的な発言のサイクルで構成されるが、強制的な議論参加や個人を指名してのプレゼンなどは含まない。					
【授業展開】	1. 心の中の辞書1 2. 心の中の辞書2 3. 心の中の辞書3 4. 言語処理の諸理論1 5. 言語処理の諸理論2 6. 言い間違いの言語学1 7. 言い間違いの言語学2 8. 言い間違いの言語学3 9. 発話モデルの比較検討　古典的計算主義時代 10. 発話モデルの比較検討　コネクショニズムから機械学習モデルへ 11. 心理言語学と音韻論1 12. 心理言語学と音韻論2 13. 言語単位の発見1 14. 言語単位の発見2 15. まとめ					
【履修条件】	特にもうけないが、ことばと心理A・Bをこの順で通して履修することが望ましい。授業は日本語で進められるので非日本語母語話者の履修生には講義を理解する日本語力が求められる。					
【評価方法】	期末レポート点70％、授業への貢献と小テスト結果を含む平常点30％を基準に両者を合計して評価する。					
【テキスト】	寺尾康『言い間違いはどうして起こる？』、岩波書店.					
【参考書】						
【備考】						
【社会人聴講生】	聴講可	【科目等履修生】	聴講可	【交換留学生】	聴講可	

【科目名】	組織マネジメント入門B		Introduction to Organization Management B		
【科目種別】	ブリッジ科目		【配当年次】	1-4年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	金2限
【科目責任者】	宮崎　晋生				
【担当教員】	宮崎　晋生				
【授業目標】					
●授業目的	前期に引き続き「教養」としての「マネジメント」を身につけること。 後期は組織内部のメカニズムに焦点を当てる。 この分野や民間営利企業に主たる関心を持ってもらうことは目的ではない。 組織について考えるフレームワークを、社会科学（公共政策、国際開発、共生社会）各分野の関心に応じて身に着けてもらうことが目的。				
●到達目標	・組織＝営利企業に限らず社会に存在している多様な組織（NPO/NGO、国際機関、公共機関など）を含む組織一般について考察するフレームワークを身につけられる。 ・就職やキャリアに関心を持つ学生にとっては、組織の行動論理についての知識を身につけられる。これにより、少しは有意義かつ楽しい就活になることが予想される。				
【授業概要】	【教養としての組織マネジメント】 知らないより知っておいた方がマシな、「教養としての組織論」がメインコンセプト。 民間営利企業に限らず、公的組織・非営利組織・政党など社会における多様な組織について考察する際、 組織論の素養を身につければ組織の課題について「気づき」の感度が変わってくる。 後期講義では、官僚制やリーダーシップ、組織内人間関係やモチベーション、組織学習や知識創造について学ぶ。 営利企業に限らない社会の色々な組織の事例を取り上げて進める。 したがってあらゆる(社会科学の)分野を学ぶ学生の受講を歓迎。 民間・公的、営利・非営利を問わず社会における組織のいずれかに関心があればなおOK。				
【授業方法】	【ディスカッション・グループワークの導入】 一方的に教員が90分話す講義ではない。時折学生同士のディスカッションやグループワークを交えながら進める。 先生が受講者に決まったことを教えるスタイルから、なるべく受講者の「気づき」を中心に講義を創るスタイルに。				
【授業展開】	0. イントロダクション ①　0.0　前期試験講評と後期の概要説明 1.　組織の構造 ②　1.1　経営階層と「官僚制」の発達 ③　1.2　組織構造の類型と近年のトレンド ④　1.3　討論：社内ベンチャーチームの功罪 2.　ヒトと組織の関係 ⑤　2.1　人の欲求とインセンティヴ ⑥　2.2　組織文化と組織内の人間関係 ⑦　2.3　コンフリクト・マネジメント ⑧　2.4　討論：「ハラスメント問題」は如何に処理されるべきか？ 3.　計画とコントロール ⑨　3.1　計画とコントロールの関係 ⑩　3.2　リーダーシップとは何か？ ⑪　3.3　討論：指揮者という職業～リーダーシップと変化について 4.　組織学習と知識創造 ⑫　4.1　組織は学習する：2つのループと「ごみ箱」モデル ⑬　4.2　新しい知識を創る組織：「暗黙知」と「形式知」の相互作用 ⑭　4.3　ゲストとの対話セッション ⑮　期末試験				
【履修条件】	順序は前後しても、この科目と合わせて前期A科目も受講してほしい。 ・「多国籍企業論AB」or「国際経営論AB」受講を予定されている場合、この講義を受講しておくことが望ましい。 受講者16人以上が目標。できれば25人程度が望ましい。				
【評価方法】	平常点・ディスカッションでの貢献30%＋期末試験70%で評価。 毎回、フィードバックのための簡単なフォームに回答。				
【テキスト】	前期後期併せてメインテキスト：伊丹敬之・加護野忠男『ゼミナール経営学入門』日本経済新聞社。 サブテキスト：野中郁次郎『経営管理』日経文庫				
【参考書】	適宜指定				
【備考】	キーワード：組織、マネジメント＆リーダーシップ、官僚制、インセンティブとモチベーション、組織文化、組織学習、知識創造				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	Welcome!

【科目名】	国際法 I		International Law I		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜3限	【オフィス・アワー】	水4 メールでご連絡ください。Zoom、電話又は対面で実施します。
【科目責任者】	坂巻　静佳				
【担当教員】	坂巻　静佳				
【授業目標】					
●授業目的	・国際社会を法的な観点から評価できるようになること。 ・国際社会と国際法の変容、国際法が国際社会に果たしている役割とその限界を理解すること。				
●到達目標	・国際法の総論に区分される国際法の歴史、法源、条約法、国際法と国内法の関係の各分野に関する基本的な法規則・理論の内容、機能・役割、及び、法的論点を理解している。 ・これらの分野に関わる法規則の成り立ち、展開、その限界を理解している。 ・これらの分野に関わる国際社会の諸問題を、法規則を適用して法的な観点から評価できるようになる。				
【授業概要】	外国に旅行できるのはなぜでしょうか？外国から郵便が届くのはなぜでしょうか？海で魚をとることができるのはなぜでしょうか？その背後には、国際社会の基本的かつ共通のルールである国際法がかかわっています。 国際法は、国家その他の一定の行為を規制し、一定の行為を認めることによって、国際社会の安定や平和に大きな役割を果たしてきました。今日、国際社会を理解するには、国際法を学ぶことが不可欠であるといえましょう。 　国際法の入門科目であるこの授業では、国際法の成り立ちを概説することを通じて、国際法の発展と現代国際法におけるきわめて重要な原則を学びます。また、国際関係を規律する国際法の基本的な枠組みを学び、国際法が国際社会においてどのように機能しているのかを把握します。 　国際法Iは、これを受講すれば国際法の基礎的な部分はある程度押さえられるよう授業を構成していますので、国際法に興味のある方は手始めに受講してみていただければ幸いです。 　この授業を通じて、国際法についての理解を深め、国際社会を捉えるひとつの視点を手に入れてもらえればと思っています。				
【授業方法】	・本授業は講義形式で実施します。 ・授業の連絡・授業資料の配布等は、Google Classroomを利用します。Universal Passportでは実施しないので御注意ください。 ・Universal Passportでの履修登録は当然に必要です。Google Classroomの本人確認のために使用するので、初回授業２日前までに、Universal Passportに履修登録しておいてください。 ・履修希望者は、初回授業までに、Google Classroomの国際法Iクラスに参加しておいてください。 ・Google Classroomへの参加には、おそらくGmailアカウントの設定が必要です。 ・Google Classroomの登録名は、学籍登録してある氏名にしてください。Universal Passportで履修登録済みの氏名と合致しない場合は削除します。事情により困難な場合はメールで事前に御連絡ください。 ・Google Classroomへの参加方法は以下のURLを御参照ください。 　https://onl.la/MyCBVku ・この授業のGoogle Classroomのクラスコードは2025年9月27日以降にWeb上のシラバスに掲示します。 ・状況等によりZoom（同時双方向）による授業になる場合があります。				
【授業展開】	＊進行状況その他により回が前後したり、内容が変更となる可能性があります。御了承ください。 第1回　イントロダクション・法的評価の方法 第2回　国際法の特色 第3回　国際法の歴史① 第4回　国際法の歴史② 第5回　国際法の歴史③ 第6回　国際法の法源① 第7回　国際法の法源② 第8回　条約法① 第9回　条約法② 第10回　条約法③ 第11回　条約法④ 第12回　条約法⑤ 第13回　国際法と国内法① 第14回　国際法と国内法② 第15回　まとめ				
【履修条件】	・授業の初回に進め方等について説明するので、本授業の受講を希望する者は可能な限り初回の授業に出席すること。 ・1年生での履修を推奨する。（その理由等については備考欄を参照のこと。）				
【評価方法】	・単位を取得するためには期末試験を受験しなければならない。 ・成績は期末試験により評価する予定である。授業への参加および出席を考慮する場合もある。 ・変更のある場合は及び詳細は随時で説明する。				
【テキスト】	『国際条約集』（有斐閣、2025年）。 前年度までのものでもかまいませんが、毎年収録文書に変更があるので御注意ください。 前年度版までを使用することによる不利益については、すべて自己責任となりますのでご承知おきください。 また、試験での使用認めているのは、傍線を含め書き込みの一切ない条約集のみです。１つでも書き込みがあると使用できなくなり				

	ますので、使用の際は御注意ください。 教科書については初回の授業で説明します。				
【参考書】	初回授業時に説明する。				
【備考】	・本授業（国際法I）で扱う内容は、国際法II、国際法III及び国際法IVを受講する前提となります。また、国際法Iで扱う内容は、国際経済法、国際組織法を学ぶ上での前提ともなります。国際法I、国際法II、国際法III及び国際法IVははそれぞれ独立した科目で、単体でも受講可能ですが、内容的に一続きとなっており、国際法I、国際法II、国際法III、国際法IVの順序で履修されていくことを予定しています。国際法Iで扱った内容は理解していることを前提に、国際法IIの授業は実施されます。国際法IIIの授業は、国際法Iと国際法IIの知識を備えていることを前提に、国際法IVの授業は、国際法I、国際法II及び国際法IIIは履修済みであることを前提に、進められます。したがいまして、国際法II、国際法III及び国際法IVを履修する可能性のある学生は、1年生の段階で国際法Iを履修しておくことを強く推奨します。 ・国際法Ⅰ、国際法II及び国際法IIIの単位取得は、坂巻担当の演習IAを履修する必要条件となっています。坂巻担当の演習を希望する可能性のある学生は、1年生の後期に本授業を履修するようお願いします。（2年生の後期水曜3時間目は第二外国語の授業が開講されるので、2年生後期に国際法Iを履修することは実際上難しい状況です。）				
【社会人聴講生】	履修可。ただし以下の要件をみたすこと。 ・Googleアカウントを取得すること。（授業に関する連絡及びレジュメ等の配布は、Google Classroomを通じて実施する。授業では配布しないので注意すること。） ・状況等によりZoomで実施する場合があるので、Zoomでの授業を受講の可能な通信とデバイスを利用できること。	【科目等履修生】	履修可。ただし以下の要件をみたすこと。 ・Googleアカウントを取得すること。（授業に関する連絡及びレジュメ等の配布は、Google Classroomを通じて実施する。授業では配布しないので注意すること。） ・状況等によりZoomで実施する場合があるので、Zoomでの授業を受講の可能な通信とデバイスを利用できること。	【交換留学生】	履修可。ただし以下の要件をみたすこと。 ・Googleアカウントを取得すること。（授業に関する連絡及びレジュメ等の配布は、Google Classroomを通じて実施する。授業では配布しないので注意すること。） ・状況等によりZoomで実施する場合があるので、Zoomでの授業を受講の可能な通信とデバイスを利用できること。

【科目名】	法学概論Ｂ		Introduction to Law B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	1･2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜4限	【オフィス・アワー】	火曜2限
【科目責任者】	石川義道				
【担当教員】	石川義道				
【授業目標】					
●授業目的	我々は様々なリスクに直面しながら生活をしている（健康リスクなど）。そのようなリスクを法はどこまで、そしてどのように（どのような根拠で、どのような形で）規制をしているのか。また、社会としてあるリスクを受容していくプロセスはどのような構造になっているのか。本授業では「法とリスク」という視点から法学の基礎を学んでいく。				
●到達目標	我々は日々リスクに曝されて生きているところ、それを規制するための法のありかたについて理解をすることを目標とする。				
【授業概要】	授業では憲法訴訟・行政訴訟などで実際に問題となった事例・判例の学習を通じて「リスクと法」という問題について考えていく。加えて「法と経済学」の観点として、行動経済学の知見をもちいて法制度についてどのように理解できるかも学習していく。				
【授業方法】	講義形式で行う。				
【授業展開】	１　イントロ ２　リスクとは何か（ハザードとの違い） ３　リスク評価とは（リスクの内容および程度をどのように把握するのか） ４　リスクをめぐる国内判例の検討① ５　リスクをめぐる国内判例の検討② ６　予防原則について① ７　予防原則について② ８　我々のリスク認識は歪んでいるか①（理論編） ９　我々のリスク認識は歪んでいるか②（実践編） １０　リスクの法規制①（食品安全を例に） １１　リスクの法規制②（原子力発電の設置を例に） １２　社会によるリスク受容のプロセス① １３　社会によるリスク受容のプロセス② １４　新型コロナウイルス感染症をめぐる議論 １５　まとめ				
【履修条件】	特になし。				
【評価方法】	期末レポートで評価する。詳細はイントロで説明する。				
【テキスト】	特に指定しない。適宜資料をユニバーサル・パスポートにアップしていく。				
【参考書】	特に指定しない。適宜資料をユニバーサル・パスポートにアップしていく。				
【備考】	授業はZoomを用いた遠隔形式で実施する場合がある。				
【社会人聴講生】	認める。	【科目等履修生】	認める。	【交換留学生】	認める。

【科目名】	人種と民族の社会学B		Sociology of Race and Ethnicity B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際関係学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	集中講義	【オフィス・アワー】	-
【科目責任者】	大川ヘナン				
【担当教員】	大川ヘナン				
【授業目標】					
●授業目的	この授業では、現代社会における人種・民族の問題を掘り下げ、構造的な差別や社会的排除のメカニズムを批判的に考察することを目的とする。メディアやSNSでのステレオタイプ、ヘイトスピーチ、制度的人種差別、移民労働の課題など、今日の社会問題を取り上げることで、人種・民族が私たちの日常や政策にどのような影響を与えているかを理解する。また、ブラック・ライヴズ・マターや多文化共生政策などの具体的な事例を検討し、解決策やより公平な社会を実現するための方法について議論する力を養う。				
●到達目標	1. 現代社会における人種差別や排除のメカニズムを理解し、分析できる。 2. メディアやSNSが人種・民族のイメージ形成に与える影響を批判的に考察できる。 3. 日本と海外の移民政策・労働市場における人種・民族の問題を比較できる。 4. 社会運動や政策提言を通じて、人種・民族の課題にどのように対応できるかを議論できる。 5. AI時代の新たな人種・民族問題について考え、未来の社会を展望できる。				
【授業概要】	本授業では、日常生活の中に見られる人種や民族に関わるトピックを取り上げ、社会学的視点から考察する。授業では、学術的な文献だけでなく、映像作品やその他の資料も活用し、学生同士の議論を通じて多角的な視点を養う。講義とディスカッションを組み合わせることで、学生が主体的に学び、人種と民族に関する理解を深めることを目指す。				
【授業方法】	本授業は、対面授業とオンライン授業を併用して実施する。いずれの形式でも、議論や意見交換を重視し、学生の積極的な参加が求められる。オンライン授業の場合も、双方向のやり取りを意識し、主体的に学ぶ姿勢を重視する。				
【授業展開】	1日目：差別・偏見・構造的排除 1. 人種差別の構造と制度的差別 2. ステレオタイプの影響 3. ヘイトスピーチとヘイトクライム 4. SNSと現代の人種・民族問題 5. グループワーク 2日目：現代社会の課題と運動 6. ブラック・ライヴズ・マター（BLM）運動の背景と影響 7. アジア人差別とパンデミックの影響 8. 日本における外国人労働者の現状 9. 多文化共生の可能性と課題 10. 映像鑑賞＆ディスカッション 3日目：未来の社会と実践的応用 11. AI時代の人種・民族問題 12. 人種・民族と教育の役割 13. グローバル時代のアイデンティティ形成 14. 最終課題発表＆ディスカッション 15. 総括				
【履修条件】	・本授業は、「人種と民族の社会学A」を履修済みであることを履修条件とします。 • 「人種と民族の社会学A」を履修していないが、本授業の受講を希望する場合は、事前に相談してください。 ・本授業は集中講義として実施されるため、すべての日程に参加できる学生のみ履修可能とする。欠席や部分的な受講は認められないため、事前に日程を確認し、履修登録を行うこと。				
【評価方法】	本授業の成績は、以下の基準に基づいて評価する。 • 授業への参加態度およびディスカッションへの積極的な貢献（30%） • 授業内課題（30%） • 最終課題（40%）				
【テキスト】	なし				
【参考書】	本授業の参考書は、各回のテーマに応じて適宜紹介します。				
【備考】	• 受講にあたり、言語や学習環境など何らかの困難がある場合、または事前に懸念がある場合は、調整の可能性について相談を受け付ける。留学生も含め、必要があれば遠慮なく連絡すること。 • 授業内容や展開の順序は、受講生の状況や関心に応じて柔軟に変更する可能性がある。 • 本授業は、自ら課題に向き合い、深く思考することに重点を置いている。そのため、主体的に学び、積極的に議論に参加する意欲のある学生の受講を歓迎する。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	日本語のみで行う授業で問題がない場合は可

【科目名】	国際法III		International Law III		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策） 専門プログラム（国際開発）		【配当年次】	2〜4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	水4 事前にメールで御連絡ください。Zoom、電話、対面のいずれかで面談します。
【科目責任者】	坂巻　静佳				
【担当教員】	坂巻　静佳				
【授業目標】					
●授業目的	・国際社会を法的な観点から評価できるようになること。 ・国際社会と国際法の変容、国際法が国際社会に果たしている役割とその限界を理解すること。				
●到達目標	・国際法の各論に区分される領域主権、海洋法、宇宙法、人権法、国際刑事法、国際組織法の各分野に関する基本的な法規則の内容、機能・役割、および、法的論点を理解している。 ・これらの法規則の成り立ち、展開、その限界を理解している。 ・これらの分野にかかわる国際社会の諸問題を、法規則を適用して法的な観点から評価できるようになる。				
【授業概要】	現在の国際社会において、国際法は大きな役割を果たしています。国家は、自国の行為を国際法に依拠して評価し、それをひとつの考慮要素として政策を決定します。他国の行為を国際法に依拠して評価し、それを踏まえて支持を表明したり、批判したりします。また、国家は、条約を締結したり国際組織を設立したりして、国際社会において一定の価値を実現したり、一定の方向へと国際社会を動かそうとしてきました。そして、国家は、国際組織の決議に従い、国際的事案に対して資金を拠出したり人的支援を行ったりもします。報道などでは必ずしも明示されていなくとも、国家及び国際社会の動きの背景には、国際法が大きく作用していることがしばしばあります。今日、国家及び国際社会を理解するうえで、国際法を知ることは不可欠といえるでしょう。 　この講義は国際方I及び国際法IIから連続しており、国際法IVを受講する前提となります。 　国際法IIIでは、その前半で陸・海・空について、後半で国際法における個人と国際組織について、どのような規律が形成されてきたのか取り上げます。領海・接続水域で航行する外国の船舶に対し、沿岸国は何ができるのでしょうか？滞在中の外国で不当に逮捕された場合、私たちはどうすればよいのでしょうか？ 　国際法についての理解を深めることを通じて、国際社会を捉えるひとつの視点を手に入れてもらえればと思っています。				
【授業方法】	・本授業は講義形式で実施します。 ・ほぼ毎回の授業後、その授業の復習のために、提出は任意の、記述式の演習問題を課す予定です。 ・授業の連絡・課題の提出・授業資料の配布等は、Google Classroomを利用します。Universal Passportでは実施しないので御注意ください。 ・Universal Passportでの履修登録は当然に必要です。Google Classroomの本人確認のために使用するので、初回授業２日前までに、Universal Passportに履修登録しておいてください。 ・履修希望者は、初回授業までに、Google Classroomの国際法IIIクラスに参加しておいてください。 ・Google Classroomへの参加には、おそらくGmailアカウントの設定が必要です。 ・Google Classroomの登録名は、学籍登録してある氏名にしてください。Universal Passportで履修登録済みの氏名と合致しない場合は削除します。事情により困難な場合はメールで事前に御連絡ください。 ・Google Classroomへの参加方法は以下のURLを御参照ください。 　https://onl.la/MyCBVku ・この授業のGoogle Classroomのクラスコードは2025年9月27日以降にWeb上のシラバスに掲示します。 ・授業は原則として対面で実施します。 ・状況等によりZoom（同時双方向）による授業になる場合があります。				
【授業展開】	・授業の進行状況により前後する可能性がある。 第1回　イントロダクション 第2回　国家領域① 第3回　国家領域② 第4回　海洋法① 第5回　海洋法② 第6回　海洋法③ 第7回　中間試験 第8回　空と宇宙の国際法 第9回　国際化地域 第10回　国際法における個人① 第11回　国際法における個人② 第12回　国際人権保障① 第13回　国際人権保障② 第14回　国際組織① 第15回　国際組織②				
【履修条件】	・国際法I及び国際法IIを履修済みであることが望ましい。 ・国際法I及び国際法IIの内容を理解していることを前提として授業を進めるので、同授業を受講していない場合、その範囲については自習して授業に臨むこと。 ・第１回授業で授業の進め方等を説明するので、第１回授業に出席することが望ましい。				
【評価方法】	・中間試験及び期末試験、両方の試験の受験を単位取得の必要条件とする。この条件を満たさない者には単位を付与しない。 ・成績評価は中間試験50％＋期末試験50％で実施する予定である。演習問題の提出点・出席等を加味する場合がある。詳細は初回授				

	業で説明する。 ・状況により得点配分や評価方法を変更する可能性がある。その場合は随時通知する。				
【テキスト】	『国際条約集』（有斐閣、2025年）。 前年度までのものでもかまいませんが、毎年収録文書に変更があるので御注意ください。 前年度版までを使用することによる不利益については、すべて自己責任となりますのでご承知おきください。 また、試験での使用認めているのは、傍線を含め書き込みの一切ない条約集のみです。１つでも書き込みがあると使用できなくなりますので、使用の際は御注意ください。 教科書については初回の授業で説明します。				
【参考書】	授業にて説明する。				
【備考】	・国際法Ⅳを履修する前提となるので、履修する可能性がある場合には受講しておくことが望まれる。 ・国際法Ⅰ、国際法Ⅱ及び国際法Ⅲの単位取得は、坂巻担当の演習を履修する必要条件となっています。坂巻担当の演習を希望する可能性のある学生は、2年生の後期に本授業を履修してください。				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可。 ただし、国際法Ⅰおよび国際法Ⅱの内容に相当する国際法の知識を有していること、または、当該範囲について予習して臨むことを条件とする。 また、以下の要件を満たすこと。 ・Googleアカウントを取得すること。（授業に関する連絡及びレジュメ等の配布は、Google Classroomを通じて実施する。授業では配布しないので注意すること。） ・状況等によりZoomで実施する場合があるので、Zoomでの授業を受講の可能な通信とデバイスを利用できること。	【科目等履修生】	科目等履修生履修可。 ただし、国際法Ⅰおよび国際法Ⅱの内容に相当する国際法の知識を有していること、または、当該範囲について予習して臨むことを条件とする。 また、以下の要件を満たすこと。 ・Googleアカウントを取得すること。（授業に関する連絡及びレジュメ等の配布は、Google Classroomを通じて実施する。授業では配布しないので注意すること。） ・状況等によりZoomで実施する場合があるので、Zoomでの授業を受講の可能な通信とデバイスを利用できること。	【交換留学生】	履修可。 ただし、国際法Ⅰおよび国際法Ⅱの内容に相当する国際法の知識を有していること、または、当該範囲について予習して臨むことを条件とする。 また、以下の要件を満たすこと。 ・Googleアカウントを取得すること。（授業に関する連絡及びレジュメ等の配布は、Google Classroomを通じて実施する。授業では配布しないので注意すること。） ・状況等によりZoomで実施する場合があるので、Zoomでの授業を受講の可能な通信とデバイスを利用できること。

【科目名】	アジア地域協力論B		Asian Regional Cooperation B		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策） 専門プログラム（国際開発） 専門プログラム（アジア研究）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜3限	【オフィス・アワー】	水曜日3限
【科目責任者】	*塩崎悠輝				
【担当教員】	*塩崎悠輝				
【授業目標】					
●授業目的	To understand the background of East Asian issues reported in daily news.				
●到達目標	a. To get used to read and interpret news article in English b. To be skilled in discussing current topics				
【授業概要】	All the lectures are in English. 　The regional focuses of this course are East Asia and South Asia. The rise of China and India, their siginificance in Asian regional cooperation are also discussed. 　Relevant issues in this course are diplomacy, security, economy, migration, education, and so on. Any topics on East Asia reported in media during the semester can be focused.				
【授業方法】	The students are expected to listen and analyze significant political speeches in contemporary Asia. The news articles are also discussed in class to deepen understanding on issues and their backgrounds. 　While the lecture is the main part of the course, there are frequent occasions to invite students to discussions on the topics of every class. Classes will take place in campus classroom. However, if certain students have necessary and sufficient reasons, they can participate class online.				
【授業展開】	Every class has specific topic to discuss. The topics can be changed frequently up to students' interests. 1. Introduction: How to accelerate the cooperation and integration of East Asia? 2. ASEAN: The past and the future 3. The end of the Cold War and the changes in East Asia 4. The Chinese presence in Southeast Asia 5-7. Case study of peace building: 1) Cambodia, 2) East Timor, 3) Southern Philippines and Southern Thailand 8. Refugee issues in East Asia: Vietnam and Myanmar 9. Japanese ODA and regional integration strategy 10. The rise of India and transitions in South Asia 11. NGOs in Asia 12. Indo-Pacific Ocean and Instability in Asia 13. Movement of labor power in contemporary East Asia 14. Korean companies in Asia 15. China, India and other Asia				
【履修条件】	The medium is English in this course. The participants are required to be capable of discussing in class, giving oral presentation, and writing reports in English.				
【評価方法】	There are four occasions to discuss on specific topics in claass or assignments. They are 10%, 20%, 30% and 40% of your mark. The students are required to discuss regional cooperation issues such as education, economy, security, and so on in oral.				
【テキスト】	Handouts will be distributed in every class.				
【参考書】	Rush, J. (2018) Southeast Asia: A Very Short Introduction. Oxford University Press.				
【備考】	The lecturer was a Researcher & Adviser at the Embassy of Japan in Malaysia, and an assistant professor at International Islamic University Malaysia.				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	アジアにおけるロシア		Russia in Asia		
【科目種別】	専門プログラム（アジア研究） 専門プログラム（ヨーロッパ研究） 専門プログラム（国際公共政策）		【配当年次】	2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜4限	【オフィス・アワー】	月曜３限
【科目責任者】	堀内 賢志				
【担当教員】	堀内 賢志				
【授業目標】					
●授業目的					
●到達目標	ロシアとの関係が日本に与えてきた影響、北方領土問題の概要を理解する。また、ロシアとアジア・ユーラシア地域諸国との関係について理解する。それを通じて、日露関係、およびそれを含むアジア・ユーラシアの国際秩序のあり方について、基本的な知識と自分なりの考えを持つことができる。				
【授業概要】	ロシアのアジアとの関わりを、日露関係を中心に見ていく。本講義の前半では、歴史をたどりながら、ロシアがアジアに関わる中で日露がどのような関係を築いてきたかを、両国間の交流・対立の両側面に焦点を当てて論じる。後半は、近年ロシアが進めてきた「東方シフト」、「大ユーラシア・パートナーシップ」といった政策と、その背景、狙い、具体的な取り組みについて、ウクライナ侵攻後の状況とも関連させながら論じる。				
【授業方法】	対面による講義形式。				
【授業展開】	1. イントロダクション：アジアにおけるロシアと日露関係 2. 日露の出会いから国交樹立へ 3. ロシアのアジア進出と日露戦争 4. 日露戦争後から第二次世界大戦までの日露関係 5. 戦前における日露間の人の移動と交流 6. 北方領土問題と戦後の日ソ関係 7. 北方領土問題解決に向けた取り組み 8. 現地から見た北方領土問題 9. ロシアのアジア・ユーラシア政策とロシア極東地域 10. ロシアのエネルギー資源開発と日本 11. ロシアにおける輸送・物流の発展と日本 12. ロシア極東地域の産業発展と日露経済協力 13. 中露関係と国境地域間の交流 14. 韓国・北朝鮮とロシア 15. これからの日露関係				
【履修条件】	「ロシアの社会と文化」「現代ロシア・東欧論」「ロシア現代史」を履修していることが望ましい（履修のための条件とはしない）。				
【評価方法】	平常点60％、期末試験40％で評価する。平常点は、毎回の授業での取り組み姿勢や課題の内容などで評価する。全授業回数の3分の2以上の授業に出席し、授業で課す課題等を提出すること、期末試験を受けることを、単位取得の必要条件とする。				
【テキスト】	教科書は使用しない。毎回レジュメを配布する。				
【参考書】	服部倫卓、吉田睦編『ロシア極東・シベリアを知るための70章』（明石書店、2024年）、麻田雅文『日露近代史　戦争と平和の百年』（講談社現代新書、2018年）、堀内賢志・齋藤大輔・濱野剛編『ロシア極東ハンドブック』（東洋書店、2012年）。その他授業の中で適宜紹介する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可（聴講条件は特になし）	【科目等履修生】	科目等履修生履修可（受け入れ条件は特になし）	【交換留学生】	交換留学生履修可（十分な日本語の聴解・作文能力を要件とする）

【科目名】	現代中国の諸相Ｂ		Aspects of Contemporary China B		
【科目種別】	専門プログラム（国際公共政策） 専門プログラム（アジア研究）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜4限	【オフィス・アワー】	木曜4限
【科目責任者】	大野絢也				
【担当教員】	大野絢也				
【授業目標】					
●授業目的	中国本土と台湾や香港・澳門の関係について歴史的な視点から学ぶ。				
●到達目標	①中台の両岸関係や香港・澳門での一国二制度について理解するための基礎的な知識を習得すること。 ②「2つの中国」問題や香港問題について、どのような歴史的背景があるのか、理解すること。 ③「2つの中国」問題や香港問題に関する国際関係について、理解を深めること。				
【授業概要】	現代の中国は、周縁における民族問題に加えて「2つの中国」問題や香港問題を抱えている。特に近年では、中国の大国化にともなって問題が深刻化しており、世界情勢に与える影響も増大している。中国本土と台湾や香港・マカオの関係を歴史的な視点で紐解き、日本やイギリス、アメリカ、ロシアなど対外的な側面も含めて如何なる構造的な特質を有しているのか、今後どのような展開をたどると考えられるのか、様々な切り口から見ていくことに重点を置く。				
【授業方法】	基本的に対面形式で講義を進める。その他、各学期の導入（初回）と総括（最終回）において、グループワークを実施する。グループワークでは、導入において台湾・香港・澳門に関するキーワードを抽出し、総括では自らの考えについて意見を表明し、グループ毎で討論を行う。				
【授業展開】	第１回　初回ガイダンス・導入（グループワーク：キーワードの抽出） 第２回　もう一つの周縁（１）：前近代の中国と台湾・香港・澳門 第３回　もう一つの周縁（２）：香港・澳門の持つ歴史的背景 第４回　もう一つの周縁（３）：台湾の持つ歴史的背景 第５回　中国周縁と日本（１）：日本と香港・澳門の関係史 第６回　中国周縁と日本（２）：日本統治時期の台湾史 第７回　中国周縁と日本（３）：戦時期における台湾・香港・澳門 第８回　台湾海峡問題の淵源（１）：中国・台湾の分断と人民共和国の成立 第９回　台湾海峡問題の淵源（２）：中国と台湾をめぐる国際関係 第１０回　台湾海峡問題の淵源（３）：中台両岸関係の形成と展開 第１１回　現代中国と香港・澳門（１）：返還をめぐる国際関係 第１２回　現代中国と香港・澳門（２）：一国二制度の変遷 第１３回　世界のなかの中国周縁（１）：現代の香港問題と国際情勢 第１４回　世界のなかの中国周縁（２）：現代の台湾問題と国際情勢 第１５回　総括（グループワーク：討論）				
【履修条件】	中国の周縁に加えて、台湾・香港・澳門、東アジアとの関係史に関心があり、積極的に授業に参加する意欲があること。				
【評価方法】	期末試験（40%）、グループワーク（40%）、出席状況（20%。欠席3回で原則不可）、などに基づき、総合的に評価する。詳細な説明は初回ガイダンスで行う。				
【テキスト】	特に指定しない。資料を随時配布する予定。				
【参考書】	次の参考文献は、授業内容に関連する主要なものとして刊行年順に挙げる。1.塩出浩和『可能性としてのマカオ：曖昧都市の位相』亜紀書房、1999年。2.松田康博、清水麗編著『現代台湾の政治経済と中台関係』晃洋書房、2018年。3.中村元哉『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』有志社、2018年。4.ジョン・M・キャロル（倉田明子、倉田徹訳）『香港の歴史：東洋と西洋の間に立つ人々』明石書店、2020年。5.若林正丈『台湾の歴史：台湾　変容し躊躇するアイデンティティ』講談社、2023年。その他、初回ガイダンス時に参考文献リストを配布する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	グローバル化の人類学		Anthropology of Globalization		
【科目種別】	専門プログラム（国際開発）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜5限	【オフィス・アワー】	月曜4限
【科目責任者】	湖中真哉				
【担当教員】	湖中真哉				
【授業目標】					
●授業目的	地球環境と人類の在り方について現場の視点から考えてみたい人を歓迎します。現在の地球社会は、グローバル化が進行すると同時に、貧困層や社会的弱者が取り残され、紛争や対立が激化し、人類が地球に与える環境負荷も限界に達しつつある「人新世時代」を迎えています。この授業では、地球規模の議論と各地の現場の両面から、地球と地域の課題に取り組むグローバル化の人類学について学びます。とくに、地球環境と資源、極度の貧困、紛争・難民などのグローバルな課題について、地球規模の課題の視点と具体的な現場の視点の両面から考える能力を身につけることを目的とします。				
●到達目標	地球規模の視点と具体的な現場の視点の両方を持つ人類学の考え方やものの見方を理解すること、地球規模の課題と視点を学び、現在の世界に対する視野を広げ、複眼的に考えられるようになること、各回の質疑応答やディベートの経験の積むことを通じて、コミュニケーション能力を伸ばすことを目標とします。協働で課題にとり組む力を身につけることも重要な目標です。				
【授業概要】	海外での現地調査（フィールドワーク）をおもな研究方法とする人類学や地域研究の立場から、授業を行います。 まず、グローバリゼーションをめぐる論争や対立を、環境と開発、紛争と難民などを中心テーマに考えていきます。そして、人新世時代の新しい人類学について考えていきます。グローバリゼーションが進んだ結果、気候変動（地球温暖化）や生物多様性の消失の問題に典型的にあらわれているように、現在の地球は、人類が地球環境を創り上げているような状態にあり、それは地質学的な水準にすら及んでいるといわれています。それを「人新世時代」と呼びます。この人新世時代において、人間とは何か、文化とは何か、貧困や気候変動にどう取り組むべきか、フィールドワークはどのような方法になっていくのか、異文化はいかに捉えられるのか、地球や人類のどのような在り方が求められるのか、といった課題について考えていきます。				
【授業方法】	対面授業で行います。基本、教員による講義中心の45-60分、受講生とのやりとり中心の30分見当で授業を構成します。毎回、授業の理解を深めるための小レポート（BRD）を提出していただきます。 1）各回のテーマについての映像講義45分、2）教員による映像講義への補足コメント、3）受講生間のグループ討論の3部構成を基本として反転授業形式で進めていく予定です。毎回、BRD（当日小レポート）の提出が求められます。学期末には、受講生によるグループ別研究発表と議論を行います。				
【授業展開】	1. ガイダンス：授業の概要と進め方 2. クロス討論“人新世”時代の人類と地球の未来~ 人類学からの問い（前編）惑星の限界と大加速 3. クロス討論“人新世”時代の人類と地球の未来~ 人類学からの問い（後編）地球各地の現場を比較する 4. クロス討論を踏まえたフリップトーク 5. グローバリゼーションをめぐる論争— グローバル化は人類にとって良いことなのか悪いことなのか？ 6. ディベート練習グローバリゼーション肯定論・否定論 7. 環境と開発をめぐる争いと和解— 経済開発から人間開発・持続可能な開発へ 8. ポストコンフリクト状況を生きる— グローバル化が招いた対立や紛争 9. 逆流するグローバリゼーション 10. 人新世時代のSDGsと貧困の文化— SDGsからフェアトレードまで 11. 人新世時代のものと人間の存在論— チンパンジーからＡＩまで 12. 協働実践としての人新世時代のエスノグラフィー— 映像人類学や学生の実践から考える 13. 受講生によるグループ別研究発表と議論 14. 受講生によるグループ別研究発表と議論 15. プレゼンテーションとディベートの技法				
【履修条件】	とくにありません。				
【評価方法】	BRD（当日小レポート）を資料とする各回授業への取り組み（40%）、学期末研究発表と議論（60%）等を総合的に判断して評価します。対面であれ、遠隔であれ、熱意を持って真摯に授業に取り組んだ学生を評価します。				
【テキスト】	資料は教員が電子媒体で配付します。テキスト購入を必須としませんが、以下の書籍があれば、理解は深まります。 大村敬一・湖中真哉（編）『「人新世」時代の文化人類学』（放送大学教育振興会、2020年.				
【参考書】	大村敬一・湖中真哉（編）『「人新世」時代の文化人類学』（放送大学教育振興会、2020年）。 https://ua-book.shop-pro.jp/?pid=159283913				
【備考】	授業形態 対面授業				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可 面談あり	【科目等履修生】	科目等履修生履修可 面談あり	【交換留学生】	交換留学生受入不可

【科目名】	災害人類学		Anthropology for Disasters		
【科目種別】	専門プログラム（国際開発）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜1限	【オフィス・アワー】	水曜2限
【科目責任者】	孫　暁剛＊				
【担当教員】	孫　暁剛＊				
【授業目標】					
●授業目的	近年、地球規模の気候変動にともなう異常気象や自然災害が世界各地に大きな被害をもたらしています。日本国内においても台風や集中豪雨や洪水の被害が増えています。また、地震や火山噴火の危険も懸念されています。災害の起因は自然現象であっても、その被害は人為的な要素も多く含まれています。災害に対する予防・対処・復興には、当該社会の社会的・文化的な特徴を理解し、社会や個々人がもつ対応能力をいかに発揮できるかが重要です。 この授業は、災害がもつ自然・文化・社会の複合的・多面的な特徴を解説し、担当教員のアフリカでの調査経験と、日本国内外の優れた災害人類学の研究成果のレビュー、そして災害をテーマとするミニ・フィールドワークを通して、受講学生の災害に対する理解と災害対策について考えを深めていきます。				
●到達目標	災害に対する人類学の視座を学び、災害がもつ自然・文化・社会の複合的・多面的な特徴を理解できること。 災害調査において、具体的なテーマ設定・目的・アプローチの仕方・質的調査のまとめ方を身につけること。 履修者がこのような視座と調査手法を学ぶことによって、災害に対する総合的な理解をもち、防災計画や災害対応、そして災害復興支援の実践に応用できることを期待します。				
【授業概要】	本講義は2部構成です。まず第1部では、「災害」に対する人類学の視座とアプローチを解説したうえで、アフリカを対象とした人類学的な調査・研究から、災害に対する地域社会のレジリアンス、災害と共に生きる社会のあり方、そしてグローバルな気候変動に伴う災害の増加に対する開発援助のあり方を解説します。そして第２部では、日本国内に焦点を当て、近年日本で起きた災害の特徴と災害対策を人類学の視点からレビューし、複合災害とその対応について考察していきます。				
【授業方法】	担当講師によるプレゼンテーション方式の授業を中心に、質疑応答を通して双方向の授業を行います。また、２回のミニ・フィールドワークを行い、その成果を発表し、相互ディスカッションと講評を行います。				
【授業展開】	第１回：授業ガイダンス 第２回：人類学と災害研究 第３回：災害に対する認識力と適応戦略 第４回：災害のリスクと不確実性 第５回：災害に対する脆弱性とレジリエンス 第６回：災害弱者とコミュニティ防災 第７回：災害と人道支援 第８回：防災に関するミニ・フィールドワーク 第９回：防災に関するミニ・フィールドワークの発表 第10回：日本の災害について考える（1） 第11回：日本の災害について考える（2） 第12回：被災体験に関するミニ・フィールドワーク 第13回：被災体験に関するミニ・フィールドワーク発表 第14回：日本の災害について考える（3） 第15回：災害人類学の実践：講義の総括と質疑応答				
【履修条件】	防災や災害対応、人類学のフィールドワークに興味をもつ学生				
【評価方法】	授業への取り組み（出席＋質疑応答＋課題）60% ミニ・フィールドワークと発表（計2回）　40%				
【テキスト】	授業後に授業内容の電子ファイルをユニパ（Universal Passprot）で配布する。				
【参考書】	孫暁剛　『遊牧と定住の人類学：ケニア・レンディーレ社会の持続と変容』　昭和堂　2012 伊谷純一郎　『大旱魃―トゥルカナ日記』　新潮選書　1982 トム・ギル（他）編　『東日本大震災の人類学：津波、原発事故と被災者たちの「その後」』　人文書院　2013				
【備考】	JICAの開発プロジェクトで専門家として携わった経験から、地域社会のニーズを理解し、それに対応する開発と援助のあり方について、実例を示して講義を進めていく。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可（授業は基本的に日本語で行いますが、英語・中国語による個別サポートができる）

【科目名】	異文化コミュニケーションB		Intercultural Communication B		
【科目種別】	専門プログラム（共生社会） 専門プログラム（グローバル・コミュニケーション）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜3限	【オフィス・アワー】	木曜1限
【科目責任者】	*高畑　幸				
【担当教員】	*高畑　幸				
【授業目標】					
●授業目的	異文化コミュニケーションの概念を、実際のコミュニケーション場面で応用して考察する。				
●到達目標	人間が育った文化的背景により形成されるコミュニケーション行動の特徴について理解を深め、異文化コミュニケーションが持つ意味を考察する。英語をはじめとする外国語が使われている国や地域の歴史、社会、文化についても理解を深める。				
【授業概要】	テーマ：異文化コミュニケーション 異文化コミュニケーションの基礎概念、自己アイデンティティ、文化、異文化障壁、言語・非言語コミュニケーション、カルチャーショック等に関する講義を行う。そして、受講生による事例研究報告をしてもらう。				
【授業方法】	講義と授業中のグループ討議、報告等を組みあわせて行う。				
【授業展開】	1. 現代社会における異文化コミュニケーション 2.メディア（1）メディアの多様化とその機能 3. メディア（2）SNSを考える 4. メディア（3）SNSとうまくつきあう 5. 伝える方法（1）メディアとしての方言 6. 伝える方法（2）ジェンダーとコミュニケーション 7. 事例研究（1）文化の輸出とコミュニケーション 8. 事例研究（2）観光とコミュニケーション1 9. 事例研究（3）観光とコミュニケーション2 10. 事例研究（4）日本で外国人と働く1 11. 事例研究（4）日本で外国人と働く2 12. 受講生による事例研究報告（1） 13. 受講生による事例研究報告（2） 14. 受講生による事例研究報告（3） 15. まとめ				
【履修条件】	特になし				
【評価方法】	授業への参加（発言、報告、グループ討議）50%、レポート50%。				
【テキスト】	石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人、2013、『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣選書。 ＊本書をもとに作成したレジュメを毎回配布します。レジュメだけでも授業は理解できますが、自分でさらに学びたい人は本書を購入してください。				
【参考書】	池田理知子編著、2010、『よくわかる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房。				
【備考】	・受講者数の制限を行う可能性があります。 ・外資系企業での勤務経験（3年）と法廷通訳経験（日本語・フィリピン語、29年間で約500件）を持つ教員が、言葉や文化が違う人びととのコミュニケーションの困難さとそれを克服する方法について具体例を用いて講義を行うことにより、受講生の理解度が高まるようにします。				
【社会人聴講生】	受入れ可能	【科目等履修生】	受入れ可能	【交換留学生】	受入れ不可

【科目名】	メディア文化論Ｂ		Studies in Media Culture B		
【科目種別】	専門プログラム（共生社会）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜4限	【オフィス・アワー】	水曜3限
【科目責任者】	*飯野勝己				
【担当教員】	*飯野勝己				
【授業目標】					
●授業目的	放送（テレビとラジオ）、広告、音楽・舞台・ゲーム等のエンターテイメントという身近なメディアの歴史や文化、産業としてのあり方について学ぶこと。また、それらのなかから自分が調べて考察したいテーマを選んで発表することにより、自身の関心を掘り下げ、より豊かで奥行きのあるメディア理解を得ること。				
●到達目標	放送、広告、音楽・エンターテイメントについてのメディア史・メディア文化論的な基礎知識を習得するとともに、発表を通してそれらについての自身の関心を掘り下げ、理論的・実践的なメディア理解を得ること。				
【授業概要】	前期から引き続き、「メディア・コミュニケーション論／文化論」として行う。前期では出版、新聞、映画の分野を取り上げたが、後期は放送、広告、音楽・エンターテイメントの３分野を取り上げ、その現状や歴史、文化としてのあり方について学んでいく。 　授業は前期と同様、通常の講義と受講者による発表を織り交ぜて進める。各メディアの現状や歴史について講義したあと、受講生がそれぞれ関心をもったテーマを選択して順次発表し、互いに質疑応答を行い、学びを深めていく。受講者数にもよるが、１回につき３、４名程度の発表担当を割り振り、半期で受講者全員が１回ずつ発表するスケジュールを組む。そして終盤には「メディア理論入門」の講義を行う。 　きわめて伝統的なメディアを取り上げた前期に対し、後期はより身近で現代的な領域がテーマとなる。自分の関心を自由に掘り下げる機会として、積極的に参加してほしい。				
【授業方法】	対面授業で行い、通常の講義と受講生による発表を織り交ぜて進める。毎回の授業資料（発表資料も含む）は事前にユニパで配信するので、必ず確認して授業に持参すること（プリントを推奨するが、PC等での持参も認める）。またユニパではレスポンスペーパーのフォーマットも配布するので、感想・質問がある人はメール添付で提出すること。				
【授業展開】	1. 後期ガイダンス （授業の進め方、発表の手順等） 2. 講義①：ラジオの歴史と現状 3. 講義②：テレビの歴史と現状 4. 発表①：テーマ「ラジオ」（例。以下同） 5. 発表②：テーマ「テレビ」 6. 発表③：テーマ「テレビＣＭ」 7. 発表④：テーマ「広告表現の多様性と変化」 8. 発表⑤：テーマ「ネット広告」 9. 講義③：音楽のメディア史 10. 発表⑥：テーマ「音楽メディアの変遷と現状」 11. 発表⑦：テーマ「音楽のネット配信」 12. 発表⑧：テーマ「ゲームのメディア論」 13. 講義④：メディア理論入門⑴――メディアの効果論 14. 講義⑤：メディア理論入門⑵――メディアの文化論 15. 試験 　※発表のテーマにより、変更することがあります。				
【履修条件】	前期のメディア文化論Aから連続して履修するのが望ましい。				
【評価方法】	授業（講義と発表）への取り組みと試験。				
【テキスト】	特に指定しない。				
【参考書】	バラン＆デイビス『マス・コミュニケーション理論』（上・下、新曜社） その他、必要に応じて授業内で紹介する。				
【備考】	担当教員のメディア企業勤務経験も活用して行う。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	比較文化入門 II		Introduction to Comparative Studies on Culture II		
【科目種別】	LC1 アカデミック・リテラシー（国際言語文化学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜3限	【オフィス・アワー】	曜日・時限： 木曜2限 場所：教員室 連絡方法：メール
【科目責任者】	米山　優子				
【担当教員】	米山　優子				
【授業目標】					
●授業目的	イギリスの言語状況の特徴を社会言語学的なアプローチから考察し、ヨーロッパの諸言語の状況と照らし合わせて理解することができる。その作業を通して基本的なアカデミック・スキルズを身につける。				
●到達目標	イギリスの地域言語の存在を社会における言語の役割と関連づけて考察することができる。地域言語の現状を伝える記事の内容を正確に読みとり、その要点を整理して発表することができる。発表した内容について履修者同士で話し合い、理解を深めることができる。				
【授業概要】	イギリスのケルト系言語の歴史と現状を概観し、地域の言語文化とその独自性との関連について把握する。ヨーロッパ諸国と国際機関の言語政策にも視野を広げ、言語を取り巻く環境の変化、優勢言語と少数派言語の並存状況、地域言語の維持・発展に向けた取り組みなどに着目する。イギリスのケルト系言語の事例を通して、言語とその話者のアイデンティティーについて考える。				
【授業方法】	講義でイギリスの地域言語の状況を概説した後、授業のテーマに即したニュース報道を題材にしてイギリスの言語状況を考察する。ニュースの背景や関連する情報を調べ、講義で扱う内容を現代社会で展開されている言語問題として捉え直す。教室でグループやペアになって課題（予習・復習）の内容を確認し、意見を交換しながら理解を深める。				
【授業展開】	1.　Introduction 2. ヨーロッパ諸国の言語政策 3. イギリスの言語状況 4. イギリスの地域言語(1) 5. イギリスの地域言語(2) 6. ニュース報道に見る言語問題の考察：コーンウォール語(1) 7. ニュース報道に見る言語問題の考察：コーンウォール語(2) 8. ニュース報道に見る言語問題の考察：マン島語(1) 9. ニュース報道に見る言語問題の考察：マン島語(2) 10. ニュース報道に見る言語問題の考察：ウェールズ語(1) 11. ニュース報道に見る言語問題の考察：ウェールズ語(2) 12. ニュース報道に見る言語問題の考察：スコットランド・ゲール語(1) 13. ニュース報道に見る言語問題の考察：スコットランド・ゲール語(2) 14. まとめ(1) 15. まとめ(2) 扱う内容や順番は変更する可能性がある。変更が生じた場合は、その都度授業で通知する。				
【履修条件】	イギリスとアイルランドの社会や歴史について基礎的な知識を身につけていることが望ましい。				
【評価方法】	内容に関する課題の提出と報告（25%）、それに基づくディスカッションへの積極的な参加及び発言の内容（25%）、試験またはレポート（50%）。 原則として、以下の場合は履修資格を失う。 ＊全授業回数の3分の1以上欠席または課題が未提出の場合。 ＊履修者間で同一の内容の答案を提出し、不正行為とみなされた場合。 ＊授業資料を転用した場合。 ＊剽窃を行った場合。				
【テキスト】	配布資料を使用する。				
【参考書】	授業で適宜指示する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	東南アジアの社会と文化		Southeast Asian Society and Culture		
【科目種別】	LC1アカデミック・リテラシー（国際言語文化学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	水曜日3限
【科目責任者】	*塩崎悠輝				
【担当教員】	*塩崎悠輝				
【授業目標】					
●授業目的	現代の世界で起きていることについて、その背景を理解できるようになる。 東南アジアの事例を題材に、ニュースやその分析を理解できるようになる。				
●到達目標	・現代の世界で起きていることには、歴史や文化、経済などの背景があることを理解する。 ・ニュースを読む際に、その背景を考察できるようになる。 ・レポートの書き方を身につける。				
【授業概要】	現代の東南アジアの事例を通して、現代の世界で起きていることには、歴史や文化、経済などの背景があることを理解する。事例には、東南アジアと関わりのある、日本や中国で起きていることも含まれる。 　具体的には、東南アジアで起きている問題のうち、食、経済のグローバル化と人の移動、紛争と平和構築、という3つのテーマについて理解を深めていく。				
【授業方法】	講義が中心であるが、毎回配布資料を用い、映像を視聴する機会を数多く設ける。課題提出を通して、授業内容への理解度を確認し、必要があれば適宜サポートする。 授業は基本的には対面で行うが、教員が特に必要と認める事情があった場合には、オンラインでの授業参加も可能とする。				
【授業展開】	第1回　イントロダクション、東南アジアとは何か？ 　　諸問題についての映像 第2回　複合的に起きている問題その1：マレーシアとタイ 　　食の確保、食の変化、 第3回　複合的に起きている問題その2：フィリピンとシンガポール 　　労働者の移動、グローバル化 第4回　複合的に起きている問題その3：日本、韓国、中国 　　日系企業、一帯一路、グローバル化 第5回　複合的に起きている問題その4：ミャンマーとカンボジア 　　紛争と平和構築 第6回　ドキュメンタリー映画の回 第7回　日本の食と東南アジアその1 第8回　日本の食と東南アジアその2 第9回　東南アジアの食に見る日本 第10回　歴史と経済で見る中国と東南アジア 第11回　日本政府と東南アジアの平和構築 第12回　東南アジアのイスラーム：歴史と統治 第13回　東南アジアのイスラーム：戦争と平和 第14回　ゲスト講義回 第15回　東南アジアの現代文化				
【履修条件】	東南アジアをはじめとして、世界で起きている様々なことについて考えていきたいと思っていること。				
【評価方法】	この授業の内容にかかわる問題について、考えて、根拠を挙げながら自分の主張を示す機会を4回設けます。 主張を示す方法は、口頭か、文章か、討論か、状況にあわせて決めます。 　その際に扱う問題は、環境問題、紛争、労働力の移動などの問題解決にかかわるものです。 各4回について評価を行い、それぞれ成績の10%、20%、30%、40%となります。				
【テキスト】	毎回の授業でレジュメを配布する。				
【参考書】	今井昭夫編（2014）『東南アジアを知るための50章』明石書店 澤田 晃宏（2020）『ルポ 技能実習生』筑摩書房				
【備考】	外務省、在マレーシア日本国大使館での勤務経験を有する教員が、東南アジアの社会と文化を対象とした学問について講義する。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	グローバルコミュニケーション入門		Introduction to Global Communication		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	1	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜1限	【オフィス・アワー】	各担当教員の項目を参照
【科目責任者】	長野明子				
【担当教員】	長野明子　須田孝司　　田村敏広　ジョナサン・ディハーン　　ポール・リダン　　澤﨑宏一　竹部歩美　　酒井彩				
【授業目標】					
●授業目的	グローバル化がキーワードになっている現代日本社会において、英語と日本語は極めて重要なコミュニケーション手段であり、言語学において豊富な研究蓄積がある。本ブリッジ科目では、日英語を主たる対象言語とする言語研究やコミュニケーション研究の学知をわかりやすく導入し、専門教育への橋渡しを行う。				
●到達目標	（1）日英語の構造と歴史と話者文化、日英語の習得と教育について基礎的な知識を身に付ける。 （2）言語現象の観察・記述・分析をつうじて、課題の発見と考察ができるようになる。				
【授業概要】	グローバル・コミュニケーションプログラムの担当教員が、言語学、英語学、日本語学、第二言語習得研究、応用言語学、日本語教育分野のトピックについてオムニバス方式で講義を行なう。日本語母語話者教員の講義は日本語で、英語母語話者教員の講義は英語で実施する。				
【授業方法】	対面の講義形式で実施する。「展開」欄に示される順序で８名の教員がオムニバス方式で講義を行う。初回授業では全体説明を行う。講義資料は各教員が作成し、配布する。教員ごとに課題を出すかテストを実施する。質問がある場合は科目責任者か、その講義の担当者に連絡すること。酒井担当回では受講者数によるが、グループワークを行う予定である。				
【授業展開】	各回の内容と担当者は次の通りである。 1 オリエンテーション（授業実施方法についての説明と科目内容についての説明）（長野） 2 人間の言語知識（須田） 3 言語獲得（須田） 4 構文からみた日英比較1 (田村) 5 構文からみた日英比較2 (田村) 6 Literacy, Language, and Learning: Analysis (deHaan) 7 Literacy, Language, and Learning: Participation (deHaan) 8 Multimodality and Social Meaning-Making (Lyddon) 9 Social Identities and Intercultural Communication (Lyddon) 10 世界のことばと日本語1（澤﨑） 11 世界のことばと日本語2（澤﨑） 12 日本語の歴史（竹部） 13 現代日本語の敬語（竹部） 14 日本語学習者と日本語教育 (酒井) 15 まとめ　グローバルコミュニケーション研究の課題と今後の展開（長野）				
【履修条件】	第１回のオリエンテーションに参加し、本科目の目的と実施方法について理解すること。				
【評価方法】	8名の担当教員ごとに理解達成度を測るための課題またはテストを課すので、その点数を合計して評価する。欠席回数に応じて減点する。				
【テキスト】	購入の必要なテキストはない。授業資料は各教員が作成し、紙または電子の形式で配布する。				
【参考書】	斎藤純男、田口善久、西村義樹 (編)『明解言語学辞典』(三省堂、東京)				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	英語音声学 I		English Phonetics I		
【科目種別】	ブリッジ科目		【配当年次】	1	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜2限	【オフィス・アワー】	授業前またはメール対応＊メールアドレスは学生室に照会のこと
【科目責任者】	新妻明子				
【担当教員】	新妻明子				
【授業目標】					
●授業目的	英語の母音と子音における調音の原理・メカニズムについて理解を深め、言語の音声・音韻的な側面についての獲得に役立てる（この目的は国際言語文化学科のディプロマ・ポリシーの３と４に対応する）。				
●到達目標	英語の音声の仕組みについて理解する。 （１）英語の母音と子音についての基礎的知識（発音記号を含む）を身につけ、発音を実践する。 （２）英語のプロソディーについての基礎的知識を身につける。 （３）英語の多様性に関する考え方や知識を身につける。				
【授業概要】	英語音声学の基礎について、指定のテキスト（以下参照）を用いて授業を進める。				
【授業方法】	テキストの内容に従って講義形式で進める。講義は日本語で行う。ただし、授業では、テキストの発音トレーニングも各自や全体で実施する。また、毎回、小テストまたは授業の振り返りコメント記入を行う。				
【授業展開】	１．オリエンテーション、Lesson 1 World Englishes ２．Lesson 2 Speech Organs, Lesson 3 Speech Sounds, Lesson 7 [p]-[b] ３. Lesson 8 [t]-[d], Lesson 9 [k]-[g] ４．Lesson 10 [f]-[v], Lesson 11 [θ]- [ð] ５．Lesson 12 [s]-[z], Lesson 13 [ʃ]-[ʒ] ６. Lesson 14 [tʃ]-[dʒ], Lesson 15 [m]-[n]-[ŋ] ７．Lesson 16 [r]-[l], Lesson 17 [h] ８．Lesson 18 [j]-[w]-[hw], 子音のまとめ ９．Lesson 19 [iː]-[i], Lesson 20 [uː]-[u] 10. Lesson 21 [e]-[æ]-[ei], Lesson 22 [ou]-[ɔː] 11. Lesson 23 [ɑː]-[ɑ]-[ʌ], 母音のまとめ 12. Lesson 24 [ai]-[au]-[ɔi], 二重母音のまとめ 13. Lesson 25 [əːr]- [aəːr]-[ɔəːr], Lesson 26 [iəːr]-[eəːr]-[uəːr] 14. Lesson 4 Word Stress, Lesson 5 Sentence Rhythm 15. Lesson 6 Intonation, まとめ 16. 定期テスト				
【履修条件】	特になし				
【評価方法】	授業内活動（小テスト20%, コメントシート30%）、定期テスト 50%				
【テキスト】	『アメリカ英語の発音教本　四訂版』 津田塾大学英語英文学科、研究社				
【参考書】	授業内で紹介する				
【備考】	本科目ではMicrosoft Teamsを用いて音声課題を行う				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	言語学概論Ⅱ		Introduction to Linguistics Ⅱ		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	１・２年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜1限	【オフィス・アワー】	非常勤のため、授業の前後に対応します。
【科目責任者】	小町将之				
【担当教員】	小町将之				
【授業目標】					
●授業目的	言語の多様な側面のうち、特に語より大きなまとまり（句や文、談話のレベル）について、その仕組みや法則性を明示的に理解し、理論的に分析できるようになる。				
●到達目標	1.言語を構成する諸要因の探求を通じて、身近な知的世界に興味をもつことができる。 2.語や句の形式的な仕組みに意識を向けて、言語表現を意識的に構築することができる。 3.談話やコミュニケーションの仕組みに自覚的になり、言語表現をより効果的に使用することができる。				
【授業概要】	言葉は身近な存在であるが、通常は意識的に接することは少ない。言語学の諸分野に触れることによって、言葉のさまざまな側面に潜む法則性に意識を向けることになじみながら、言語学の基本知識に触れていく。講義形式を中心としながらも、適宜課題に取り組んでもらうことを通じて、主体的に学習してもらうように努めます。				
【授業方法】	テキストに沿って講義形式で進めるが、必要に応じて、言語データを集めたり、分析したりする課題に取り組んでもらいます。毎回課題に取り組みながら、理解を深めてもらいます。				
【授業展開】	1.言語学とは何か 2.生成文法(1)：統語論とは何か 3.生成文法(2)：移動 4.生成文法(3)：繰り上げ構文とコントロール構文 5.機能文法(1)：使役構文など 6.機能文法(2)：否定極性表現など 7.機能文法(3)：情報構造など 8.機能文法(4)：相互動詞など 9.語用論(1)：話し手の意味 10.語用論(2)：発話解釈 11.語用論(3)：心の理論 12.心理言語学(1)：文処理 13.心理言語学(2)：言語の獲得 14.実験言語学(1)：プライミング効果 15.実験言語学(2)：役割語				
【履修条件】	前期に「言語学概論Ⅰ」（この科目と使用する教科書が同じ）を履修していることが望ましいです。				
【評価方法】	授業ごとの小レポート（60%）と学期末レポート（40%）で評価します。合計で4回欠席した場合は不可とします。				
【テキスト】	窪薗晴夫（編著）『よくわかる言語学』ミネルヴァ書房.				
【参考書】	必要に応じて紹介します。				
【備考】	入門的な科目ではありますが、当該分野の「研究者」であることを疑似的に体験してもらいながら理解を進めてもらいます。主体的な問題意識を更新しながら参加してください。				
【社会人聴講生】	応相談	【科目等履修生】	応相談	【交換留学生】	応相談

【科目名】	中国現代史Ｂ		Modern History of China B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	１・２	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜3限	【オフィス・アワー】	木曜4限
【科目責任者】	大野絢也				
【担当教員】	大野絢也				
【授業目標】					
●授業目的	20世紀中葉以降の東アジアと中国の歴史について多角的な視点から学ぶ。				
●到達目標	①中国現代史について理解するための基礎的な知識を習得すること。 ②現代中国の成立と展開過程を理解した上で、いかなる構造的な特質を持っているのか、理解すること。 ③中国を中心とした東アジアにおける諸問題の背景や歴史認識の差異について、理解すること。				
【授業概要】	20世紀の世界は、2つの世界大戦や冷戦に代表されるように激動の時代であった。第二次世界大戦後の中国は、そのような国際情勢や国内の政治局面の変化とともに、常に大きく揺れ動いてきたと言える。そのことを踏まえ本授業では、世界全体に大きな影響力を持つ「グローバル大国」となった現代中国が、どのような歴史的系譜の下で成立し現在に至っているのか、多角的な視点から見ていく。特に「中国現代史B」では、国際情勢や戦争が中国に与えた影響（外交・軍事史）や国家建設のための経済政策の過程（経済史）に着目する。「現代中国論A」の導入という位置付けでもあるため、続けての受講を勧める。				
【授業方法】	基本的に対面形式で講義を進める。その他、各学期の導入（初回）と総括（最終回）において、グループワークを実施する。グループワークでは、導入において中国現代史に関するキーワードを抽出し、総括では自らの考えについて意見を表明し、グループ毎で討論を行う。				
【授業展開】	第１回　初回ガイダンス・導入（グループワーク：キーワードの抽出） 第２回　近現代中国の政治・外交・経済・社会史 第３回　2つの世界大戦と中国（１）：第一次世界大戦と五四運動 第４回　2つの世界大戦と中国（２）：軍閥割拠・第一次国共合作 第５回　2つの世界大戦と中国（３）：北伐・第一次国共内戦 第６回　2つの世界大戦と中国（４）：満洲事変から西安事件まで 第７回　2つの世界大戦と中国（５）：日中戦争から第二次世界大戦へ 第８回　人民共和国の成立（１）：東アジアの戦後構想における中国 第９回　人民共和国の成立（２）：日本敗戦と第二次国共内戦 第１０回　人民共和国の成立（３）：新民主主義論と土地改革 第１１回　人民共和国の成立（４）：社会主義計画経済 第１２回　中国の経済建設（１）：内陸開発論の系譜 第１３回　中国の経済建設（２）：改革開放と経済成長 第１４回　中国の経済建設（３）：大規模インフラ整備の展開 第１５回　総括（グループワーク：討論）				
【履修条件】	東アジアや中国の現代史に関心があり、積極的に授業に参加する意欲があること。				
【評価方法】	期末試験（40%）、グループワーク（40%）、出席状況（20%。欠席3回で原則不可）、などに基づき、総合的に評価する。詳細な説明は初回ガイダンスで行う。				
【テキスト】	特に指定しない。資料を随時配布する予定。				
【参考書】	次の参考文献は、授業内容に関連する主要なものとして刊行年順に挙げる。1.小島朋之『中国現代史：建国50年、検証と展望（中公新書）』中央公論新社、1999年。2.菊池一隆『中国抗日軍事史：1937-1945』有志舎、2009年。3.吉澤誠一郎ほか『シリーズ中国近現代史①～⑥（岩波新書）』岩波書店、2010～17年。4.田中仁ほか編『新図説中国近現代史：日中新時代の見取図』法律文化社、2020年。5.久保亨『20世紀中国経済史論』汲古書院、2020年。その他、初回ガイダンス時に参考文献リストを配布する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	ロシア現代史Ｂ		Modern History of Russia B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜5限	【オフィス・アワー】	-月曜2限からお昼休み
【科目責任者】	広岡直子				
【担当教員】	広岡直子				
【授業目標】					
●授業目的	ロシア地域の知識を深めながら、現代と過去がどのように関連しているのか、考察しつつ自分の考えを説得的にまとめることができるようにする。 本講義で学んだ新しい歴史・社会の見方を他地域の考察に応用できるようにする。				
●到達目標	講義の冒頭においては、現代ロシア社会における人権、多様性、平等についてジェンダーを中心に考察する。 その後は時間軸に従いながら、スターリン体制とその後のフルシチョフ・ブレジネフ・ゴルバチョフの時代を振り返って、ソ連時代に何がどう動いたのか、あるいは動かなかったのかを検証する。 次に現代ロシア社会の切実な問題について、エリツィンとプーチンの時代を簡単に整理し、これまで学んだ歴史的文化的視点から見たロシア社会の何がどこに関連しているのか、新しい視座で学際的に検討し、受講者自身が考えるポイントをつかめるようにしたい。				
【授業概要】	ロシア社会の様々な問題について焦点を当てながら、基礎的な知識の習得と考察のトレーニングを加える。 まず、ジェンダー、家族、女性についてロシア社会の過去と現在を見ることから、人権と平等、多様性について考察する。 次に、スターリン体制の最大の「罪」の一つである大粛清と、「大祖国戦争」として最終的には勝利した、現代の愛国主義の礎石となっている第二次世界大戦の考察を行う。 さらにスターリン後のソ連共産党書記長の歴代について簡単に整理し、ソ連邦崩壊を史的に考察する。 その後は、現代ロシア社会へと直接的につながる脱社会主義のプロセスへと焦点が移る。 それはロシア社会だけではなく、「西側」社会にとっても、都合の悪い事実を含んだものである。				
【授業方法】	資料やパワーポイントなどを使用して、講義をすすめる。 講義では受講者にリアクションペーパーを提出してもらう予定である。 学期末に課題の中から各自自分の決めたテーマに沿ってレポートを提出してもらう予定であるが、期末試験の場合もある。また、ひとりひとりがロシア社会に放り込まれた人間として、考えていく講義にしてゆきたい。 なお、講義回の順番については変更もありうる。				
【授業展開】	１．　ロシアにおけるジェンダーの過去と現在からーーSOGIと家族強化政策 ２．３．大粛清の構造とその結果――何にスターリンはおびえたのか ４．５　「大祖国戦争」と現代ロシアの愛国主義 ６．「雪どけ」フルシチョフの時代から東西冷戦へー米ソ対決と世界 ７．　中間まとめ ８．「停滞の時代」からペレストロイカへ ９．　ソ連邦崩壊 １０．　エリツィンとオリガルヒの出現 １１．１２．　プーチンの時代とロシア市民 １３．現代ロシアの諸問題と世界ーー『世界不平等報告』、地域格差、都市と農村の格差 １４．健康と愛国主義ーー医療とスポーツ １５．まとめ				
【履修条件】	特にないが、前期の「ロシア現代史A」を受講していることが望ましい。				
【評価方法】	平常点5割、期末レポート（あるいは試験）５割で総合的に判断する。				
【テキスト】	特になし。				
【参考書】	講義のなかで、参考文献を指示する。				
【備考】	対面授業と遠隔授業の併用形式 感染状況などを考慮しながら適宜判断する。 ジェンダー、女性史、家族論、医療、現代政治、国際経済事情、スポーツ				
【社会人聴講生】	受け入れる。	【科目等履修生】	受け入れる。	【交換留学生】	受け入れる

【科目名】	ヨーロッパ史Ⅲ		European History Ⅲ		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	1・2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	なし
【科目責任者】	尾崎修治				
【担当教員】	尾崎修治				
【授業目標】					
●授業目的	現代のドイツ、ヨーロッパについての知識を豊かにすることで、今の日本の政治や社会のあり方を相対化するための視座を得ること。				
●到達目標	ドイツを中心に過去100年間のヨーロッパの歴史を学ぶことにより、現代ヨーロッパの政治・社会・文化のありかたへの理解を深める。				
【授業概要】	20世紀のヨーロッパの歴史について、良くも悪くもその「主役」となったドイツの動向を軸に学びます。まず、第二次世界大戦とホロコーストに焦点をあて、その歴史の「破局」が生まれてしまった背景について考えます。その上で、大戦後のドイツがそうした過去、経験の上に、どのような歴史を歩むことになったのかを考えます。				
【授業方法】	各トピックについて、レジュメと板書、資料プリントによる講義をおこないます。時折、質問や感想などをリアクション・ペーパーに書いてもらいます。				
【授業展開】	今学期の授業の概要―20世紀のドイツとヨーロッパ ドイツ・ヴァイマル共和国の危機 戦間期の欧米 ヒトラーの権力獲得 ナチ体制下のドイツ国民 第二次世界大戦の勃発 ナチ・ドイツのヨーロッパ征服 独ソ戦とホロコースト ナチ体制の終焉 ドイツの占領と戦後処理 冷戦とドイツの東西分裂 西ドイツの戦後復興 ベルリンの壁と東ドイツ社会 ナチズムの過去の克服 社会主義体制の崩壊とドイツ再統一				
【履修条件】	とくにありません。				
【評価方法】	評価は、学期末の論述試験にもとづいておこないます。試験では授業内容の理解度を重視します。3分の2以上の出席が単位取得の前提で、欠席が多い場合には減点になります。				
【テキスト】	ありません。				
【参考書】	毎回の授業資料のなかで、適宜紹介します。				
【備考】	キーワード：歴史、ヨーロッパ、ドイツ、ナチズム、ホロコースト、現代、20世紀、世界大戦、東西冷戦				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可（聴講条件なし）	【科目等履修生】	科目等履修生聴講　可 特に条件なし	【交換留学生】	

【科目名】	ヨーロッパ思想Ｂ		European Thought B		
【科目種別】	ブリッジ科目（国際言語文化学科）		【配当年次】	1-2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜3限	【オフィス・アワー】	-
【科目責任者】	有賀 雄大				
【担当教員】	有賀 雄大				
【授業目標】					
●授業目的	・古代ギリシア由来の哲学がキリスト教と合流しヨーロッパ思想の根幹を形成してゆく中世の哲学史を概観することによって、それらの延長線上で形作られた現在のヨーロッパ思想を理解するための基本的教養を身につける。				
●到達目標	・中世哲学の主要な諸概念を説明できるようになる。 ・中世の哲学者たちが取り組んだ問題を具体的に理解し、現代の日常的な事例に置き換えて考えることができるようになる。				
【授業概要】	西洋の中世哲学史を概説する。 「哲学」という営みは古代ギリシアで生まれ、とくにアテナイで活躍した哲学者ソクラテスとその弟子プラトンによって形を与えられ、さらにアリストテレスによって多岐にわたる諸学問へと展開された。彼らの思想はヘレニズム文化、ローマ文化にも継承され、さらに多様化しながら、キリスト教的色合いの強い中世の哲学に繋がってゆく。本講義では、中世の哲学を概観し、特に重要な諸々の概念や問題を理解することで、ギリシャ由来の思想とキリスト教とが合流することでヨーロッパ思想の根幹が形成される過程を見通すことを目指す。 中世の哲学史は一枚岩ではないものの、その最大の特徴の一つがキリスト教と哲学の結合という点にあることは間違いない。三位一体をはじめとする神学に固有の主題が頻繁に論じられるだけでなく、存在や認識のあり方そのものがキリスト教的世界観に則って解釈される。このキリスト教という要素は、宗教意識が希薄、かつヨーロッパ文化圏に属さない日本人から見れば、奇異なものとして映りかねない。そこで本講義ではまず（時代区分としては古代に属するものの）中世哲学の源流といえるアウグスティヌスを重点的に取り扱い、彼にとってキリスト教と哲学が幸福へ至るための同じ一つの道であったことを解説する。続いて、そうした具体的な動機から出発して、彼が提起した様々な哲学問題を概観する。それにより、その後中世の主要な哲学者たちが論じた諸問題の出発点を押さえることができるだろう。				
【授業方法】	講義形式で行う。レジュメ・資料を毎回配布する。				
【授業展開】	1. 授業のイントロダクション 2. アウグスティヌス（1）悪について 3. アウグスティヌス（2）意志の自律的決定 4. アウグスティヌス（3）真理と学び 5. アウグスティヌス（4）原罪と救済 6. アンセルムス（1）知解を求める信仰 7. アンセルムス（2）真理と正しさ 8. 13世紀の思想状況とトマスアクイナス 9. トマス・アクイナス（1）情念論（愛と憎しみを中心に） 10. トマス・アクイナス（2）存在と悪 11.トマス・アクイナス（3）罪の由来 12. トマス・アクイナス（4）幸福論 13. トマス・アクイナス（5）信仰・希望・愛徳 14. 補足：中世における言語の問題 15. 全体のまとめ				
【履修条件】	特になし。				
【評価方法】	学期末レポート（80%）、授業への参加度（20%）によって評価する。また、一定の出席がないと単位は与えられない。				
【テキスト】	適宜資料を配布する。				
【参考書】	授業中に適宜紹介する。				
【備考】	特になし。				
【社会人聴講生】	履修可	【科目等履修生】	履修可	【交換留学生】	履修可

【科目名】	コミュニケーション論B		Communication Studies B		
【科目種別】	専門プログラム（グローバル・コミュニケーション）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜2限	【オフィス・アワー】	水曜3限
【科目責任者】	飯野勝己				
【担当教員】	飯野勝己				
【授業目標】					
●授業目的	日常言語の場面に軸足を置くコミュニケーション論的言語哲学や、敬語、デマ・うわさ、言語暴力、フィクションなど現実社会におけるさまざまな現象や問題を説明する理論に触れ、理解することを通じて、自分自身の言語観・コミュニケーション観を形成すること。				
●到達目標	日常言語におけるコミュニケーション現象を説明するさまざまな学説や理論の概要を理解し、そこから人間的コミュニケーションの多様なあり方を把握する。				
【授業概要】	前記の「コミュニケーション論A」ではもっぱら原理的なテーマを取り上げて紹介・解説するが、この「B」ではより具体的で身近な、日常のなかでのコミュニケーション現象を取り上げ、それらの解明を試みる理論の紹介・解説を行っていく。 日常の中の「行為＝言語行為」としてのコミュニケーションはどんな構造をしているのか。言語的意味の外部で伝えられる「含み」はどんなメカニズムで生成されるのか。敬語と“タメ口”がそれぞれに持つ役割とは。デマやうわさはなぜ情報技術が進歩してもなくならず、かえっていっそう広く拡散するのか。なぜ言葉の暴力は実効的な力を発揮してしまうのか……。このような、日常や社会におけるコミュニケーションでみられる多様な現象に対して、さまざまな研究分野で多様な理論が提唱され、説明する試みが行われてきた。コミュニケーション論的な言語哲学での知見をはじめとするさまざまな理論や思想を紹介・解説しつつ、人間的コミュニケーションの多様性・重層性を描き出す。				
【授業方法】	対面授業で行う。毎回の授業資料は事前にユニパで配布するので、必ず確認して授業に持参すること（プリントを推奨するが、PC等での持参も認める）。またユニパではレスポンスペーパーのフォーマットも配布するので、感想・質問がある人はメール添付で提出すること。				
【授業展開】	1. コミュニケーションの哲学①――オースティンの言語行為論：行為としての言葉 2. コミュニケーションの哲学②――オースティンの言語行為論：言語行為の三層構造 3. コミュニケーションの哲学③――グライスの「意味」の理論：コミュニケーションとアニミズム 4. コミュニケーションの哲学④―― グライスの「含み」の理論 5. 敬語とポライトネス①――日本語の敬語システム 6. 敬語とポライトネス②――ポライトネス理論入門 7. デマ・うわさのコミュニケーション①――デマ・うわさはなぜ強力なのか 8. デマ・うわさのコミュニケーション②――「デマ・うわさリテラシー」のために 9. コミュニケーションと「信頼」 ――説得・騙しと人間心理 10. コミュニケーションの哲学⑤――デイヴィドソンの「根源的解釈」 11. 悪口と言葉の暴力について①――悪口の文化史／文化誌 12. 悪口と言葉の暴力について②――言葉の暴力の言語哲学 13. 物語／フィクションとコミュニケーション①――「物語」がこの世界を作る？ 14. 物語／フィクションとコミュニケーション②――フィクションの言語哲学 15. 試験				
【履修条件】	言語とコミュニケーションについて理論的関心を持っていること。				
【評価方法】	授業への取り組みと期末試験。				
【テキスト】	特に指定しない。				
【参考書】	オースティン／飯野勝己訳『言語と行為――いかにして言葉でものごとを行うか』講談社学術文庫 飯野勝己ほか編著『暴力をめぐる哲学』晃洋書房				
【備考】	前記の「コミュニケーション論Ａ」から連続して取得することが望ましい。				
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	英語リテラシースキル		English Literacy Skills		
【科目種別】	専門プログラム（グローバル・コミュニケーション）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜3限	【オフィス・アワー】	火曜2限 or by appointment
【科目責任者】	deHaan, Jonathan				
【担当教員】	deHaan, Jonathan				
【授業目標】					
●授業目的	The purpose of this class is for students to (1) develop English language and literacy skills, (2) apply these skills to other subjects and skills (3) understand more about important global communication concepts.				
●到達目標	Students will improve their English language skills. By the end of the course, they will be able to: 1. Listen to various topics in various genres in English, and be able to understand information and ideas, for specific purposes, 2. Read about various topics in various genres in English, and be able to understand information and ideas, for specific purposes, 3. Speak about various topics and in various genres in English, and be able to communicate effectively according to purpose and circumstance and function, 4. Write about various topics and in various genres in English, and be able to communicate effectively according to purpose and circumstance and function, 5. Integrate multiple skills and topic areas in purposeful and effective ways, and discuss/present opinions. Students will improve their ability to connect and apply their English skills to other literacies (such as media literacy, data literacy, and civic literacy) and to other skills (such as collaboration, critical thinking, creativity, and problem solving) Students will also improve their understanding of global communication concepts such as: community, culture, development, diversity, economics, equity, globalization, ideologies, innovation, justice, meaning making, multimodality, politics, power, private and public spheres, society, systems, technology				
【授業概要】	Students will learn practical knowledge and effective skills for understanding and communicating in English in various private, public and professional contexts.				
【授業方法】	The class is a combination of - Learning tasks (practicing language and literacy) and - Research tasks (keeping data about your language and literacy development). Learning tasks include: Doing research, Writing reports, Presenting work, Giving and receiving and acting on feedback, Preparing for playing games (studying language), Playing games and taking notes and data, Discussing games, Discussing and analyzing society and culture, Analyzing language and literacy texts, Participating in short workshops, Discussing and analyzing concepts, terms, language and technology, Brainstorming, planning and doing research projects and participatory projects, Sharing projects on social media or with other communities Research tasks include: Reflecting on your skills and knowledge, Keeping weekly diaries about your literacy work (experiences, understanding and applications) and your learning work (from methods, materials and mediation), Taking language and literacy tests, Evaluating your unit work, Improving and analyzing your gameplay language, Reflecting again on your skills and knowledge, Analyzing and reporting your skill and knowledge development in the course Tasks take the form of: 1. Exercises and proper application of English language skills: listening, reading, speaking, writing (and integrations of all of these), with particular emphasis on vocabulary, grammar, pragmatics, genre, form, meaning and use 2. Discussions, presentations, roleplays, information gathering, data analysis, media creation, reports 3. Media participation with formats such as games and simulations, websites, YouTube, Twitter, Internet forums, print media				
【授業展開】	1. Introduction and needs analysis 2. Media experiences (language) 3. Media experiences (audience) 4. Media experiences (technology) 5. Media experiences (representation) 6. Media theories and analyses (names) 7. Media theories and analyses (concepts) 8. Media research (reading) 9. Media research (experiment) 10. Midterm exam: presentation and report 11. Media participation (proposal) 12. Media participation (planning) 13. Media participation (conducting) 14. Media participation (reporting) 15. Reflecting and debriefing 16. Final exam: presentation and report				

【履修条件】	Students who intend to enter Professor deHaan's graduation thesis seminar are strongly encouraged to take this course. Basic English speaking, listening, reading, and writing skills; interest in various media and technologies; and a desire to use English as much as possible in class.				
【評価方法】	Learning Tasks 5% - Role work learning activities 10% - Unit 1 learning activities 5% - Pre-unit 2 language learning activities 10% - Unit 2 learning activities 5% - Unit 3 learning activities 5% - Unit 4 learning activities 10% - Unit 5 learning activities Research Tasks 5% - Pre-course research activities 10% - Language and literacy tests 10% - Weekly diaries 5% - Post unit research activities 5% - Post course research activities 15% - Post course research analysis and report activities				
【テキスト】	Materials (learning tasks and research task workbooks and worksheets) will be distributed in class.				
【参考書】	Materials will be distributed in class. Internet and library research will also be required.				
【備考】	This class will be taught primarily in English. Except in cases of absolute emergency, students should plan to attend every lesson.				
【社会人聴講生】	Auditing students are welcome.	【科目等履修生】	Non-degree students are welcome.	【交換留学生】	Exchange students are welcome.

【科目名】	英米の社会と文化ＩＢ		British and American Society and Culture IB		
【科目種別】	専門プログラム（比較文化） 専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	2-4年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜4限	【オフィス・アワー】	曜日・時限： 木曜2限 場所：教員室 連絡方法：メール
【科目責任者】	米山　優子				
【担当教員】	米山　優子				
【授業目標】					
●授業目的	社会言語学の主要な研究領域を概説した入門書を読み、言語と社会／個人の関係を多角的に理解するための基礎的な知識を身につける。				
●到達目標	社会言語学の主要な研究領域について把握し、言語が社会の中で果たす役割を理解することができる。言語と社会／個人の様々な関係について、専門用語を用いて説明できる。テキストで紹介される事例をイギリスの言語状況と関連づけて考察することができる。				
【授業概要】	社会言語学の主要な研究領域を概観し、各領域の代表的な文献の抜粋を通して、どのようなテーマが扱われるのか学ぶ。話者の社会階層や出身地域が話しことばとどのように関連しているのか、複数の言語を用いる話者はどのような場面で言語を使い分けているのか、言語が別の言語に影響を及ぼしたり、逆に影響を受けたりするのはどのような要因によるのかなど、言語と社会／個人の関係を具体的な事例から考察する。				
【授業方法】	各自がテキストの内容を確認する課題（予習・復習）に取り組み、講義で内容の解説を受けて理解を深める。授業で扱うテーマについて、関連する情報を調べ、グループやペアで意見を交換しながら共有する。テキストで紹介される言語状況をイギリスの事例と関連づけ、具体的に捉える。				
【授業展開】	1. Introduction: Language and Ethnic Group 1 2. Language and Ethnic Group 2 3. Language and Sex 1 4. Language and Sex 2 5. Language and Sex 3 6. Language and Context 1 7. Language and Context 2 8. Language and Context 3 9. Language and Social Interaction 1 10. Language and Social Interaction 2 11. Language and Nation 1 12. Language and Nation 2 13. Language and Nation 3 14. Language and Nation 4 15. まとめ 扱う内容や順番は変更する可能性がある。変更が生じた場合は、その都度授業で通知する。				
【履修条件】	「英米の社会と文化IA」「比較文化入門II」を履修していることが望ましい。				
【評価方法】	内容に関する課題の提出と報告（25%）、それに基づくディスカッションへの積極的な参加及び発言の内容（25%）、試験またはレポート（50%）。 原則として、以下の場合は履修資格を失う。 ＊全授業回数の3分の1以上欠席または課題が未提出の場合。 ＊履修者間で同一の内容の答案を提出し、不正行為とみなされた場合。 ＊授業資料を転用した場合。 ＊剽窃を行った場合。				
【テキスト】	Peter Trudgill, Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society, Fourth Edition(Penguin Books, 2001).				
【参考書】	授業で適宜指示する。				
【備考】					
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可	【交換留学生】	可

【科目名】	文化政策Ｂ		Cultural Policy B		
【科目種別】	専門プログラム（比較文化） 専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	授業後の1時間を基本としますが、事前にメールでご連絡いただければ時間調整可能です。 tanjiharu@yahoo.co.jp
【科目責任者】	丹治陽				
【担当教員】	丹治陽				
【授業目標】					
●授業目的	現代社会における文化・芸術の役割を考える。				
●到達目標	様々な芸術活動に触れ、文化政策の現場を知ることで、社会について考える力を身につける。また、対話をとおして、他者理解・コミュニケーションへの感受性を養う。				
【授業概要】	前期にひき続き、「現代社会における文化・芸術の役割は何か？」を考えていきます。 文化政策というのは聞きなれない言葉かもしれません。「文化」はとらえどころがないし、「政策」はなんだか自分からは遠いものだなぁと思われる方が多いかもしれませんね。ですが、文化政策を「文化について何かを選択すること」ととらえると、少し身近に思えてきませんか。服を着たり、食事をしたり、音楽を聴いたり、本を読んだり、絵を描いたり、映画館に行ったり・・・。私たちは日々、なんらかのかたちで、いわゆる文化活動を選択しています。これを〈わたし〉の視点としましょう。 一方で、国や自治体における文化政策というものもあります。法律や条例をつくったり、美術館や劇場といった文化施設を運営したり。ここでのキーワードは公共性です。これを〈みんな〉の視点としましょう。 この授業では、〈わたし〉と〈みんな〉のあいだを行ったり来たりしながら、現代社会における文化・芸術の役割について考えてみたいと思います。 他者とともに生きることで文化をつむぎ繁栄してきたように見える人間ですが、現実世界を見れば、紛争、差別、孤立、貧困などなど様々な分断を抱えているのもまた事実です。文化の結晶のひとつである芸術には、分断を縫合する力があるのでしょうか？あるとしたら、どのようにしてその力を発揮できるのでしょうか？ この授業では、劇場や美術館などの文化施設や団体、行政などの取り組みを解説しながら、舞台芸術、アート、映画、ドキュメンタリー、小説、評論、マンガ、新聞などに触れてもいきます。（前期は主に演劇を、後期は演劇に限らず様々なジャンルに触れていく予定です。） 講師は普段はSPAC-静岡県舞台芸術センターで制作者として働いています。大学の授業は演劇と似ていて、相互作用がカギだと考えています。学生の皆さんとのコミュニケーションを大事にしながら進めていきますので、お互いの違いを楽しみながら一緒に考えていきましょう。				
【授業方法】	講義、観劇、映画鑑賞、読書会、ディスカッション等をまじえて進めていきます。				
【授業展開】	1. イントロダクション 2. 他者との出会い～排他的にならないためには？～ 3. 観光客と共事者～もうひとつの他者論～ 4. "バラ"がもたらすもの 5. 映画『ハーブ＆ドロシー』から考える① 6. 映画『ハーブ＆ドロシー』から考える② 7. 美術館訪問① 8. 美術館訪問② 9. アートと共創① 10. アートと共創② 11. アートとケア① 12. アートとケア② 13. 朗読会① 14. 朗読会② 15. ふりかえり				
【履修条件】	積極的に授業に参加すること。文化政策Ａ（前期）と文化政策Ｂ（後期）は連続するので、継続参加が望ましいです。				
【評価方法】	授業への取り組み度合いと課題によって評価します。課題は、作文し授業内で朗読するスタイルです。				
【テキスト】	特に事前には指定しません。				
【参考書】	授業のなかで、さまざまな書籍を紹介していきます。				
【備考】	観劇や美術鑑賞等のための交通費・入場料など（なるべく少額に抑えますが）は各自でご負担ください。				
【社会人聴講生】	受入可	【科目等履修生】	受入可	【交換留学生】	受入可

【科目名】	オリエント文化社会論Ｂ		Studies in Oriental Culture and Society B		
【科目種別】	専門プログラム（比較文化）		【配当年次】	2~4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	集中講義	【オフィス・アワー】	-
【科目責任者】	青木健				
【担当教員】	青木健				
【授業目標】					
●授業目的	地球時代にあって、人類の文明発祥の地である古代オリエントの歴史と文化を学ぶことは、受講生の視野を格段に広めると考えられる。また、グローバル化時代にあって、従来の日本の世界史教育からは抜け落ちていた西アジアの文明を学ぶことで、東アジアとヨーロッパに留まらない国際感覚を涵養したい。				
●到達目標	アジアとヨーロッパとの間にあるオリエントの文化を、西洋文明の翻訳的な視点から離れて、東洋・日本の立場を重視しつつ、広角的に追究する。				
【授業概要】	前期に引き続き、オリエント.地中海地域、さらには日本の歴史・文化について知識を深め、それぞれの文化を今までとは違った新鮮な視点から眺められるような知力・思考力をさらに深める。たとえば、本年は、ペルシア文化の東方波及の一例として、日本文化の一つの原点である奈良の文化遺産や当時の世界の文化交流を伝える「正倉院の宝物」、さらには昔の中央アジアの文化遺産が「東大寺二月堂のお水取り」として残されていることなどについても解説したいと考えている。				
【授業方法】	講義主体。				
【授業展開】	1. 概説 2.　グレコ・バクトリア王国とガンダーラ美術 3. 遊牧民パルティア 4. オリエントのヘレニズム文化 5. アフガニスタンにおける大乗仏教の成立 6.　アルサケス朝パルティアの成立 7. キリスト教の成立 8.　サーサーン朝ペルシア帝国 9.　グノーシス主義 10. マニ教 11. ゾロアスター教の国教化 12. シルク・ロードの歴史と文化1 13. シルク・ロードの歴史と文化2 14. 世界遺産カッパドキアと初期キリスト教文化 15. 期末テスト				
【履修条件】	オリエント文化論Ａに同じ				
【評価方法】	オリエント文化論Ａに同じ				
【テキスト】	オリエント文化論Ａに同じ				
【参考書】	オリエント文化論Ａに同じ				
【備考】	講義は、時にコンテンポラリーな内容に触れることがある。また進捗状況により様々な展開がありうるので、必ずしもシラバスを重視しない。むしろ、受講生の知識や理解力をより深くすることに重点を置いているので、臨機応変に対応する。				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可	【科目等履修生】	科目等履修生履修可	【交換留学生】	

【科目名】	スペイン比較文学論		Spanish Comparative Literature		
【科目種別】	専門プログラム（ヨーロッパ研究） 専門プログラム（比較文化）		【配当年次】	2・3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	火曜2限	【オフィス・アワー】	水曜3限（アポイントメントをとること）
【科目責任者】	森　直香				
【担当教員】	森　直香				
【授業目標】					
●授業目的	比較文学の分析手法を学ぶことで、客観的な分析力を身につけます。また、社会人に必要な論理的に意見を述べる能力や、プレゼンテーション、ディスカッションの技術を身につけます。 比較文学を通してスペイン文学について学び、ヨーロッパ文化への理解を深めます。				
●到達目標	客観的な分析力を身につけ、その分析をプレゼンテーション、ディスカッションにおいて論理的に表現できるようになる。 スペイン文学を通じてヨーロッパ文化と現代の社会問題への理解を深める。				
【授業概要】	しばしば「文学は時代を映す鏡である」と言われます。もちろん、起こった出来事をそのままが刻まれるわけではありません。作家たちは社会の雰囲気と変化に敏感で、それらを歴史書とは異なった形で自らのオリジナリティを交えて作品の中に残すのです。文学作品を読むことは過去を理解すること、そして私たちが現在をどう生きるかというヒントを得ることにつながります。 　比較文学とは、19世紀にフランスで始まり、20世紀以降盛んになった文学研究の一分野です。その名前通り比較を通してテクストの本質に迫ることを目的としますが、その手法は他のテクストからの影響を検討するというものにとどまらず、ある主題が各国文学でどのように表れるか考察する、世界文学の視野からあるテクストの特異性や普遍性を論じるなどその方法は多様です。授業では、この比較文学の手法を使って、マイノリティや文化の越境のテーマを探っていきます。				
【授業方法】	輪読と教員による解説を通して、文学理論について学ぶ。その後、これを踏まえたうえで、プレゼンテーション、ディスカッションにおいて実際に作品を分析する。				
【授業展開】	1. イントロダクション 2. 文学受容とアダプテーションその１：ロルカ『血の婚礼』 3. 文学受容とアダプテーションその2：ロルカ『血の婚礼』 4. 文学受容とアダプテーションその3：ロルカ『血の婚礼』 5. 文学受容とアダプテーションその4：ロルカ『血の婚礼』 7. 文学受容と翻訳：ロルカ『ジプシー詩集』 8. キャラクターと文化の越境その1：ドン・フアン／ドン・ジュアン伝説 9. キャラクターと文化の越境その2：ドン・フアン／ドン・ジュアン伝説 10. キャラクターと文化の越境その3：ドン・フアン／ドン・ジュアン伝説 11. キャラクターと文化の越境その4：ドン・フアン／ドン・ジュアン伝説 12. 文学とマイノリティその1：作者不詳『エル・シードの歌』と異教徒、セルバンテス『ドン・キホーテ』と異教徒 13. 文学とマイノリティその2：作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメス』と社会的弱者としてのピカロ（悪者） 14. 口頭発表 15. 口頭発表 ＊順番については受講生の興味あわせて組みかえる場合がある。				
【履修条件】	輪読、プレゼンテーションなどの課題を教員の指示に従ってこなすことができること。多くの文献に当たることを厭わないこと。				
【評価方法】	授業態度（ディスカッションへの積極的な参加等）とミニレポート・口頭発表。				
【テキスト】	佐竹謙一『スペイン文学案内』岩波文庫。				
【参考書】	授業中に指示する。				
【備考】	対面授業のみ。 授業中の携帯電話の使用は固く禁じる（使用した場合は退室してもらう）。大学生にふさわしい態度で受講すること。				
【社会人聴講生】	可。	【科目等履修生】	可。	【交換留学生】	可。ただし講義は日本語で行われるので十分な日本語能力があること。

【科目名】	比較日本文化論Ｂ		Comparative Studies on Japanese Culture B		
【科目種別】	専門プログラム（日本研究）		【配当年次】	２年～４年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜4限	【オフィス・アワー】	水曜日５限
【科目責任者】	木澤　景				
【担当教員】	木澤　景				
【授業目標】					
●授業目的	グローバルな時代における広い他者理解と深い自己理解を獲得するために、他地域の文化との比較をとおして日本文化の諸側面について学び、多様な他者と共存していくための、たしかなアイデンティティを見いだすことを目指す。				
●到達目標	・日本文化についての広範な知識を習得する。 ・日本文化がいかなる特殊性を持つかを知るとともに、人類普遍の側面についても注意深く考察する。 ・古文、漢文も含めた古典のテキストに親しむ。 ・単なる知識として文化を学ぶのではなく、みずからの思考を強く規定するものとして、絶えず自己内対話をしながら文化考察を進める。				
【授業概要】	東西交流の結晶としての仏像　―　和辻哲朗『古寺巡礼』を読む 　各地の寺院にそれぞれある“御本尊”、すなわち仏像は、単なる彫刻作品ではなく、また単なる宗教的信仰設備でもありません。たとえば奈良の有名な仏像群のうち飛鳥白鳳期に制作されたものは、ギリシャ、ペルシャ、インド、中央アジア・中国といったユーラシア大陸の東西の文化の影響を端々に留めた、まさに東西文化交流の結晶ともいうべき作品たちです。この視点から書かれてベストセラーとなったのが、和辻哲郎の比較文化研究の古典、『古寺巡礼』です。本講座では和辻の『古寺巡礼』を読みながら、各種の仏像にさまざまな地域の文化がどのようにその影響を留めているのか、そしてそうした影響を受けつつ、かつて日本で仏像を作成した仏師たちの制作の狙いがどの点にあったのか、などについて確認し、そうした視点を持ってその他のさまざまな文化事象に接することのできる地盤の確保を目指します。				
【授業方法】	対面講義形式を基本とします。動画教材の視聴等を自主学習課題として出す場合がありますので、ストリーミング視聴ができるようなネット環境は整えておいてください（大学のPCでも視聴可。）毎回のリアクションペーパーや自由討議の場での積極的な参加や発言を求めます。				
【授業展開】	※参加者の興味関心に基づいて講義展開をそのつど決定していく。以下は一例。 第一回　ガイダンス（受講する上での連絡事項等の告知）／『古寺巡礼』について 第二回　和辻哲郎について　和辻の日本文化研究 第三回　文化における純粋と交雑　―　アジャンター壁画 第四回　素人藝の凄み　―　クチャ・ホータン出土品 第五回　新薬師寺の改訂　―　新薬師寺薬師如来像・十二神将像／香薬師像の受難 第六回　桃源郷としての仏教受容の土壌　―　浄瑠璃寺・九体阿弥陀像 第七回　観音菩薩信仰（１）　―　東大寺法華堂不空羂索観音像／聖林寺十一面観音像 第八回　観音菩薩信仰（２）　―　観音菩薩とは？／観音信仰と観音像の建立 第九回　観音菩薩信仰（３）　―　「天」を「人」に／法隆寺百済観音像 第十回　日本人にとっての観音理解　―　法華寺十一面観音／光明皇后について 第十一回　天平仏の荘厳さ　―　唐招提寺千手観音像・薬師寺薬師如来像・薬師寺聖観音像 第十二回　デカダンス（頽落）とは何か　―　当麻寺当麻曼荼羅／本覚論・密教と中将姫伝説 第十三回　法隆寺への道行　―　大和三山・三輪山・東大寺の夜 第十四回　東洋芸術の頂き　―　法隆寺金堂阿弥陀三尊壁画 第十五回　日本文化と仏像　―　中宮寺菩薩像／『古寺巡礼』まとめ				
【履修条件】	講義は日本語で行います。日本思想の知識などをあらかじめ知っておく必要はありません。ただし参加者の感想や疑問が講義の方向を決めていくので、積極的な参加を求めます。そのためにも講義の予習復習に時間をかけて積極的に取り組む意欲のある方を歓迎します（毎週３時間程度）。なお、各回の講座が連動して進みますので、休むと話がわからなくなる可能性があります。やむをえない場合を除いて出席するようにしてください。				
【評価方法】	期末レポート　６０％＋参加態度（各回の所感・疑問アンケート）　４０％。欠席回数が１／３以上の場合、期末レポートを受理しません。レポートの評価基準についてはプリントを配布して詳説します。				
【テキスト】	和辻哲郎著『古寺巡礼』岩波文庫　1979年 その他の資料はプリントで配付します。				
【参考書】	和辻哲郎著『初版　古寺巡礼』ちくま学芸文庫　2012年　※「テキスト」で挙げたものとは中身が異なるので注意すること。				
【備考】	第二回講義までに岩波文庫版『古寺巡礼』を入手しておいてください。カリヨン書店で教科書として販売されています。				
【社会人聴講生】	応相談。事前に面接を課すので、開講前に木澤（kizawa@u-shizuoka-ken.ac.jp)までメールしてください。学生の履修者が多い場合は無条件にお断りする場合もあります。	【科目等履修生】	履修可。	【交換留学生】	履修可。

【科目名】	比較日本倫理思想Ｂ		Comparative Studies on Japanese Ethical Philosophy B		
【科目種別】	専門プログラム（日本研究）		【配当年次】	2〜4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜4限	【オフィス・アワー】	授業後
【科目責任者】	大胡 高輝				
【担当教員】	大胡 高輝				
【授業目標】					
●授業目的	日本の倫理思想の内実を、海外の思想との比較を通じてより深く捉えることを目指します。				
●到達目標	・古典テキストを、そこにどのような人間像・世界像があらわれているのかという点に注目しながら読解できるようになる。 ・儒教思想の基礎的な概念や枠組みを知る。 ・中国・西洋の思想史を参照することで、日本の儒教思想の内実をより深く捉えることができるようになる。				
【授業概要】	【テーマ】外来思想としての日本の儒教思想 【内容】本授業では、日本に生きる人々の感性・思考に古代以来大きな影響を与え続けてきた儒教思想の内実を、関連するさまざまな古典テキストを実際に読みながら検討してゆきます。その際、より深い理解を得るために、日本の儒教思想の展開と密接に関わる中国・西洋の思想史も参照します。				
【授業方法】	本授業は対面形式で実施いたします。毎回配布する講義資料をもとに、適宜板書で内容を補足しつつ講義を進めます。 また、毎回授業後にユニバーサルパスポート経由で、リアクションペーパーの提出を受け付けます（自由提出・加点あり）。リアクションペーパーの内容に応じて適宜授業中に返答したり、授業展開を調整したりします。				
【授業展開】	1 ガイダンス――科目名と儒教について、その他事務連絡等 2 儒教の基礎①――仁と孝 3 仏教の基礎②――礼・徳・学 4 孟子――四端と王道 5 朱子学①――理と気 6 朱子学②――性即理と窮理・居敬 7 陽明学――心即理と知行合一 8 中江藤樹①――権 9 中江藤樹②――孝と皇上帝 10 山鹿素行①――士道 11 山鹿素行②――情 12 伊藤仁斎①――活物 13 伊藤仁斎②――忠恕 14 荻生徂徠――礼楽 15 近代への影響――人倫のゆくえ ※以上は目安ですので、リアクションペーパーの内容に応じて適宜展開を変更することがあります。				
【履修条件】	特にありません。授業でとりあげる儒教思想や古典テキストに関する知識・用語については授業中に適宜説明いたしますので、予備知識も必要ありません。				
【評価方法】	期末レポート（100%）＋リアクションペーパーの自由提出による加点。詳細は初回にご案内いたします。				
【テキスト】	毎回配布する講義資料をテキストとして使用いたします。				
【参考書】	授業中に適宜ご紹介します。				
【備考】	本授業は対面授業のみの形式で行います。				
【社会人聴講生】	応相談。事前に面談（Zoom）を実施し聴講の可否を判断いたしますので、聴講希望者の方は開講1週間前までにkokiogo1992@gmail.comまでご連絡ください。	【科目等履修生】	履修可。	【交換留学生】	履修可。

【科目名】	日本倫理思想研究Ｂ		Studies in Japanese Ethical Philosophy B		
【科目種別】	専門プログラム（日本研究）		【配当年次】	３年・４年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜2限	【オフィス・アワー】	水曜５限
【科目責任者】	木澤　景				
【担当教員】	木澤　景				
【授業目標】					
●授業目的	かつて日本に生きた人々がいかなる自己意識・他者意識・世界観のもとでそれぞれの生を営んでいったかを考え、日本の倫理思想を知り、人間存在の根底に働く理法としての「倫理」についての思索を深める。				
●到達目標	・日本の倫理思想に関する深い知識を習得する。 ・日本の特殊な倫理思想が、全世界、全時代の普遍的な「倫理」とどのように連絡するかを学ぶ。 ・対象の倫理思想を学ぶことを契機に、自分たちの生活や思考のありようを自覚的に把捉する。 ・古文や漢文書き下し文などの古典テキストに親しむ。				
【授業概要】	日本の儒学者の『論語』解釈 　東洋における倫理思想史上の最重要文献の一つである『論語』などの儒教文献を江戸時代の日本の儒学者はどのように理解したのでしょうか。『論語』の有名な一節を対象にして、朱熹、林羅山、中江藤樹、伊藤仁斎、荻生徂徠らの解釈をならべ、日本の儒学者がどのようなことに納得し、どのようなことに問いを持ち、考えを深めていったのかを掘り起こします。				
【授業方法】	演習形式で進めます。毎回担当者（複数になることもある）を決め、担当範囲を整理したり要約したりしてもらいます。担当者以外の方は翌週月曜までに範囲の感想や疑問を提出してもらいます。火曜に感想・疑問を一覧表にしたものを担当者にお送りし、木曜当日には各疑問等についてコメントしてもらいます。そののち全体で討議します。				
【授業展開】	※参加者の興味関心に基づいて講義展開をそのつど決定していく。以下は一例。 第一回　ガイダンス（受講する上での連絡事項等の告知）。 第二回　儒教とは何か①　聖人～孔子（堯曰1） 第三回　儒教とは何か②　孔子門下～朱熹・王陽明 第四回　『論語』「孝悌なる者は其れ仁の本たるか」（学而2）①朱熹、羅山 第五回　『論語』「孝悌なる者は其れ仁の本たるか」（学而2）②仁斎、徂徠 第六回　『論語』「克伐怨欲、行なわれざる、以て仁と為すべし」（憲問1、2）①朱熹、羅山 第七回　『論語』「克伐怨欲、行なわれざる、以て仁と為すべし」（憲問1、2）②仁斎、徂徠 第八回　『論語』「己を克めて礼に復るを仁と為す」（顔淵1）①朱熹、羅山 第九回　『論語』「己を克めて礼に復るを仁と為す」（顔淵1）②仁斎、徂徠 第十回　中間まとめ 第十一回　『論語』「吾が党に直躬なる者有り。」（陽貨23）①朱熹、羅山 第十二回　『論語』「吾が党に直躬なる者有り。」（陽貨23）②仁斎、徂徠 第十三回　『論語』「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」（雍也21）①朱熹、羅山 第十四回　『論語』「知者は水を樂しみ、仁者は山を楽しむ」（雍也21）②仁斎、徂徠 第十五回　期末まとめ				
【履修条件】	発表・議論は日本語で行います。儒教理論などをあらかじめ知っておく必要はありません。ただし、さまざまな前提知識を必要とするテキストを読んでいくので予習復習に時間をかけて積極的に取り組む意欲のある方を歓迎します（毎週３時間程度）。なお、各回の講座はそれまでの内容を前提として進みますので、休むと話がわからなくなる可能性があります。やむをえない場合を除いて出席するようにしてください。				
【評価方法】	発表と議論への参加の積極性、貢献度により採点します。欠席回数が１／３以上の場合、授業内容が十分理解されているとは考えられないので、単位を認定しません。履修者が多く発表担当を全員に割り振れない場合などにはレポートを課すこともあります。詳しくは講義内で相談して決めていきます。				
【テキスト】	原典資料はプリントで配付します。				
【参考書】	講義の際に適宜、紹介します。				
【備考】					
【社会人聴講生】	応相談。事前に面接を課すので、開講前に木澤（kizawa@u-shizuoka-ken.ac.jp)までメールしてください。学生の履修者が多い場合は無条件にお断りする場合もあります。	【科目等履修生】	履修可。	【交換留学生】	履修可。

【科目名】	中国リーディングスB		Readings on China B		
【科目種別】	専門プログラム（アジア）		【配当年次】	3	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜2限	【オフィス・アワー】	火曜2限
【科目責任者】	奈倉京子				
【担当教員】	奈倉京子				
【授業目標】					
●授業目的	本講義は、グローバル化を背景に東アジア地域でも国際移住が盛んになる中、人々の移住が家族とジェンダーに与えた影響を考察する。とりわけ、①結婚を目的とした女性の国際移動、②中国の国内・海外の出稼ぎ移民、に着目し、中国、台湾、韓国、日本でそれらの移民集団が家族・ジェンダー規範にもたらした影響を検討することを目的とする。				
●到達目標	グローバル化が東アジアにおける国・地域の家族やジェンダーに与えた影響を説明できるようになる。				
【授業概要】	以下５つのテーマを設定し、関連文献を精読する。 ＜テーマ＞ １．中国人の国内移住：「農民工」夫婦のジェンダー規範 ２．中国系移民の家族とジェンダー （1）華僑・華人　（2）結婚移民 ３．韓国における移民と家族 （1）中国朝鮮族女性移民　（2）移民・難民 ４．台湾における移民と家族 ５．アジアにおける移民と多文化家族の形成 また、卒業研究に取り組むにあたり、先行研究を精査することは重要な作業である。本講義で学術論文の読み方も学ぶ。				
【授業方法】	・毎回担当者が論文を読んでレジュメを作成し、概要と論点を報告する。報告者は、併せて議論したいことを提示し、それについて受講者全員で議論する。 ・報告者でない学生は、議論したい内容を授業前日までに提出する。				
【授業展開】	1　イントロダクション：講義の目的、全体の流れについて説明。分担。 2 「中国人の国内移住：「農民工」夫婦のジェンダー規範」 杜平「第2章　家族の紐帯と権力ゲーム―中国南方における向都離村夫婦のジェンダー秩序の再構築」 3 「中国系移民の家族とジェンダー（1）華僑・華人」 奈倉京子「第7章　中国人の海外移住にともなう家族・ジェンダー観の変容―移住する男性の妻・嫁から自ら移住する妻・母への着目」 4 「中国系移民の家族とジェンダー（1）華僑・華人」 奈倉京子2008「僑郷特有の家族のあり方と個人の価値観―台山市斗山鎮D村における陳家の事例から―」 5 「中国系移民の家族とジェンダー（2）結婚移民」 賽漢卓娜「第8章　日本における高学歴結婚移民女性の仕事と家事・育児―専業主婦、パートタイム労働、フルタイム労働の中国人女性の場合」 6 「中国系移民の家族とジェンダー（2）結婚移民」 郝洪芳「第9章　国際結婚移住と親密性の変容―中国東北地域のグローバル家族の事例から」 7 「韓国における移民と家族（1）中国朝鮮族女性移民」 全信子2021「第6章　ジェンダーから見た朝鮮族女性における国際結婚の研究」 8 「韓国における移民と家族（1）中国朝鮮族女性移民」 春木育美「第2章　韓国系外国人（朝鮮族）」 9 「韓国における移民と家族（2）移民・難民」 李惠景「第12章　韓国の移民政策における多文化家族の役割」 10 「韓国における移民と家族（2）移民・難民」 春木育美「第3章　華僑と留学生そして難民」 11「台湾の移民と家族」 横田祥子2021「家族の行方―台湾の国際結婚」 12「台湾の移民と家族」 陳怡禎2023「異郷における社会関係性の再構築 ―日本在留台湾人女性趣味共同体を事例に」 13「アジアにおける移民と多文化家族の形成」 酒井千絵2013「上海の多文化家族―中国人配偶者と上海で暮らす日本人女性を中心に」 14「アジアにおける移民と多文化家族の形成」 野沢慎司・金成垣・米澤旦　2021「韓国・台湾・シンガポールにおける女性移民と家族形成―日本への示唆を求めて」 15　まとめ				
【履修条件】	特になし				
【評価方法】	・平常点(participation in class)100% （報告、ディスカッション、出席＊4回以上欠席で不可） ・文献内容をよく把握できたか、問題意識をもって授業に臨んでいるか、「深い学習」をしているか。				
【テキスト】	・杜平「第2章　家族の紐帯と権力ゲーム―中国南方における向都離村夫婦のジェンダー秩序の再構築」坂部晶子編2021『中国の家族とジェンダー』（明石書店）、pp.55-76. ・奈倉京子「第7章　中国人の海外移住にともなう家族・ジェンダー観の変容―移住する男性の妻・嫁から自ら移住する妻・母への着目」坂部晶子編2021『中国の家族とジェンダー』（明石書店）、pp.184-204. ・奈倉京子2008「僑郷特有の家族のあり方と個人の価値観―台山市斗山鎮D村における陳家の事例から―」『中国研究月報』62(9)：20-33.				

	・賽漢卓娜「第8章　日本における高学歴結婚移民女性の仕事と家事・育児―専業主婦、パートタイム労働、フルタイム労働の中国人女性の場合」坂部晶子編2021『中国の家族とジェンダー』（明石書店）、pp.205-231. ・郝洪芳「第9章　国際結婚移住と親密性の変容―中国東北地域のグローバル家族の事例から」坂部晶子編2021『中国の家族とジェンダー』（明石書店）、pp.232-231-248. ・全信子2021「第6章　ジェンダーから見た朝鮮族女性における国際結婚の研究」坂部晶子編2021『中国の家族とジェンダー』（明石書店）、pp.164-182. ・春木育美「第2章　韓国系外国人（朝鮮族）」春木育美・吉田美智子編2022『移民大国化する韓国―労働・家族・ジェンダーの視点から』（明石書店）、pp.83-106. ・李惠景「第12章　韓国の移民政策における多文化家族の役割」落合恵美子・赤枝香奈子編2012『アジア女性と親密性の労働』（京都大学学術出版会）、pp.305-326. ・春木育美「第3章　華僑と留学生そして難民」春木育美・吉田美智子編2022『移民大国化する韓国―労働・家族・ジェンダーの視点から』（明石書店）、pp.117-144. ・横田祥子2021「家族の行方―台湾の国際結婚」『中国21』54：237-252. ・陳怡禎2023「異郷における社会関係性の再構築 ―日本在留台湾人女性趣味共同体を事例に」『国際関係学部研究年報』 43：65-76. ・酒井千絵2013「上海の多文化家族―中国人配偶者と上海で暮らす日本人女性を中心に」『社会学部紀要』45(1)：47–72. ・野沢慎司・金成垣・米澤旦　2021「韓国・台湾・シンガポールにおける女性移民と家族形成―日本への示唆を求めて」『研究所年報』51：251-272.
【参考書】	授業中に紹介する
【備考】	

【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	不可	【交換留学生】	不可

【科目名】	東南アジアリーディングスＢ		Readings on Southeast Asia B		
【科目種別】	専門プログラム（アジア研究）		【配当年次】	3〜4年	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	木曜3限	【オフィス・アワー】	火曜２限
【科目責任者】	吉田航太				
【担当教員】	吉田航太				
【授業目標】					
●授業目的	東南アジアに関する英語のニュース記事や学術レポートを読み解き、受講生間でのディスカッションを通じて、東南アジアの現代的な様相について理解を深める。				
●到達目標	東南アジアに関する諸問題についてニュースを要約し、ディスカッションの中で自分の考えを表明する能力を養う。				
【授業概要】	東南アジアは日本のメディアで取り上げられることの少ない地域であるが、急速な経済発展や政治的変動、環境問題、多様な社会・文化など、興味深いトピックが数多く存在し、日本にとっても重要な地域である。本授業では、東南アジアを扱った英語のニュース記事や研究機関のレポートを読み、講師・受講生の間での議論を通じて、東南アジアの「いま」を共に探っていく。 後期では、講師の別講義である「現代東南アジア論B」と合わせて、主に社会や文化を中心にしたトピックの記事を読んでいくが、受講生の関心に沿って柔軟にトピックは変えていく予定である。				
【授業方法】	受講生は英語のニュース記事や研究機関のレポートをプレゼン資料にまとめて発表し、それをもとに受講生間でディスカッションをおこなう。受講生は1学期に2〜3回は発表を割り当てる予定である。毎回の授業への出席はもちろん、指定された記事を事前に読み込んでおくこと。授業で用いる文献は主にFulcrum、New Mandala、Kyoto Review of Southeast Asiaなどを想定している。 具体的な進め方や担当は、受講生の人数や関心をもとに初回の授業で決める予定なので、なるべく初回の授業に参加してください。				
【授業展開】	１．イントロダクション ２．発表者の担当決め （以下はテーマの目安だが発表者に合わせて変更の予定） ３．東南アジアの社会と文化① ４．東南アジアの社会と文化② ５．東南アジアの社会と文化③ ６．東南アジアの社会と文化④ ７．東南アジアの家族とジェンダー① ８．東南アジアの家族とジェンダー② ９．東南アジアの家族とジェンダー③ １０．東南アジアの家族とジェンダー④ １１．東南アジア地域の現代的課題① １２．東南アジア地域の現代的課題② １３．東南アジア地域の現代的課題③ １４．東南アジア地域の現代的課題④ １５．まとめ				
【履修条件】	特にないが、一方的な講義ではなく講師と受講生が共に理解を深めていく演習スタイルのため、受講生には積極的に授業に参加する意欲を求める。				
【評価方法】	担当回の発表内容および授業でのディスカッションへの参加から評価する。				
【テキスト】	授業時にテキストは指示する。				
【参考書】					
【備考】					
【社会人聴講生】	聴講可（要、事前相談）	【科目等履修生】	科目等履修生「聴講可」（「東南アジア」関係の講義を履修済み、または履修中の者に限る）	【交換留学生】	留学生の参加を歓迎します（授業は基本日本語です）。

【科目名】	キリスト教史B		History of Christianity B		
【科目種別】	専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜3限	【オフィス・アワー】	−
【科目責任者】	尾崎修治				
【担当教員】	尾崎修治				
【授業目標】					
●授業目的	キリスト教の歴史を、とくに政治や社会との関わりについて学ぶことで、現在の世界で宗教が果たしている役割について考えること。				
●到達目標	「伝統宗教」と言われるカトリシズムが、近現代ヨーロッパの政治・社会においていかなる役割を果たしてきたのかを歴史的に理解すること。授業内容を理解したうえで、興味をもった問題については自分で文献を調べ、問題関心を発展させていくこと。				
【授業概要】	16〜20世紀のヨーロッパのキリスト教と教会の歴史を、とくにその国家と社会における役割・影響力に注目しながら学びます。なかでも近代化と「世俗化」が進む19世紀のヨーロッパ社会におけるカトリック教会、カトリシズムの役割については、ドイツやフランスの事例をもとに、より掘り下げて考えます。				
【授業方法】	各トピックについて、レジュメと板書、資料プリントによる講義をおこないます。隔週で質問や感想などをリアクション・ペーパーに書いてもらいます。				
【授業展開】	導入—近代ヨーロッパのなかのカトリシズム 宗派の対立と宥和 啓蒙の世紀のキリスト教 フランス革命と教会 非キリスト教化運動 近代国家と「宗教の自由」 教育をめぐる世俗と宗教 政教分離の多様なかたち ルルドの「聖母出現」と傷病者巡礼 工業化時代の民衆信仰 赤い司祭とカトリック労働運動 世紀末の民族崇拝と反ユダヤ主義 ナチズムと教会 世界大戦の戦場と従軍司祭				
【履修条件】	後期の授業は、前期の知識がある程度前提となるので、通年で履修することが望ましいです。				
【評価方法】	評価は、学期末の論述試験にもとづいておこないます。試験では授業内容の理解度を重視します。3分の2以上の出席が単位取得の前提で、欠席が多い場合には減点になります。				
【テキスト】	ありません。				
【参考書】	毎回の授業資料のなかで、適宜紹介します。				
【備考】	キーワード：ヨーロッパ、ドイツ、歴史、キリスト教、教会				
【社会人聴講生】	社会人聴講生聴講可	【科目等履修生】	科目等履修生履修可	【交換留学生】	

【科目名】	スペイン・テクスト研究Ｂ		Text Studies: Spanish B		
【科目種別】	専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	月曜2限	【オフィス・アワー】	木曜3限（アポイントメントをとること）
【科目責任者】	森　直香				
【担当教員】	＊森　直香				
【授業目標】					
●授業目的	外国語を使いこなすには、ボキャブラリーと文法知識のインプット、そしてその言語が話される文化に関する知識の習得が必要です。この授業では講読を通して、文法知識をもとに文の構造を理解するこつや上手な辞書の使い方など長文読解に必要なスキルを身につけながら、ボキャブラリーと例文をインプットしていきます。同時にスペインの文化についても学び、さらに日本文化との比較も行います。				
●到達目標	スピーキング、ライティング、リスニングの基礎作りとして、1・2年生で学んだ文法知識を用いて、また、辞書を使いこなしながら、ある程度の長さの文章を読みこなせるようになることが目標です。講読を通して文法事項の定着とボキャブラリーのインプットを目指します。また、特にスペイン人の行動様式や考え方の特色に注目しながら、スペインの文化への理解を深めます。				
【授業概要】	語学学習ではリスニングや会話が「実用的なもの」と考えられて重視されがちですが、これらを習得する近道はどんどん外国語で文章を読んでいくことです。このような学習法は一見遠回りに見えますが、外国語で新聞が読めない人がラジオやテレビのニュースを聞き取ることができないことを想像してみれば容易に理解できると思います。 一方で語学習得に必要なのは、語学そのものの知識だけではありません。言語にはその言葉を使う国の文化や思想が反映されていますし、共通の文化基盤を持たないと理解できない内容が表現されることも少なくありません。 授業では短編集2030を読み、スペインの文化について学びます。テクストは以下から無料でダウンロードできます。 https://www.zendalibros.com/2030-nuevo-libro-de-relatos-de-zenda/ 文章をたくさん読めば読むほど動詞の活用が身につき、辞書をたくさん引けば引くほど語彙力がつきます。戦前のスペイン語学習者には渡西も容易でない状況でスペイン語のテクストを読み漁り、スペイン人よりも美しいスペイン語を話すと絶賛された者も少なくありません。なお、予習は必ず行って下さい。				
【授業方法】	最初は学生に訳をしてもらい、それを教員が添削する形をとります。慣れてきたら、添削も学生同士で行い、それに教員がコメントを加える形にします。さらに、文章の内容理解に必要な文化に関する事柄について解説を行います。適宜日本文化との比較をしてもらいます。				
【授業展開】	1. イントロダクション 2~14. Cero a la izquierda 15. まとめ				
【履修条件】	1・2年生で必ずスペイン語を履修していること。あるいはスペイン語検定4級以上のスペイン語能力を有すること。予習は必須です。				
【評価方法】	平常点（授業中の発言、小テストなど）＋期末試験(持ち込み可)。4回以上欠席した人には試験受験資格はありません。遅刻も減点対象です。				
【テキスト】	印刷資料を配布。				
【参考書】	高垣 敏博ほか『ポケットプログレッシブ 西和・和西辞典 』小学館。 原誠ほか『クラウン西和辞典 』三省堂。 カルロス・ルビオほか『クラウン和西辞典』三省堂。 ＊辞書は必ず購入すること。				
【備考】	対面授業のみ。 授業中の携帯電話使用を固く禁じる。ただし、教員が指示した場合はこの限りではない。 通訳（同行通訳、司法通訳、講演通訳）、翻訳（文芸翻訳）の経験のある教員がスペイン語テクスト読解・解釈について講義する。 公欠の扱いを希望する場合は、学生室が発行する欠席届を提出すること。その際、欠席理由を証明できる書類をつけてください。詳しくは以下を参照のこと。 https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/campuslife/class/lesson-test/#53435808				
【社会人聴講生】	可。ただし、スペイン語検定4級以上のスペイン語能力を有すること。	【科目等履修生】	可。ただし、スペイン語検定4級以上のスペイン語能力を有すること。	【交換留学生】	可。ただしB1程度のスペイン語能力を有すること。また、スペイン語を日本語に翻訳する必要があることも考慮すること。

【科目名】	スペイン語表現研究Ｂ		Studies in Spanish Expression B		
【科目種別】	専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	3・4	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜4限	【オフィス・アワー】	ユニバーサルパスポート経由でアポイントを取ること。
【科目責任者】	＊照屋アンヘラ				
【担当教員】	＊照屋アンヘラ				
【授業目標】					
●授業目的	実践的なコミュニケーション表現を身につける。また、日系人社会を含むラテンアメリカの社会と文化への理解を深める。				
●到達目標	スペイン語I～IVで学んだ文法事項をベースに、スペイン語を用いたコミュニケーション・スキルを習得する。ラテンアメリカを中心に、スペイン語圏の社会と文化の知識を身につける。				
【授業概要】	ラテンアメリカ出身で通訳として活躍する講師とともに、実践的なビジネス表現をバランスよく身につけていきます。また、ラテンアメリカの社会・文化や静岡のスペイン語圏の人々のコミュニティについても学びます。スペイン語を使用する外国人支援の現場での課外学習を行う可能性があります。				
【授業方法】	授業では実際のコミュニケーションを想定した会話や作文を練習します。さらに、関連するボキャブラリーも学びます。適宜プリントやビデオなどの補助教材を用いながら、スペイン語圏の文化について学びます。				
【授業展開】	1. イントロダクション 2. Unidad 7. 「家族団らん」：願望を伝える　その1 3. Unidad 7. 「家族団らん」：願望を伝える　その2 4. Unidad 8. 「スペインのイメージ」：意見を伝える　その1 5. Unidad ８. 「スペインのイメージ」：意見を伝える　その2 6. Unidad 9. 「友達との再会」：様態・状況などを説明する　その1 7. Unidad 9. 「友達との再会」：様態・状況などを説明する　その2 8. 中間試験 9. Unidad 10. 「マドリードとその近隣を旅行する」：意見・感情・状況を伝える　その1 10. Unidad 10. 「マドリードとその近隣を旅行する」：意見・感情・状況を伝える　その2 11. Unidad 11. 「幸福になるためのアドバイス」：助言をする その1 12. Unidad 11. 「幸福になるためのアドバイス」：助言をする その2 13. Unidad 12. 「スペイン北部を旅行する」：丁寧に意見を伝える その1 14. Unidad 12. 「スペイン北部を旅行する」：丁寧に意見を伝える その2 15. まとめ				
【履修条件】	スペイン語 I～IVを履修済み、あるいは再履修中であること。 必ず予習・復習を行うこと。				
【評価方法】	平常点（授業中の発言、予習、小テストなど）＋中間・期末試験。4回以上、欠席した人には試験受験資格がありません。また、遅刻3回で欠席1回にカウントし、開始15分以降は欠席の扱いとします。				
【テキスト】	エウヘニオ・デル・プラド /齋藤華子 /仲道慎治『イメージ・スペイン語２』朝日出版社 授業中に適宜プリントを配布する（該当授業に欠席した場合は、他の受講生から自分で入手すること）。				
【参考書】	高垣 敏博ほか『ポケットプログレッシブ 西和・和西辞典 』小学館。 原誠ほか『クラウン西和辞典 』三省堂。 カルロス・ルビオほか『クラウン和西辞典』三省堂。 鼓直『プログレッシブスペイン語辞典』小学館。 ＊辞書は西和・和西とも必ず用意し、授業に持参すること。				
【備考】	対面授業のみ。 授業中の携帯電話の使用は固く禁じる（板書の写真撮影を含む。使用した場合は退室してもらう）。大学生にふさわしい態度で受講すること。 授業時間以外の質問はユニバーサルパスポートのQ＆A機能を使用すること。その際、「何のどんなところが分からないか」「それを解決するために自分は何をしたか」をきちんと説明すること。 通訳者（コミュニティ通訳、医療通訳）として実務にあたっている教員がスペイン語によるコミュニケーションについて講義する。 公欠の扱いを希望する場合は、学生室が発行する欠席届を提出すること。その際、欠席理由を証明できる書類をつけてください。詳しくは以下を参照のこと。 https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/campuslife/class/lesson-test/#53435808				
【社会人聴講生】	可。ただしスペイン語検定4級程度のスペイン語力を有すること。	【科目等履修生】	不可。	【交換留学生】	可。ただしB1程度のスペイン語能力があること。

【科目名】	西洋古典語研究II B		Western Classics II B		
【科目種別】	専門プログラム（ヨーロッパ研究）		【配当年次】	2	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	金曜4限	【オフィス・アワー】	-
【科目責任者】	有賀 雄大				
【担当教員】	有賀 雄大				
【授業目標】					
●授業目的	・ラテン語の基礎的文法および語彙を身につける。 ・ヨーロッパの文化の基盤の一つをなしたラテン語を学ぶことで、この文化をその歴史的背景から深く理解するための準備をする。				
●到達目標	・ラテン語の簡単な文章を、辞書を用いて読めるようになる。 ・ラテン語で書かれた古典を部分的に原文で読めるようになる。				
【授業概要】	ヨーロッパの文化や諸言語の重要な母体の一つである、ラテン語の基礎を学ぶ。 ラテン語はイタリア中部に生まれた言語であり、ローマ帝国の共通語であったことからヨーロッパ各地に伝播した。さらにローマ帝国崩壊後も書き言葉として存続し、いわばヨーロッパの共通言語として機能し続けた。古代・中世を通じて、主要な文学的・学問的作品の多くがラテン語で著されている。それゆえラテン語の知識は、ヨーロッパ文化の形成と発展を理解するのに不可欠な道具であると言っても過言ではない。 さらに、ラテン語の知識はヨーロッパ諸言語をその成り立ちから理解することをも可能にする。例えば現在世界における最重要言語の一つである英語にも豊富な語彙が継承されており、「主語」「科目」「被験者」といった一見多様な意味を持つ英単語 « subject » はラテン語の « sub » （＝下に） と « jectum »（＝投げられたもの）から成る。ヨーロッパ諸言語をこうしてラテン語から理解することは、現在のヨーロッパ人たちの思考を、表層的にでなく、その発想の根にまで遡って深く理解することを可能にするだろう。 この授業では、ラテン語の基礎、特に基礎文法の習得に注力する。文法を身につけることができれば、独力で辞書を引き文章を解読することができるようになるだろう。そして、文法の学習を予定通り終えることができたら、知識を定着させるため、また、上達の喜びを感じるため、さらには上述のヨーロッパ文化の礎に触れる機会とするため、ラテン語で書かれた文章の講読も行う。				
【授業方法】	指定教科書に則って進めていく。文法を学ぶと同時に、辞典等のツールの利用法も必要に応じて案内する。学期末には、可能であれば、比較的容易な古典からの抜粋を講読することを試みる予定である。ただし、各回の学習計画に変更が生じた場合には講読の時間を増減することで調整する。指定教科書に含まれている練習問題を毎回提出課題とする予定。				
【授業展開】	1. 授業のイントロダクション；前期の復習 2. 前期の復習（II） 3. 相関語句；奪格（I） 4. 関係代名詞；第4・第5変化名詞 5. 比較級と最上級；奪格（II） 6. 動詞eoの活用；未来完了 7. 命令法；不定法をともなう対格 8. 主文と従文；疑問文 9. 代名形容詞；接続法（I） 10. 独立奪格句；接続法（II） 11. 接続法（III） 12. 文章講読 13. 文章講読 14. 文章講読 15. 文章講読				
【履修条件】	前期開講科目「西洋古典語研究II A」を受講していることが望ましい。				
【評価方法】	授業への参加度（40%）、課題への取り組み（40%）及び小テスト（20%）で評価する。				
【テキスト】	有田潤, 『初級ラテン語入門』, 白水社, 1988.				
【参考書】	水谷智洋, 『羅和辞典』, 研究社, 2009年. 中山恒夫, 『古典ラテン語文典』, 2007年. Frederic M. Wheelock, Revised by Richard A. LaFleur, Wheelock’s Latin, 7th edition, Collins Reference, 2011.				
【備考】	特になし。				
【社会人聴講生】	履修可	【科目等履修生】	履修可	【交換留学生】	履修可

【科目名】	教育と共生		education and inclusive society		
【科目種別】	専門プログラム（共生社会）		【配当年次】	2～4年次	
【開講時期】	2025年度後期	【開講時限】	水曜5限	【オフィス・アワー】	水曜日/３時間目
【科目責任者】	橋本勝				
【担当教員】	橋本勝				
【授業目標】					
●授業目的	本科目では、共生社会の実現に向けて、「共生」とは、どのように定義でき、どのような社会の状態が想定でき、その実現に向けて、どのような教育の取組みが有効かを検討する。 そこで、まず、社会的な統合、共生、包摂と、社会的な排除や格差という観点から、これまでの学校教育を検証し、また日本社会の具体的な課題を検討する。次に、共生社会の実現に向けた行政の取組みの実例や学校の実践活動を検討し、個人の生き方の多様性と社会の持続可能性を両立させ、社会の共生を具現化するための教育の在り方を、学生諸氏自身の専攻や学習課題との関連で提起できるようにする。				
●到達目標	学校教育が果たしてきた機能（逆機能も含めて）や役割を、社会的な統合、共生、包摂と、社会的な排除や格差という観点から理解する。また、共生社会の実現に向けて、どういったことが具体的な課題としてあげられるかを理解する。そして、共生社会の実現に向けて、実際にどういった取組みがなされているのかを検討し、共生社会の構築のための教育の取組みを、今後における自らの学習の課題の一つとして設定できる。				
【授業概要】	学校教育が、社会の統合や共生の実現に向けて、どのような機能を果たし、また逆に、どういった問題を生じさせてきたのかを考察する。 次に、社会の共生という視点から、地域の再生、グローバライゼーション、エスニシティ、障害、性、貧困といった具体的な社会の課題について検討する。 そして、共生社会の実現に向けて、国・地方自治体、諸外国、学校の実践例を取り上げ、共生社会の実現を目指した教育の取組みを構想する。				
【授業方法】	原則として対面形式で授業を実施する。 講義を中心とするが意見交換や議論の機会を多く設ける。 法定伝染病や感染症拡大等の事情により、対面授業が困難な場合は、リモート授業を行う。 授業実施については、合理的な配慮に努める。				
【授業展開】	授業計画 第1回：排除・包摂・共生という視点から、日本の学校教育を概観する。 第2回：幼児期の教育をめぐる格差を検討する。 第3回：小学校の学力格差を考える 第4回：中学校といじめ問題 第5回：高校の学校間格差とトラッキング 第6回：高校を中退するということ 第7回：高等教育をめぐる格差は是正できるか 第8章：日本社会と学歴問題 第9回：学校の歴史から見る”男らしさ・女らしさ” 第10回：”男らしさ・女らしさ”のケーススタディ 第11章：通信制高校とサポート校の社会的意義 第12章：特別支援教育と共生社会 第13章：多文化教育の在り方　日本 第14章：多文化教育の在り方　アメリカ 第15章：多文化教育の在り方　ドイツ 定期試験（レポートの場合あり）				
【履修条件】	特に設定しない。				
【評価方法】	小レポート（30%）及び期末試験（70%）（期末試験に代えてレポートの場合あり） 原則として、欠席が5回を超えた履修者は、評価対象者としない。 小レポートの提出をもって出席にかえる、ということはしない。 原則として、５回以上欠席した者、出席の手続きの不正をはたらいた者は、評価対象としない。				
【テキスト】	必要に応じてプリントを配布する。				
【参考書】	必要に応じて指示する。				
【備考】	特記事項なし。				
【社会人聴講生】	受け入れ可。特に条件は設けない。	【科目等履修生】	受け入れ可。特に条件は設けない。	【交換留学生】	受け入れ可。特に条件は設けない。